

シラバス

シラバスの掲載ページは、P9～10の
開設科目一覧にある各授業科目の「シラ
バス頁」を参照してください。

基礎科目 基本科目 (両専攻共通)

※担当者欄の（実）は、担当者が
実務家教員であることを示します

科目名	人間学総論	副題	
担当者	生田 久美子・米山 光儀（オムニバス・一部共同）		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>本講義では、なぜヒトは「ヒューマン」（人間の「人間らしさ」を備えた存在）になれたのかをたどり、そこから、人間に備わる「社会性」という本性に基づく「教育」の起源と展開を見てゆく。次に、人間の本性として備えた特性を、一貫性、効用性（最適性）、相互性（開放性）、審美性の4つの側面に焦点を当てる。そして教育において子どもを「人間としてみる」という「人間観」と「人間」研究の関係について、受講生間の相互的な議論をとして吟味する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「人間」が何かを探求する。 2. 人間が「人間」であるということの特徴を押さえながら、「人間であること」の意味を理解する。 3. 「人間学」を踏まえた教育の在り方、人間研究の在り方を探求する。 		
授業の方法・授業計画			
1	人間の進化（1）—なぜヒトはヒューマンになれたか（生田）		
2	人間の進化（2）—「社会性」の起源（生田）		
3	人間の進化（3）—「言語」の発生と進化（生田）		
4	人間の進化（4）—「教育する」ということ（「アマラとカマラ」説再考）（生田）		
5	子どもを「人間としてみる」ということ（1）—教育と「人間観」（生田）		
6	子どもを「人間としてみる」ということ（2）—「教える」ことの意味（生田）		
7	子どもを「人間としてみる」ということから何が見えてくるか（生田）		
8	「人間モデルの教育」（1）—手細工モデル・農耕モデル・生産モデル（米山）		
9	「人間モデルの教育」（2）—動物モデルと心理学（米山）		
10	「人間モデルの教育」（3）—『教育の再興』第4部「人間モデルとその構造」（米山）		
11	教育における「善さ」の「構造」（1）（米山）		
12	教育における「善さ」の「構造」（2）（米山）		
13	教育における「善さ」の「構造」（3）（米山）		
14	「人は善くなるようにしている」とはどういうことか？（米山）		
15	まとめ—「人間学」とは何か（生田・米山）		
期末			
授業に関する連絡	本授業はほとんどの回を講義と演習の両形式で行う。演習では、履修生にレジュメ作成、グループ・ディスカッションなどで積極的参加を求める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回のレポート（60%）・発表等（40%）を基にして総合評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業後には授業内容の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	使用する文献はコピーして配布予定		
参考文献	NHKスペシャル取材班 『ヒューマン なぜヒトは人間になれたのか』、角川書店、2012年 村井実 『善さの構造』講談社学術文庫 村井実 『教育の再興』、講談社		

科目名	人間学概論 I (哲学と人間)	副題	
担当者	尾崎 博美		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>人間が教育を受けるとは何を意味するのであろうか。教育を人間が「人間性」を獲得していくもっとも広い意味で捉えるとき、改めて人間の「生活」「知性」「感情」「経験」といったキーワードが問いの対象として浮かび上がってくる。本授業では、「人間とは何か」を哲学的に問うなかで特に「生活」概念に焦点を当て、歴史、実践、現在の社会の特徴を踏まえながら、多角的に議論を行っていく。</p> <p>今年度は、ジェーン・ローランド・マーティン著『私たちの学校は「良い生活」だった』（原題: School Was Our Life）を輪読し、「生活」(Life/Living)を通して人間が育つ・成長するとはどのようなことなのか、広い意味での「教える-学ぶ」場面に即して検討していく。</p> <p>講義の序盤では、「哲学」領域での「生活」「経験」を問う議論への理解を深めるため、ジョン・デューイらの教育思想を辿ることから始める。講義の中盤では、テキストの輪読及び「生活」に関連する学校教育や地域教育の実践事例を通して、「教育」の基盤となる「哲学」の問いや視点を考察していく。</p> <p>講義の終盤では、「哲学」と「教育」「生活」の其々の分野での理論および実践研究の成果を総合的に検討し、あらためて人間性や専門的な「技術」や「知識」を育む、「良い生活」(Good Life/Living)という営みをもつ可能性について考察する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 人間の本質的な営みとしての「生活」について理解を深める。 2. 「哲学」の領域での「生活」「経験」に関する議論を理解する。 3. 「教育」「人間」において「良い生活」がどのような実践として捉えられているかを理解する。 4. 「子ども人間学」における「良い生活」論の意義について理解する。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー「人間」と「生活」		
2	「人間」を問う視点としての「生活」ー「経験」とは何か？		
3	「人間」を問う視点としての「生活」ー「成長」とは何か？		
4	「人間」を問う視点としての「生活」ー「知性」とは何か？		
5	J.R. マーティン『私たちの学校は「良い生活」だった』①		
6	J.R. マーティン『私たちの学校は「良い生活」だった』②		
7	J.R. マーティン『私たちの学校は「良い生活」だった』③		
8	J.R. マーティン『私たちの学校は「良い生活」だった』④		
9	J.R. マーティン『私たちの学校は「良い生活」だった』⑤		
10	J.R. マーティン『私たちの学校は「良い生活」だった』⑥		
11	人間性や専門的な「技術」や「知識」を育む「生活」の特徴		
12	「事例」研究①子ども 修士生の実践例の検討		
13	「事例」研究②子ども 修士生の実践例の検討		
14	「事例」研究③子ども 修士生の実践例の検討		
15	総括：人間にとって「良い生活」とは何か？		
期末			
授業に関する連絡	本授業では前半は主に講義形式、後半は演習形式での授業を行う。演習では、履修生にレジュメ作成の担当を課し、積極的な討議への参加を求める。		
評価方法及び評価基準	最終レポート(40%)、授業内で提出する小レポート(30%)、発表(30%)に基づいて評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業後は授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	J.R. マーティン著、生田久美子監訳、尾崎博美・犬塚典子・畠山大・八木美保子・今井卓実訳、『私たちの学校は「良い生活」(グッド・ライフ)だった』慶應義塾大学出版会、2021年。(なお、授業で使用する箇所をコピーしたものを配布する。)		
参考文献	<p>J.R. マーティン著、生田久美子監訳・朴順南他訳『スクールホームー<ケア>する学校』東京大学出版会、2007年。</p> <p>J.R. マーティン著、生田久美子監訳・尾崎博美他訳『カルチュラル・ミスエデュケーションー「文化遺産の伝達」とは何なのか』東北大学出版会、2008年。</p> <p>ジョン・デューイ著、上野正道他訳『明日の学校(デューイ著作集7)』東京大学出版会、2019年。</p> <p>ジョン・デューイ著、宮原誠一訳『学校と社会』岩波書店、1957年。</p> <p>レイヴ&ウエンガー著、佐伯胖訳『正統的周辺参加ー状況に埋め込まれた学習』産業図書出版、1993年。</p>		

科目名	人間学概論Ⅱ（文学と人間）	副題	
担当者	安藤 公美		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>文学は、様々な事象を言語化したテキストだが、なかでも人間の発する声なき声や、社会が生んだ答えなき難問をすくいとるのに優れている。表現の巧みさを感じるとともに、それを生み育んだ時代精神や人間心理を知る、格好のテキストといえる。本講座では、芥川龍之介の小説や童話を軸に、自己と他者、子どもと家族・教育、生き難い時代のユートピア創出、社会的存在としての人間という観点から読み進める。講読を通し、文学表現や創作技法、児童文学と小説の享受の差など、言葉や他者とともにある人間研究として理解を深める。</p> <p>文学研究の方法も現代では多様化している。芸術論、人間論、心理学、教育学、時代や国際的視点からの考察に加え、環境に即したエコクリティシズムや、〈ケア〉をキーワードとする他者との関係性、地域社会と文化的事象の共有化なども必須の観点となっている。方法論の構築とあわせて自らのテーマに即した読みの実践を行うことを通し、社会と人間と文学の関係に新たな価値創造を可能とする視点を獲得していく。</p> <p>また、文学と土地のもつ文化性を結ぶ実践的体験として文学散歩（文学のフィールドワーク・鎌倉）を予定している。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 文学講読・研究を実践し、研究の視点や方法論を理解、獲得できる。 2. 時代精神と人間心理の関係について把握し、自己と他者の関係を多角的に理解できる。 3. 文学フィールドワークの実践を通し、地域と文化事象を結びつけ、考える方法を知る。 		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス 文学と心理・子ども・教育・ケア・環境		
2	作品講読1 童話「蜘蛛の糸」解釈と討議		
3	人間性のアポリア 生命の優先性をめぐる他者と自己の関係		
4	世界に遍在する物語 お伽噺・民話・宗教説話・文学のなかの人間		
5	作品講読2 「杜子春」と「杜子春伝」解釈と討議		
6	教育の現場 学校・物語・他者・経験 どこに学ぶか		
7	生き難い時代を生きる 子どもの居場所 文学者によるユートピア創出		
8	作品講読3 「藪の中」解釈と討議		
9	ミステリか不条理文学か ポスト・トゥルースを解く		
10	1920年代と現代 死・恋愛・真相をめぐるメディアと文学		
11	映画《羅生門》（黒澤明監督）文化のリヴァイタル 白黒・演技・結末		
12	文学フィールドワークの準備1 文学と都市・トポス・観光 ※休日等に振り替えて行う		
13	文学フィールドワークの準備2 作家の生きた場所 ※休日等に振り替えて行う		
14	文学フィールドワーク 鎌倉 ※場所は変更する場合がある		
15	まとめ・〈文学〉と〈人間〉の輪郭を広げる思考 レポート提出		
期末			
授業に関する連絡	授業は、作品講読を主とし、適宜ディスカッションやグループワークを行う。講読1～3（第2、第5、第8回）では課題発見と討議を行う。フィールドワーク（第12、第13、第14回）ではレジュメを用意してのグループワークと現地調査を実施する。		
評価方法及び評価基準	講読や討議への積極性等の参加意欲と課題レポートを総合して判断、評価する。		
事前・事後学習の内容	事前：現代の文学状況を広く知る 配布資料を読み、自分の考えをまとめる 事後：文学、資料を精読し、情報の整理を行う テーマを発展的に設定する		
履修上の注意	講座では積極的な参加姿勢が望ましい。また、文学散歩を行うため、体調管理に留意し、関心をもって臨めるようにする。		
テキスト	特になし。必要に応じてプリント配布。		
参考文献	小川洋子『物語の役割』ちくまプリマー新書、2007 小谷一明『文学から環境を考える エコクリティシズムガイドブック』勉誠出版、2014 渡部泰明ほか『国語をめぐる冒険』岩波書店、2021 安藤公美『芥川龍之介 絵画 開化 映画 都市』翰林書房、2006		

科目名	人間学概論Ⅲ（政治と人間）	副題	
担当者	藤森 智子・國見 真理子（オムニバス・一部共同）		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>社会は個々の人間から形成され、社会科学の一つである政治学は広く人間の営みを扱うといえよう。本来、政治とは利害の調整の過程であるといわれる。本講座は、国家や社会の統治や政策が人間形成に与える影響の検討を主な目的とする。</p> <p>初回講義は、藤森と國見が共同で、政治の観点を中心に、国家と人間に関わる関係を概観する。藤森担当の講義では、マクロな視点では国家の統治・政策を取り上げ検討する。ミクロな視点では個々の政策と人間形成を取り上げ、ケース・スタディを行う。國見担当の講義では、国家と人間との関わりを経済、法律面から取り上げ、ケース・スタディを行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 国家に関わる社会科学的アプローチを理解する。 2. 国家と人間形成の諸相を明らかにする。 3. 国家に関わる多様な問題分析の方法を確立する。 		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス/研究課題の設定(藤森・國見)		
2	近代社会と人間(藤森)		
3	国家権力と人間(藤森)		
4	民主主義と人間(藤森)		
5	国家とナショナリズム(藤森)		
6	言語政策と人間①：近代日本を例に(藤森)		
7	言語政策と人間②：日本の植民地を例に(藤森)		
8	受講生の発表と討論(藤森)		
9	統治と人間(國見)		
10	国家権力を巡る諸問題①：行政国家現象(國見)		
11	国家権力を巡る諸問題②：財政問題を例に(國見)		
12	国家権力を巡る諸問題③：裁判員制度を例に(國見)		
13	事例検討①：統治を巡る判例検討(國見)		
14	事例検討②：人間を巡る判例検討(國見)		
15	総括(國見)		
期末			
授業に関する連絡	第2回～14回の授業では、履修者に対して、グループディスカッションを含むアクティブラーニングを実施する。適宜、履修者には授業のレジュメを作成し、発表を行うことを求める。履修者には授業に対する積極的な参加を期待する。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表・討論(50%)及び期末課題(50%)で評価する。		
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席してほしい。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めてほしい。		
履修上の注意	特になし。		
テキスト	特になし。		
参考文献	佐藤幸治「日本国憲法論」(成文堂) 別冊ジュリスト『憲法判例百選Ⅰ・Ⅱ』(有斐閣)		

科目名	人間学概論Ⅳ（芸術と人間）	副題	
担当者	安村 清美・三政 洋一（オムニバス）		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>本講義は、人間の芸術活動がいかに「人間」を人間たらしめてきたか（いるか）について、歴史的、実践的な観点から探究することを目的とする。特に、人間存在そのものである身体を対象とする舞踊学および彫刻学領域の研究を通して、時空間における芸術の表現と伝達の関係性を考察し「人間の芸術性」及び「芸術の人間性」について検討していく。</p> <p>安村担当の講義では、「人はなぜ踊るのか、舞踊はなぜ人間社会に存在し続けているのか」という問いについて、歴史と地域の中で生成され創造・伝承されてきた舞踊を概観し、さらに、舞踊各ジャンル固有の芸術領域としての特殊性とその存在の意味について、芸術の表現と伝達の関係性から探究する。</p> <p>また三政担当の講義では、人を主題とする様々な美術作品について、彫刻学を基にその表現の特徴について考察していく。人間は太古から現在に至るまで人や動植物などを立体にして表してきた。彫刻作品を中心に古今東西の美術作品を検討していくとともに、自らが土粘土を用いた実践研究を行うことで実感を伴った理解を得る。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>人間の芸術活動について舞踊、彫刻学を中心に理解を深めていくことがねらいであり、次の到達目標を設定する。</p> <p>1. 舞踊について</p> <p>①伝承文化及び比較文化の観点から海外、日本の舞踊について理解する。 ②演じられた人間像としての芸術舞踊であるバレエについて理解する。 ③舞踊芸術の表現と伝達性との関係性について、歴史と地域の中で生成され選択されてきた意味について考察する。</p> <p>2. 彫刻について</p> <p>①カービング、及びモデリングによる彫刻表現の特徴について理解する。 ②近・現代における様々な美術作品を観ていくことで人間の為す形について考えを深める。 ③塑造による表現を実践し、立体造形における造型要素について理解する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	人間存在そのものである身体を対象とする舞踊学の研究概観（安村）		
2	舞踊文化の概観―歴史と地域の中で生成され伝承されてきた舞踊（安村）		
3	伝承文化としての舞踊の比較検討（安村）		
4	芸術としての舞踊―演じられ語られた人間像①バレエ及びバレエ以降（安村）		
5	芸術としての舞踊―演じられ語られた人間像②現代（安村）		
6	芸術としての舞踊―演じられ語られた人間像③生き続ける民俗舞踊（安村）		
7	舞踊芸術の表現と伝達との関係性―身体と舞踊の今日的課題（安村）		
8	美術史における彫刻概観―人間による人体造形について考える（三政）		
9	造形芸術に見る造形要素（三政）		
10	造形要素①―ボリューム（量）（三政）		
11	造形要素②―プラン（面）（三政）		
12	造形要素③―プロポーション（比例均衡）（三政）		
13	造形要素④―ムーブマン（動勢）（三政）		
14	造形芸術における人間像（三政）		
15	舞踊および造形芸術と人間について（まとめ）（安村、三政）		
期末			
授業に関する連絡	本授業では内容に応じ講義形式、演習、実習形式で授業を行う。第3回～第7回、第9回～第14回では講義に加え、履修生が課題を探索し、課題に関する発表や実践を通してグループ・ディスカッションを行う。		
評価方法及び評価基準	レポート(50%)および発表(50%)に基づいて総合的に判断する。		
事前・事後学習の内容	事前学習：シラバスを確認し、授業に関わる内容について予習すること。事後学習：学習した内容について各種文献等を用いて検討し、理解を深めること。		
履修上の注意	芸術に関心を持ち、意欲的に授業に臨むこと。		
テキスト	授業時に紹介する。 授業時にプリントを配布する。		
参考文献	「考える身体」三浦雅士、1999、NTT出版、 「造型美論」高村光太郎、1942、筑摩書房		

科目名	人間学概論Ⅴ（自然と人間）	副題	
担当者	仙田 考		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>本講義では、「自然」と「人間」の両者に関連させながら、「自然と人間の関わり」及び「自然体験」をテーマにして、理論と実践の両側面から考察する。</p> <p>自然がなぜ人間にとって必要な存在であるのか、子ども・自然とのふれあい体験・生活環境・栽培・食環境・癒し・アート・まち・気候変動等の視点から、理論と実践を通して考察する。また地球温暖化の抑制、持続可能な社会づくりに向けて、私たちがなにができるのか、SDGs、ESD、生物多様性保全、自然と人間の共生等の視点も含め、自然と人間の関わりについて探っていく、将来の「自然」と「人間」との課題をともに考えてみたい。</p> <p>学外授業においては、自然環境・施設への訪問を通して、自然の中で仲間とともに自然を感じ、自然と里山、「自然」と人間との関係について考察する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自然と人間の深い関わりについて理解する。 2. 自然が人間形成に与える影響について理解する。 3. 学外授業を通して、「自然」と「人間」との関係を過去と現在までを鳥瞰し、今後の関係を理解する。 		
1	「自然」はなぜ人間にとって必要か		
2	子どもと自然		
3	生活環境と自然		
4	食環境と自然		
5	栽培と自然		
6	自然のもつ癒しの力		
7	里山と自然		
8	野外活動における心得、準備 ～登山の理論、実際の方法		
9	自然環境、関連施設等の実際（1）		
10	自然環境、関連施設等の実際（2）		
11	自然環境、関連施設等の実際（3）		
12	自然とあそび、アート		
13	まちと自然		
14	SDGs、気候変動、生活、環境と自然		
15	まとめ及び今後の自然と人間の課題を考える		
期末			
授業に関する連絡	<p>本授業では講義や演習、学外研修等を取り入れて行う。</p> <p>第2, 7, 9, 11, 12, 13, 14, 15回はグループディスカッションを実施する。</p>		
評価方法及び評価基準	授業での発表・課題（50%）及びレポート（50%）を総合的に判断し評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業後に反復学習をすること。安全な学外学習を行うための準備をすること。		
履修上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・自然と人間形成の関係、自然環境保全等に問題意識をもって、本授業に臨み、主体的・積極的に議論に参加すること。 ・屋外で自然活動（栽培等）を行うことがある。服装・靴に配慮要。 ・学外授業（自然環境施設等の実際の視察）では、事前から健康に留意し、体力をつけておくこと。学外授業にかかる交通費等は自己負担。 		
テキスト	特になし		
参考文献	<p>リチャード・ループ『あなたの子どもには自然が足りない』早川書房、2006</p> <p>宮崎良文『森林浴 心と体を癒す自然セラピー』創元社、2018</p> <p>フローレンス・ウィリアムズ『NATURE FIX 自然が最高の脳をつくる』NHK出版、2017</p> <p>ほか授業内で紹介</p>		

科目名	人間学研究法	副題	
担当者	犬塚 典子・櫻井 優太 (オムニバス)		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>人間学研究に必要とされる学術的な思考の基礎を培うとともに、データ収集の技法や各種の方法論的アプローチ、さらには修士論文作成の手法について理解を深める。</p> <p>初回の授業オリエンテーションの後、櫻井担当の7回は、実証的研究(量的研究)の理論と実際を学ぶ。また、なぜ方法論的に対立する量的、質的研究者がともに人間学研究を発展させて来たのかについて、存在論、認識論のリフレクションから考察する。犬塚担当の7回は、大学院教育の歴史、学術の動向、質的研究に関する知識と技法を学ぶ。関連領域の基礎的な論文を読み、先行研究の検討、文献リストの作成、概念・言葉の定義、論点・議論の整理法などを身につける。まとめとして、KJ法、セブン・クロス法のワークショップを行い、修士論文のアウトライン作成を試みる。最後に、著作権、研究倫理について学習し研究倫理e-learningを受講する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 量的研究方法および質的研究方法について基本的な理解を深める。</p> <p>2. 各自の研究テーマにおけるリサーチクエスションと合致した研究方法を見出す。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	授業オリエンテーション (犬塚・櫻井)		
2	現象を数量化するとは (櫻井)		
3	実証的研究①観察法 (櫻井)		
4	実証的研究②実験法 (櫻井)		
5	実証的研究③質問紙調査法 (櫻井)		
6	実証的研究④面接法 (櫻井)		
7	実証的研究⑤その他の研究法 (櫻井)		
8	横断的研究と縦断的研究 (櫻井)		
9	大学院教育における学位論文とコースワーク (犬塚)		
10	量的研究と質的研究 (犬塚)		
11	学術の動向を知る：先行研究レビュー (犬塚)		
12	概念の定義、歴史的な位置づけ、具体と抽象、モデル化 (犬塚)		
13	論文に使われる表現 (犬塚)		
14	情報をどう整理するか：KJ法とセブン・クロス・ワークショップ (犬塚)		
15	著作権、書誌事項、研究倫理審査 (犬塚)		
期末			
授業に関する連絡	全回を通じて修士論文執筆のための課題発見・解決型の学習活動を行う。第11回～第15回はワークショップを実施する。		
評価方法及び評価基準	毎回の討議等への貢献度(50%)、課題提出の内容(50%)を総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	研究活動の進め方、論文の書き方などアカデミック・スキルズに関する情報収集および整理を常に行うこと。		
履修上の注意	毎回の授業内容を参照して各自の課題研究を進めること。		
テキスト	配布資料を中心に進める。		
参考文献	佐藤功 (2023) 『13歳から鍛える具体と抽象』 東洋経済新報社		

専門科目

(子ども人間学専攻)

※担当者欄の（実）は、担当者が
実務家教員であることを示します

科目名	学び学特論	副題	
担当者	生田久美子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	「学ぶ」ということ、「知る」ということ、また「理解する」ということは同義であるか？違いがあるとするならば、それらはどのような関係にあるのか？本講義では、哲学、認知科学(心理学を含む)の学問領域における「学び論」の系譜を辿りながら、新しく生まれ変わり、発展してきている人間学の一領域としての「学び論」に焦点をあてて考察する。最終的に、人間学的観点から発展させた「学び論」を提示する。		
授業のねらい・到達目標	1・「学ぶ」ということと「知る」ということの違いを理解する。 2・「学び観」を構成している「能力」「知識」「上達」「育つ」「ひらめく」という概念を理解し、「学び」と「教育」との関係を理解する。 3・人間学的観点からの「学び論」を自らが生成・吟味し成果を発表する。		
授業の方法・授業計画			
1	「学び」と「情報の獲得」との違い		
2	「学び」と「知る」や「知識」との違いへの注目		
3	『私たちはどう学んでいるのか』を通して6つのテーマについて考えることの意味。		
4	①「能力」とは何か		
5	①「能力」とは何か		
6	②「知識」とは何か		
7	②「知識」とは何か		
8	③「上達」とは何か		
9	③「上達」とは何か		
10	④「育つ」とは何か		
11	④「育つ」とは何か		
12	⑤「ひらめく」とは何か		
13	⑤「ひらめく」とは何か		
14	⑥「教育」とは何か		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	毎回、最後の10分で授業についての質問、コメントを「リアクション・ペーパー」に書いて提出する。		
評価方法及び評価基準	講義の区切れ目で、レポートを提出する(50%)。講義の最後には講義全体を振り返ってのレポートを提出する(50%)。それらを基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	講義の展開過程で逐次、参考文献を紹介するので、できるかぎりそれらを事前に読むことが求められる。		
履修上の注意	全講義に出席のこと		
テキスト	鈴木宏昭著『私たちはどう学んでいるのか』筑摩書房2022		
参考文献	J.レイヴ&E.ウェンガー著佐伯 胖訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書、1993年		

科目名	保育学特論	副題	
担当者	内藤 知美 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>子どもは多様な関係性の中で学び、育つ存在である。また保育という営みは、子どもだけではなくそこに関わる保護者や保育者、そして地域、社会の学び、育ちと深く関わる。社会文化的視点から、多様で複雑な状況や文脈において生成される人間の「学び」や「育ち」を捉えるための視座を得るとともに、子どもが今を生きる「保育フィールド」の力動性や構造を読み解く方法について検討する。現在、「子ども人間学」と通底する観点から、保育を構築しようとする動きが生まれている。ニュージーランドの「テファリキ」を始めとする海外の保育の動向を捉えながら、多様で複雑な歴史、文化、社会が織り成すダイナミズムの中で、子どもが学びに向かう力や人間性を育むプロセスとそこに関わる人々（保育者、保護者等）のあり様を探究する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるまなざしを問い直し、子どもが今を生きる場（保育フィールド）の構造や力動性を捉えるための視点を学ぶ。また保育フィールドで生成する多様で多層なことがらについての具体的な事例を検討することで、それらが子どもの学びや育ちにいかに関わるのか、その「意味」を解釈する様々な視点を学ぶ。</p> <p>2. 海外の保育の動向から、子どもを起点に、保育にかかわる多様な人々が学び、変容するプロセスを捉える。そのことを通じて、保育が有する豊かな資源と新たな社会のあり方を構想する可能性を探る。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	保育のまなざし—教える、教えられる—		
2	子どもか子どもたちかという「問い」		
3	子どもの学びと育ちを捉える（1）発達と育ち		
4	子どもの学びと育ちを捉える（2）社会文化的アプローチ		
5	保育フィールドの構造と理解		
6	遊びを通じた保育（1）事例検討：身体的であること		
7	遊びを通じた保育（2）事例検討：共同的、協働的であること		
8	子どもに対する気づき（1）事例検討：なぜ気づくのか		
9	子どもに対する気づき（2）事例検討：枠組みの再構築		
10	保育における対話と同僚性		
11	保育実践と構造（1）：NZのテファリキの原理		
12	保育実践と構造（2）：NZの学びの物語と評価		
13	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（1）：学びあい		
14	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（2）：世代間循環		
15	まとめ：保育の課題と展望		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と毎回のグループディスカッションによる演習形式で行う。演習では、文献講読および実践事例を基にした双方向・多方向からのディスカッションを行うため、レジュメを担当者は作成すること。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業中に適宜参考文献を紹介する。事前学習としては、参考文献を読んで授業へ臨むこと。また、事後学習としては、授業の内容を振り返り、さらに関連・関心のある参考文献を読み込み、自分の考えを整理すること。		
履修上の注意	各自のテーマ・関心から授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	川田学(2019) 『保育的発達論のはじまり』 ひとなる書房 マーガレット・カー・ウェンディ・リー著(2020) 『学び手はいかにアイデンティティを構築していくか』 ひとなる書房 マーガレット・カー著大宮勇雄・鈴木佐喜子訳(2013) 『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』 ひとなる書房		
参考文献	入江礼子・友定啓子編(2015) 『津守眞講演集 保育の現在-学びの友と語る-』 萌文書林 佐伯胖編(2017) 『「子どもがケアする世界」をケアする』 ミネルヴァ書房 日本保育学会編(2016) 『保育学講座 I 保育学とは一問いと成り立ち』 東京大学出版会		

科目名	教育的ケアリング特論	副題	
担当者	吉國 陽一		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>社会的な動物である人間にとってケアリングは生きることの根底にある営みと言える。一方で、ケアリングは生産優位の産業社会の中で女性というジェンダーに結び付けられながら、シャドウ・ワーク（支払われない仕事）としてその価値を貶められてきた経緯がある。文化人類学者のデヴィット・グレーバーによれば、全ての労働は本来、他者をケアしながら社会に貢献するという意味でケアリング労働であるが、生産としての労働からケアリング的側面が排除されたという。その結果、社会的価値のないブルシット・ジョブ(クソみたいな仕事)の増殖と、保育や福祉、教育など本来社会的価値がある仕事のシット・ジョブ(クソ扱いされる仕事=労働条件の劣悪な仕事)化を招いているとグレーバーはいう。</p> <p>本授業では上記のような背景を踏まえて、保育・教育をより人間的な営みとして再解釈し、編み直す上でケアリングの理論がもつ可能性について理解を深めることを目指す。第2～4回はミルトン・メイヤロフの『ケアの本質』を購読し、ケアリングの基本的な特徴について議論する。第5回から11回はジェーン・ローランド・マーティンの『スクールホーム—<ケア>する学校』を講読し、ケアリングを含む3C（Care=ケア、Concern=関心、Connection=つながり）の観点から幼児教育・初等教育のあり方について議論する。第12回～15回はネル・ノディングズの『幸せのための教育』を講読し、ケアリングの視点を踏まえて保育・教育の目的について議論する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ケアリングの概念とケアリングを取り巻く現代の社会的コンテクストが理解できる。 ・ケアリングという行為の意味とそれを構成する要素について理解できる。 ・マーティンの3C（Care=ケア、Concern=関心、Connection=つながり）に基礎を置くスクールホームの構想について理解できる。 ・ノディングズの幸せを目的とする教育の含意と意義を理解できる。 ・ケアリングの観点から受講者それぞれの実践を再解釈することができるようになる。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション		
2	文献購読① 『ケアの本質—生きることの意味』 - 他者の成長を助けることとしてのケア -		
3	文献購読② 『ケアの本質—生きることの意味』 - ケアの特質 -		
4	文献購読③ 『ケアの本質—生きることの意味』 - ケアは生に何をもちたすか -		
5	文献購読④ 『スクールホーム—<ケア>する学校』 - 私的領域と公的領域 -		
6	文献購読⑤ 『スクールホーム—<ケア>する学校』 - 学校と家庭 -		
7	文献購読⑥ 『スクールホーム—<ケア>する学校』 - 文化とカリキュラム -		
8	文献購読⑦ 『スクールホーム—<ケア>する学校』 - 3Cと中庸の徳 -		
9	文献購読⑧ 『スクールホーム—<ケア>する学校』 - 抑圧された家庭的事柄 -		
10	文献購読⑨ 『スクールホーム—<ケア>する学校』 - 家庭と世界 -		
11	文献購読⑩ 『スクールホーム—<ケア>する学校』 - 3Cと保育・教育 -		
12	文献購読⑪ 『幸せのための教育』 - 幸せとは何か? -		
13	文献購読⑫ 『幸せのための教育』 - 苦しみと不幸せ -		
14	文献購読⑬ 『幸せのための教育』 - ニーズと欲求 -		
15	文献購読⑭ 『幸せのための教育』 - 幼児教育・初等教育の目的を問う -		
期末			
授業に関する連絡	第2回～15回の授業は全て、双方向・多方向に行われる討議を伴う授業（文献購読に基づく各自のレジュメの検討とグループディスカッション）により行う。 文献購読にあたり、各自に作成してもらったレポートには授業の中でコメントを行う。		
評価方法及び評価基準	毎回の授業で提出する小レポート（70%）及び授業におけるディスカッション（30%）により評価を行う。		
事前・事後学習の内容	毎回の授業で扱う文献の該当箇所を読み、自分の実践や研究上の関心に照らして考察したレポートを作成する。 毎回の授業内容について復習をする。		
履修上の注意	自分の実践や研究テーマに照らし、問題意識をもって毎回のディスカッションに参加することを期待する。		
テキスト	ジェーン・R・マーティン 生田久美子監訳『スクールホーム—<ケア>する学校』 東京大学出版会、2007年 ネル・ノディングズ 山崎洋子監訳『幸せのための教育』 知泉書館、2008年 ミルトン・メイヤロフ 田村真・向野宣之訳『ケアの本質—生きることの意味』 ゆみ出版、1987年		
参考文献	デヴィッド・グレーバー s酒井隆史他訳『ブルシット・ジョブ クソどうでもいい仕事の理論』 岩波書店 2020年 ジェーン・R・マーティン 村井実他訳『女性にとって教育とはなんだったか—教育思想家たちの会話』 東洋館出版社 1987年 広井良典『ケア学 越境するケアへ』 医学書院 2000年 ジョアン・C・トロント 岡野八代訳・著『ケアするのは誰か？ 新しい民主主義のかたちへ』 白澤社 2020年 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレール館 2018年 文部科学省『小学校学習指導要領』東洋館出版社 2018年 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』 東洋館出版社 2018年 ネル・ノディングズ 佐藤学他訳『ケアリング 倫理と道徳の教育—女性の観点から』 晃洋書房、1997年 ネル・ノディングズ 佐藤学他訳『学校におけるケアの挑戦—もう一つの教育を求めて』 ゆみ出版、2007年 徳永哲也『正義とケアの現代哲学』 晃洋書房 2021年		

科目名	子ども思想史特論	副題	
担当者	杉下 文子		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>「子ども（幼児）」という存在は、教育思想史の中でどのように捉えられていたのであろうか。本講では「子どもの発見者」といわれるJ. J. ルソーの教育論『エミール』をひもとき、ルソーは何を「発見」したのかを考察する。授業では、ルソーの教育論やそれが持つ教育思想史上の意義について講義をするとともに、演習形式で『エミール』の第1、2編を読み、ルソーが語る「子ども」を受講生自身にとらえてもらう。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・「子どもの発見」とはどのようなことかを理解する。 ・教育学の古典に親しむ。 ・西洋近代教育の礎を作ったとも言われるルソーの思想と、その後世への影響について理解する。 ・現代社会における「子ども」や私たちの持つ子ども観を客観視することで捉え直し、子どもたちを育む保育や教育活動のあり方について考察を進めることができる。 		
授業の方法・授業計画			
1	オリエンテーション		
2	ルソーの教育論についての基礎知識①		
3	ルソーの教育論についての基礎知識②		
4	『エミール』序を読む		
5	『エミール』第1編を読む①		
6	『エミール』第1編を読む②		
7	『エミール』第2編を読む①		
8	『エミール』第2編を読む②		
9	『エミール』第2編を読む③		
10	『エミール』第2編を読む④		
11	『エミール』第2編を読む⑤		
12	『エミール』第3編概観		
13	現代におけるルソーの教育観・子ども観の意義（発表）①		
14	現代におけるルソーの教育観・子ども観の意義（発表）②		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	授業は、講義と演習を組み合わせで行う。演習では、受講者にレジュメを作成して、発表してもらう。受講生の都合によってはオンライン形式で行う。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回の小レポート（50%）及び発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	『エミール』の序および第1編は開講前に読み、疑問点や意見を整理しておくことが望ましい。第2編は受講生の発表で進めるが、担当しない場合にも範囲をよく読んで授業に臨むことが求められる。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすることが望まれる。		
履修上の注意	授業内の議論に対する積極的な参加を求める。		
テキスト	ルソー著、今野一雄訳『エミール』上巻、岩波文庫（第74版改版以降の版を用意すること）		
参考文献	ルソー著、今野一雄訳『エミール』中巻、下巻、岩波文庫 ルソー著、桑原武夫・前川貞次郎訳『社会契約論』、岩波文庫 今井康夫編、『教育思想史』有斐閣アルマ、2009年		

科目名	保育実践研究	副題	
担当者	高嶋 景子		
開講期	前期(隔年)	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>「保育」という営みを探究していくためには、その実践的課題を、個々の保育者や子どもの持つ「能力」や「技術」の問題としてではなく、その「実践」に関わる多様な他者やモノ、環境等との関係の中で多層的に捉える視座が必要となる。そのように多層的に保育の営みを捉えながら、「子ども人間学」的観点に立って、自らの実践を省察していくまなざしを獲得していくため、本授業では、一人一人の受講者が実践的な場におけるフィールドでの観察や自らの実践を通して得た事例を基に、そこから見出される課題を共有し、「質の高い実践」とは何か、その在り方や構造について検討し、探究していく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>保育という営みにおける具体的な事例のなかから、そこで問われるべき実践的課題を抽出し（「問い」を見出し）、それらを周囲の多様な他者やモノ、環境等との関係の中で適切に「問う」ことのできる視座を獲得していくと同時に、その視座を基に、子どもの育ちやその育ちを支える保育の在り方について探究していくことを目的とする。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	「子どもをみる」ということ①～子どもをみるまなざしを規定する子ども観・発達観/自らの枠組みへの気づき～		
3	「子どもをみる」ということ②～「子どもを共感的にみる」ということの意味～		
4	「子どもをみる」ということ③～「子どもの育ちをみる」ということ/共感的理解を妨げるもの～		
5	実践事例研究Ⅰ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く関係構造への着目～		
6	実践事例研究Ⅰ②～各自の事例報告と討議：「気になる子」を生み出す関係構造～		
7	実践事例研究Ⅰ③～各自の事例報告と討議：子どもの「遊び」と仲間集団～		
8	実践事例研究Ⅰ④～各自の事例報告と討議：「遊び」を支える活動媒体としての「モノ」への着目～		
9	保育という営みを問い直す①～「ある」から「なる」を支える保育とは～		
10	保育という営みを問い直す②～「子どものケアする世界をケアする」ということの意味～		
11	実践事例研究Ⅱ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く実践共同体への着目～		
12	実践事例研究Ⅱ②～各自の事例報告と討議：保育の場における実践共同体の持つ多層性～		
13	実践事例研究Ⅱ③～各自の事例報告と討議：実践共同体の「境界」とその柔軟性の持つ意味～		
14	実践事例研究Ⅱ④～各自の事例報告と討議：子どもの育ちを支える保育者のまなざしと援助～		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	<p>本授業は講義と演習の両形式で行う。第5～8回、第11～14回は、受講者自らの観察事例もしくは実践事例と、その事例に対する考察の発表を行い、それらに対する討議を中心に授業を展開していく。それらの事例報告と討議を通して、各自の研究課題の発見や実践を読み解くための多角的な視点の獲得に繋げていくことを目指す。</p>		
評価方法及び評価基準	<p>授業内の発表や討議（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。</p>		
事前・事後学習の内容	<p>授業において、実践的な場におけるフィールドでの観察、もしくは、自らの実践を通して得た事例、および、その事例に対する考察の発表を行うため、それらの事例の収集と検討を行うこと。また、授業後は、授業時の他の事例の発表や討議の振り返りを十分に行い、自分なりの考察を深めていくこと。</p>		
履修上の注意	<p>実践事例の収集のために保育現場での観察等が必要となる場合、対象園の選定や依頼については、事前に授業担当教員へ相談すること。</p>		
テキスト	未定		
参考文献	<p>子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房, 2013年 岸井慶子著『見えてくる子どもの世界—ビデオ記録を通して保育の魅力を探る—』ミネルヴァ書房, 2013年 大宮勇雄著『学びの物語の保育実践』ひとなる書房, 2010年 柴山真琴著『子どもエスノグラフィー入門—技法の基礎から活用まで—』新曜社, 2006年</p>		

科目名	保育者特論	副題	
担当者	高嶋 景子		
開講期	前期(隔年)	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>子どもが主体となって自ら学ぶプロセスをして展開される保育においては、常に、予想外の出来事が生じ、刻々と状況が複雑に変化していく。保育者は、そのような複雑な状況と対話しつつ、眼前の子どもの思いや課題を丁寧に探り、その育ちを支える関わりや活動の在りようを検討し、実践していくことが求められる。そうした保育者の専門性は、D.ショーンの指摘するように、体系的な知識や法則を適用して問題を解決するような「技術的合理性」によって成り立っているものではなく、「反省的实践家」として、その在りようを読み解いていく必要があると考えられる。本講義では、そうした保育者の専門性について探究するため、まずは、「保育」という営みや、そこでの子どもの学びや育ちを理解するための視座を検討し、それを踏まえて、保育者の専門性と、その専門性の深まりを支える「省察」のプロセスと周囲の関係構造について考察していくこととする。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるための保育者のまなざしの在りようを探ると同時に、それらの「学び」や「育ち」を支える保育実践の構造と、それを実践する保育者の専門性を読み解くための様々な視点を学ぶ。 2. 保育者の専門性が深まっていく過程と、その過程を支える周囲の関係構造について探究していくための問いの持ち方、考え方を獲得する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	保育者の専門性に関する研究の動向（1）～歴史の変遷を辿る～		
3	保育者の専門性に関する研究の動向（2）～近年の研究動向を探る～		
4	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（1）～個体能力論から関係論的アプローチへの転換～		
5	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（2）～保育者を取り巻く多様な関係構造への着目～		
6	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（3）～正統的周辺参加論とは～		
7	「保育者になるということ」（1）～「子どもの声を聴く」とは～		
8	「保育者になるということ」（2）～子どもがケアする世界をケアするために：鑑識眼的なまなざし～		
9	「保育者になるということ」（3）～子どもがケアする世界をケアするために：保育における即興性～		
10	「保育者になるということ」（4）～子どもと保育者の相互主体性～		
11	保育者の学びを支える多様な対話（1）～省察的实践家としての保育者の専門性～		
12	保育者の学びを支える多様な対話（2）～事例を通して読み解く「省察」の生成過程～		
13	保育者の学びを支える多様な対話（3）～「省察」を引き出す保育カンファレンスの意義と役割～		
14	保育者の学びを支える多様な対話（4）～対話のもつ「多声性」への着目～		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献購読及び実践事例を基にした討議を行うためのレジユメの作成の担当を課す。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジユメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分にして自分の考えを整理すること。		
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探究心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。		
テキスト	未定		
参考文献	<p>子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房, 2013 倉橋惣三著『幼稚園真諦』フレーベル館, 1998 佐伯胖編著『「子どもがケアする世界」をケアするということ』ミネルヴァ書房, 2017</p>		

科目名	子ども・子育て支援実践研究	副題	
担当者	犬塚 典子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	子ども・子育て支援の実践について、前半は、家族の機能について理論的な学習を行い、OECD諸国の動向についてカナダに焦点をあてて討議する。後半は、日本の新聞、自治体広報など各種メディアの記事を共同で分析し、子育て支援実践のための理論、政策、財政のありかたについて検討する。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本の子ども・子育て支援施策の変遷および現状について理解する。 2. 海外における施策や実践との比較から、日本の子ども・子育て支援制度の内容について理論的・実証的に分析する視点を身につける。 3. 現代社会の子ども・子育て環境やその実際について研究的な問題意識をもつようになる。 		
授業の方法・授業計画			
1	家族の機能について考える (1) マードックの核家族の4機能		
2	家族の機能について考える (2) ポルトマンの仮説「生理的早産」		
3	家族の機能について考える (3) 保育・幼児教育の市場化		
4	子ども・子育て支援と家族・ジェンダーの多様化：海外の絵本を読む		
5	子ども・子育て支援に関する海外の枠組：カナダの大学テキストを読む		
6	OECD諸国における子ども・子育て支援		
7	カナダにおける子ども・子育て支援		
8	日本の子ども・子育て支援政策の変遷ならびに現状についての討議		
9	日本の子育て支援施設の訪問・見学		
10	日本の子ども・子育て支援事例の検討 (1) 事業所内保育施設についての討議		
11	日本の子ども・子育て支援事例の検討 (2) 幼稚園・保育所・認定こども園についての討議		
12	日本の子ども・子育て支援事例の検討 (3) 病児・病後児保育についての討議		
13	日本の自治体が行う政策事例に対する討議 (1)		
14	日本の自治体が行う政策事例に対する討議 (2)		
15	子育て支援すごろくの作成		
期末			
授業に関する連絡	全回を通じて子ども・子育て支援に関する課題発見・解決型の学習活動を行う。第8回～第15回は学生による発表と討議、実地見学、ワークショップを行う。		
評価方法及び評価基準	毎回の討議への貢献度を総合して評価する。		
事前・事後学習の内容	国内の政策や実践例について情報収集および整理を常に行うこと。また、毎回の授業内容を参照しつつ各自の課題研究を進めること。		
履修上の注意	課題発表のために授業時間外での研究調査を必要とする。		
テキスト	配布資料を中心に進める。		
参考文献	OECD『OECD保育白書』明石書店、2011年。		

科目名	児童家庭福祉特論	副題	
担当者	篠原 拓也		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>当授業では、社会福祉ないしソーシャルワークとは何かという基本的な問題意識の上で先行研究を概観しつつ、児童家庭福祉の議論に臨む。</p> <p>「子ども（児童）」「親」「家庭（家族）」などの児童家庭福祉に関する基本的な概念を、社会福祉の歴史に照らして再考しつつ、その上で市区町村や児童相談所、学校などにおける社会福祉やソーシャルワークの意義と課題について考察することを目的とする。特に当授業では、児童福祉司とスクールソーシャルワーカーを例に、社会福祉専門職における、さまざまな社会的機能に対して批判的に考察する力を身に着ける。</p> <p>また、修士論文等を意識して、論文の作成に係る基本的知識・技術・倫理について学習する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「子ども」「親」「児童」など、児童家庭福祉に関する基本的な概念を、社会福祉の歴史に位置づけて理解できる。 2. 児童家庭福祉領域の社会福祉ないしソーシャルワークの意義と課題を、歴史的・現代的な視点から考察できる。 3. 児童家庭福祉に関する先行研究を読み解き、批判的に考察するとともに、自身の研究上の関心を当該の学問体系や先行研究に結びつけて構想・設計できる。 		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス：授業の進め方		
2	社会福祉学および児童家庭福祉、児童ソーシャルワーク		
3	「子ども」「親」「家庭」の概念1		
4	「子ども」「親」「家庭」の概念2		
5	「子ども」「親」「家庭」の概念3		
6	児童家庭福祉領域の専門職の機能と意義		
7	児童家庭福祉における論文の構成方法1：学問体系上の位置づけ		
8	児童家庭福祉における論文の構成方法2：先行研究の渉猟と分析		
9	各自の研究の進捗、文献紹介、ディスカッション1		
10	各自の研究の進捗、文献紹介、ディスカッション2		
11	各自の研究の進捗、文献紹介、ディスカッション3		
12	各自の研究の進捗、文献紹介、ディスカッション4		
13	各自の研究の進捗、文献紹介、ディスカッション5		
14	各自の研究の進捗、文献紹介、ディスカッション6		
15	まとめ：学術論文に関する構想・到達点へのフィードバック		
期末			
授業に関する連絡	講義と演習を適宜、組み合わせて行う。第7回から15回は、履修生がレジュメを作成し、ワークショップやグループディスカッションを含む授業を実施する。また、受講者の研究領域の性質と関心に合わせて実地での体験活動や企業等と連携した授業も行う。		
評価方法及び評価基準	授業内のディスカッションへの貢献度（50%）、自身の担当する発表（50%）		
事前・事後学習の内容	すべての研究は先行研究の分析から出発する。当科目ならびに自身の研究テーマの研究動向に対して、普段から学術文献に触れる習慣を身につけてほしい。そのために毎授業、事前に2時間程度、事後に2時間程度、読書時間を確保すること。		
履修上の注意	内容や受講者の関心に合わせて進行を変更する可能性がある。調査や文献収集・分析等、授業時間外での研究作業を必要とする。		
テキスト	授業内容や受講者の関心に即して指定する。		
参考文献	<p>野上暁『子ども学 その源流へ——日本人の子ども観はどう変わったか』大月書店、2008年</p> <p>佐藤忠男・山村賢明編『児童の理解1——現代社会と子ども』東洋館出版社、1970年</p> <p>『岩波講座 子どもの発達と教育2——子ども観と発達思想の展開』岩波書店、1979年</p>		

科目名	家族社会学特論	副題	
担当者	小玉 亮子		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>家族が歴史的構築物であることが認識されるようになり、それまでの家族を本質から語るような議論ではなく、家族を社会的構築物としてみなす、いわゆる家族社会学のパラダイム転換が起こった。そして、そこから近代以降において子どもに対する家族と学校の影響力は歴史的に未だかつてないほど強力なものとなったことがあきらかにされてきた。しかし、近代以降の家族と学校はいつでも期待される機能を十全に果たし得るとは限らない、家族と学校はそれぞれ課題に直面し、両者の関係は、複雑に問題を抱えることとなった。こういった家族と学校の複雑な関係に焦点を当てて、幼児教育を視野にいれながら家族の問題について社会学的に分析する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>社会学的な家族認識を学び、家族をマクロな視点及びミクロな視点から分析することによって、自らが無意識のうちにもつ家族観が普遍のものではないことを学び、自らの家族観を相対化することを試みる。</p> <p>同時に、家族について学校や地域との関係に焦点を当てて、家族が単独のシステムとしてあるのではなく、グローバル化が進む社会にあって、様々なシステムと相互的に存在していることを理解する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	家族を論じるために		
2	家族問題は何が問題か		
3	家族社会学のパラダイム転換（家族形態から）		
4	家族社会学のパラダイム展開（家族関係から）		
5	近代家族とは何か		
6	近代家族と子ども		
7	近代家族とジェンダー		
8	社会変動の中の家族と教育（日本）		
9	社会変動の中の家族と教育（世界）		
10	子どもの発達と家族		
11	家族と学校の連携		
12	地域社会と家族		
13	グローバル社会と家族（途上国）		
14	グローバル社会と家族（先進国）		
15	家族のゆくえ		
期末			
授業に関する連絡	<p>社会における家族イメージを知るために、幼児教育と家族に関する新聞等の報道に注意しておくことは授業を受ける上で有益となる。</p>		
評価方法及び評価基準	<p>授業への参加及び、小レポートと研究発表を元に総合的に評価する。</p>		
事前・事後学習の内容	<p>事前に授業前の課題を伝えるので、その課題に取り組むこと。 授業後には、各自の問題意識に沿ったまとめを行うこと。</p>		
履修上の注意	<p>各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って授業に参加すること。</p>		
テキスト	<p>小玉亮子編(2020)『幼児教育』ミネルヴァ書房</p>		
参考文献	<p>藤崎宏子・池岡義孝編『現代日本の家族社会学を問う』ミネルヴァ書房 小玉亮子編(2017)『接続期の家族・園・学校』東洋館出版社</p>		

科目名	子ども政策特論	副題	
担当者	渡邊 英則(実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	平成27年度から国の子どもや子育てに関する制度が大きく変わった。これまで縦割り行政で分かれていた幼稚園と保育所を、幼保連携型認定こども園という一つの制度としていく動きもこの制度改革の大きな柱になっている。また平成30年度からの学習指導要領改訂の動きは、小中学校の学習指導要領の改訂だけでなく、幼稚園や保育所、認定こども園も含め、日本の教育のあり方を大きく変えようとする改訂になっている。また幼児教育・保育の無償化が始まり、幼児教育と小学校教育の架け橋プログラムの検討も始まり、保育の質が問われる動きもでてきた。このような社会の動きや制度改革を見据えながら、実践する側の立場から、本来、求めるべき幼児教育・保育の姿を探求する。		
授業のねらい・到達目標	1. 制度が大きく変わるときに問われるのは理念である。国際的な幼児教育・保育の流れを見据えながら、日本の幼児教育・保育は、どのような制度になっていて、何か課題なのか等について、保育の実態も踏まえながら様々な視点から検討ができる力を養う。 2. 理念を具体的な実践として実現していく方法や考え方を獲得していく。		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	OECDの調査・提言について～世界の乳幼児教育の流れを中心に～		
3	子ども・子育て支援新制度について ～新たな制度がめざす方向とは～		
4	学習指導要領の改訂について		
5	幼稚園制度の基本的な考え方と課題		
6	保育園制度の基本的な考え方と課題		
7	認定こども園制度について（1）～制度と仕組み～		
8	認定こども園制度について（2）～実際の保育を中心に～		
9	保育の質について（1）		
10	保育の質について（2）		
11	幼保小連携について		
12	特別支援教育について		
13	海外の保育制度について		
14	実践を深めていくために必要な視点とは何か		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では履修生にレジュメの作成・発表を課す。第2回目から第15回目までテーマに応じてグループディスカッションを行う予定。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分に自分の考えを整理すること。		
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。		
テキスト	Peter Moss他著『保育の質を超えて』ミネルヴァ書房、2021年		
参考文献	佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、2013年 カルナ・リナルディー著、里見実訳『レッジョ・エミリアと対話しながら』ミネルヴァ書房、2019年		

科目名	教育学特殊研究	副題	
担当者	米山 光儀		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	「教育とは何か」という問いに対して、どのように答えるだろうか。この講義の前半では、これまでなされてきた教育の定義について検討し、新たな教育の定義を試みる。さらに、これまでの教育学の歩みを知るために、『原典による教育学の歩み』を読み、教育学の古典と向き合う時間を設ける。		
授業のねらい・到達目標	(1) 教育とは何かを自分のことばで語るができるようになる。 (2) 教育学の基本的な文献を読み、教育学の歩みを知る。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション		
2	教育はどのように定義できるか。(講義)		
3	国語辞書の「教育」を検討する(講義)		
4	教育事典の「教育」を検討する①(講義と演習)		
5	教育事典の「教育」を検討する②(講義と演習)		
6	教育の新しいモデルの提起(講義と演習)		
7	教育のパラドックス(講義と演習)		
8	『原典による教育学の歩み』を読む①(演習)		
9	『原典による教育学の歩み』を読む②(演習)		
10	『原典による教育学の歩み』を読む③(演習)		
11	『原典による教育学の歩み』を読む④(演習)		
12	『原典による教育学の歩み』を読む⑤(演習)		
13	『原典による教育学の歩み』を読む⑥(演習)		
14	『原典による教育学の歩み』を読む⑦(演習)		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	授業は、講義と演習の両形式で行う。前半は講義と演習、後半は演習で行う。演習ではグループディスカッションや参加者がレジュメを作成し、発表するなどのことを行う。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート(50%)及び発表(50%)を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	沼野一男・田中克佳・松本憲・白石克己・米山光儀『教育の原理』第4版、学文社 村井実編『原典による教育学の歩み』、講談社		
参考文献	適宜、授業で紹介する。		

科目名	子どもとアート論	副題	
担当者	安村 清美・斉木 美紀子（オムニバス・一部共同）		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>子どもの育ちを見通した時、アートに潜む創造的経験のプロセスに実践的学びとしての意味を見出すことができる。人間としての子ども期のアート経験が、その育ちにもたらす意味、特に保育現場におけるすべての子どものためのアート教育の可能性について、個別のアートの独自性及びトータルな識見をもてるよう、理論と実践を往還しながら研究する。</p> <p>安村担当の講義では、子ども期のアート経験の意味について考え、その上で、舞踊家と教育現場の関わりと実践を通して、アートとして舞踊がもつ教育的意味について考察する。また、表現する身体について、身体を通して表現し人と共振することとは何か、その意味について芸術教育に関わる文献と事例を合わせて探究する。</p> <p>斉木担当の講義では、音楽表現の視座から子どもの表現を捉え、表現の土台となる環境や経験について考え、表現する主体としての自分についても探究しながら、アート教育についての理解を深めていく。</p> <p>その上で、担当者共同による講義では、子どもがアートに出合い経験することの意味について、上記の内容から個々の学生の学びを基にプレゼンテーション及びディスカッションを行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 幼児期の子どもにとって、アートと出合い経験することがもたらす意味について、実践記録や研究を通して多様な視点から考察できるようになる。</p> <p>2. 幼児期のアート経験の特徴として、その総合性に着目し、保育者としての総合的なプランニング力、実践力を修得する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	「子どもとアート」について（人間としての子ども期のアート経験の意味）（安村・斉木）		
2	教育現場とアーティストの関わり①—子どもの育ちに関わる意味と可能性について（安村）		
3	教育現場とアーティストの関わり②—共振する身体：子どもの身体表現とコミュニケーション（安村）		
4	表現する身体：保育現場における子どもの身体とアート—実践記録を読む（安村）		
5	表現する身体：表現とプロセス、作品—実践記録、論文を読む（安村）		
6	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味①ディスカッション（安村）		
7	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味②実践・事例報告（安村）		
8	子どもの音楽表現の芽生えと学び（斉木）		
9	子どもと音環境（斉木）		
10	子どもとうた（斉木）		
11	子どもと楽器①民族楽器にふれる（斉木）		
12	子どもと楽器②楽器と関わる子ども（斉木）		
13	文化と子ども（斉木）		
14	課題のプレゼンテーション・ディスカッション（安村・斉木）		
15	課題のプレゼンテーション、まとめと講評（安村・斉木）		
期末			
授業に関する連絡	本授業では内容に応じ講義形式、演習形式で授業を行う。実践を含む演習では、履修生に実践課題を課することがある。第4回～第7回、第9回～第15回の授業では、講義に関連した課題についてレポートをし、プレゼンテーションとディスカッションをしながら内容を深めていく。		
評価方法及び評価基準	小レポート（30%）、実践課題（30%）、プレゼンテーション（40%）を基に総合的に判断する。		
事前・事後学習の内容	事前学習として、自分自身が経験し、また保育現場で出合ったアート教育の課題を考える。さまざまなアートに親しみ、関心をもつ。事後学習として、各回の学習内容をまとめ、次回授業の課題準備につなげる。		
履修上の注意	実践を含む授業なので、指示に留意し、実践に適した服装で授業に臨むこと。		
テキスト	特になし		
参考文献	<p>『松本千代栄撰集 2 人間発達と表現』舞踊文化と教育研究会（編者代表：安村）編、2007、明治図書</p> <p>『13歳からのアート思考』末永幸歩、2020、ダイヤモンド社</p> <p>『保育の中のアート』磯部、福田、2015、小学館</p> <p>『子どもたちの創造力を育む—アート教育の思想と実践』佐藤、今井編、2003東京大学出版会</p> <p>『表現者として育つ』佐伯、藤田、佐藤編、1995、東京大学出版会</p> <p>『音楽を学ぶということ』今川、2016、教育芸術社</p>		

科目名	子どもとことば論	副題	多文化共生時代の子どもとことば		
担当者	内藤 知美 (実)				
開講期	後期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>子どもの総合的発達におけることばの問題について、0歳から就学前までの時期の子どものことばの発達過程とことばの獲得に関わる社会・文化環境について理解を深める。家庭、幼稚園、保育所などの生活における子どものことばに関わる多様な事例を通して、子どもの生活や遊びと大人―子ども関係、子ども同士の関係がことばの発達にどのように相互に影響するのか、関係論的視点から検討する。また子どもを取り巻く社会・文化環境の変化、例えば乳幼児期からの視聴覚メディアの受容、日本語を母語としない子どもの増加、言葉の関わりのもちにくい子どもの問題など、子どもとことばを取り巻く今日的課題を捉える視点をもつことが目標である。また絵本などの児童文化財と子どもの関わりを探究し、実際の保育において子どものことばを育てることの意味を理解する。</p>				
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもが多様なかわりの中でことばを獲得していく過程について理解を深める。特に子どもが主体的にことばを使用することに着目し、ことばの獲得における「教え―教えられる」保育・教育の枠組みを問い直す。</p> <p>2. ことばをめぐる理論の動向を踏まえるとともに、具体的な事例を通して、現代社会に生きる子どものことばの発達を問い、具体的かつ実践的視点から子どものことばが育つこと、そしてことばを育てることの意味を探究する。</p>				
授業の方法・授業計画					
1	子どもとことばの関係性				
2	子どもとことばをめぐる社会環境・文化環境				
3	ことばの発達と保育 (0歳期)				
4	ことばの発達と保育 (1語発話の時期)				
5	ことばの発達と保育 (2語発話の時期)				
6	ことばの発達と保育 (2歳期・3歳期)				
7	ことばの発達と保育 (4歳期・5歳期)				
8	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助①―多文化・多言語と子ども				
9	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助②―ことばとコミュニケーション (ビデオカンファレンスを通して)				
10	事例検討：同調、リズムとことば				
11	事例検討：共感性とことば				
12	事例検討：創造性や思考とことば				
13	ことばを育てる児童文化財の活用①―絵本などの児童文化財とことばの関係性				
14	ことばを育てる児童文化財の活用②―文化財を用いた子どものことばの育ちあい				
15	子どものことばと視聴覚メディア				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と毎回のグループディスカッションによる演習形式で行う。演習では、文献講読および実践事例を基にした双方向・多方向からのディスカッションを行うため、レジュメを担当者は作成すること。				
評価方法及び評価基準	小論文 (レポート) 50%、期末課題 50%				
事前・事後学習の内容	子どもとことばの発達をめぐる新しい理論、研究を随時紹介するので、関連する資料を熟読すること				
履修上の注意	保育事例検討では受講生が自ら考え、積極的に発言することを望む。また「子ども」や「ことば」に関する関連文献を読み、学びを深めることを期待する。				
テキスト	今井むつみ(2013)『ことばの発達の謎を解く』(ちくまプリマー新書)、幼稚園教育要領(平成29年告示)、保育所保育指針(平成29年告示)、幼保連携型認定こども園教育・保育要領(平成29年告示)				
参考文献	岡本夏木(1982)『子どもとことば』(岩波新書)、麻生武(1992)『身ぶりからことばへ』(新曜社)今井むつみ(2010)『ことばと思考』(岩波新書)、『発達 特集子どものことば、再発見! 172号』(ミネルヴァ書房2022)など授業中に適宜指示する。				

科目名	子ども環境学特論	副題	
担当者	仙田 考		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1年次・2年次
授業の概要	<p>現在の幼稚園教育の基本理念である「環境を通しての保育」の意義と在り方、またその実践について学ぶために、子どもと環境との関係、特に子どもと環境との相互関係に着目し、その発達過程と育成に必要な環境のあり方を論ずる。その際、今日の子どもたちを取り巻く環境の激変が、未来を担う子どもたちに与える影響を考察し、その課題を整理した上で、子どもの豊かな発達を支える保育環境や子どもに活力を与える社会環境の構築に必要な要素を検討する。子どもの視点から見た環境の捉え直しを横断的・学際的に検討する。また幼稚園等の保育現場を訪れ、保育の方法や実践について考える機会も持つ。</p> <p>子ども環境学とは何かからはじめ、とくに子どもの遊び環境を中心的に取り上げながら、遊び空間の在り方、住まいの問題、安全な環境づくり、幼児教育施設、学校、医療環境、児童館・環境学習施設などの地域施設の現状などについて検討を進める。その上で、子どものための、子育てがしやすい街・都市づくりの在り方を展望し、子どもや子育て家庭を支える保育・教育実践のあり方を幅広い視点から考える。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>学生が、子どもがひと・もの・自然・場・社会などさまざまな環境と関わる活動や子どもや子育てのための環境について、座学とともに、関連分野の専門家の話や、幼稚園等保育現場の見学等を通して、子どもと環境との関係や、子どもの発達に寄与する環境のあり方を理解し、子どもや子育てにとってよりよい環境とはなにかを、学び考えることを目標とする。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	子ども環境学とは何か － 幼稚園教育における「環境を通しての保育」とは		
2	子どものあそび環境（１） － 子ども時代のあそび環境、生活環境		
3	子どものあそび環境（２） － 時間、空間、集団、方法～遊環境構造、あそび環境におけるリスクとハザード		
4	子どもと保育環境（１） － 乳幼児と領域環境		
5	子どもと保育環境（２） － 園舎、園庭環境、保育と環境の構成		
6	子どもと自然 － 身近な自然にふれてみよう、感じてみよう		
7	子どもと園・地域の環境（１） － 子どもの環境に関する現状、課題についての発表		
8	子どもと園・地域の環境（２） － 子どもの環境に関する現状、課題についての発表、討論		
9	子どもと地域 － 子育て支援の環境		
10	子どもと環境学習 － 自然、環境への気づきから持続発展教育へ		
11	子どものための環境づくり（１） － 子どもにやさしい園環境づくり・まちづくりの在り方に向けて		
12	子どものための環境づくり（２） － 子どもにやさしい園環境づくり・まちづくりの在り方に向けて		
13	子ども環境施設等の視察（１） － 乳幼児教育施設や子育て支援施設等の園舎、園庭、環境構成		
14	子ども環境施設等の視察（２） － 乳幼児教育施設や子育て支援施設等の園舎、園庭、環境構成		
15	子ども環境施設等の視察（３） － 乳幼児教育施設や子育て支援施設等の園舎、園庭、環境構成		
期末			
授業に関する連絡	本授業では講義や演習、学外研修等を取り入れて行う。 第2, 6, 8, 11, 12, 13, 14, 15回はグループディスカッションを実施する。		
評価方法及び評価基準	授業での発表・課題（50%）及びレポート（50%）を総合的に判断し評価する。		
事前・事後学習の内容	公園や児童館など子ども施設に足を運んで、実際の子ども施設がどのように作られ、使われている状況などを観察しながら、年齢や都市環境に応じたどのようにあるべきかを考察してほしい。		
履修上の注意	各自の問題意識に基づいて授業での討論や視察に積極的に参加すること。		
テキスト	特になし		
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領』，2017年、文部科学省『幼稚園施設整備指針』，2022年、仙田満『子どもとあそび』岩波新書，1992年、仙田満・藤塚光政『幼児のための環境デザイン』世界文化社，2003年、仙田満『こどもの庭』世界文化社，2015年 ほか授業内で紹介		

科目名	発達心理学特論	副題	
担当者	横尾 暁子		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>人間の生涯にわたる発達・成長のなかで、人生初期はその基盤となる重要な時期であると考えられている。本授業では、主に乳幼児期・児童期の子どもの心理学的発達をテーマとして扱い、国内外における研究成果について学ぶ。</p> <p>受講者は発達心理学分野の最新の論文の中から、各自関心のあるものを選び概要をまとめた上で、自身の考察や問題意識とともに発表する。論文および発表内容については、全員で討議を行う。</p>		
授業のねらい ・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・発達心理学の最新の研究成果を学び、子どもの育ちを多面的に理解する。 ・子どもの生涯の発達を見通し支えるために、発達心理学の研究成果を実践の場面でどのように応用できるかについて考える。 		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス（発達心理学とは何か、発達心理学の歴史）		
2	発達理解の意義、発達心理学の研究法		
3	研究計画と心理統計		
4	発達の基盤 - 遺伝と環境 -		
5	愛着の発達		
6	認知発達 - 表象の発達と概念の発達 -		
7	認知発達 - 言語発達と社会的認知の発達 -		
8	道徳性の発達		
9	レジリエンス		
10	食行動の発達		
11	仲間関係の発達		
12	自己認知の発達		
13	問題解決行動の発達		
14	親子関係の発達 - 養育態度と発達 -		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する 連絡	本授業は内容に応じて、講義と演習の両形式で行う。第2回から第10回は講義に加えてグループディスカッションを予定している。第11回から第14回は履修生が各授業のレジюмеを作成し、発表、グループディスカッションを含む授業を実施する。		
評価方法 及び評価基準	授業内での発表および討議（50%）、最終レポート（50%）に基づいて評価する。		
事前・事後 学習の内容	<p>事前：各回の授業のテーマについて、関連する基礎的な知識を確認し、自分の考えをまとめておくこと。また、配布資料や指定の文献等はよく読んでおくこと。発表担当の場合は、資料を準備すること。</p> <p>事後：各回の学習内容を整理すること。各自の問いや疑問点についてはさらに調べるなどして、学びを自ら深めていくことが望ましい。</p>		
履修上の注意	履修生の積極的な参加を求める。		
テキスト	未定		
参考文献	<p>外山紀子・中島伸子 『乳幼児は世界をどう理解しているか』 新曜社 2013</p> <p>伊東暁子・竹内美香・鈴木晶夫 『食べる・育てる心理学』 川島書店 2010</p> <p>川田学 『保育的発達論のはじまり』 ひとなる書房 2019</p> <p>小塩真司 他 『非認知能力：概念・測定と教育の可能性』 北大路書房 2021</p>		

科目名	保育・教育課程研究	副題	
担当者	宮里 暁美		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>幼児期の学びを支える保育は、生涯にわたる人格形成の基盤となる重要なものである。その保育を支えているものが「保育・教育課程」である。一人一人の子どもの現状や課題を丁寧に見出し、次なる経験に繋がる保育の活動や環境をデザインしていく保育・教育過程の実際について、文献や実践を通して検討する。保育・教育課程の展開を支える保育マネジメントの在り方や、保育・教育課程を実施していく保育者の在り方、実際の保育場面の中に見られる保育・教育課程の実際などに視点を置き、「問いかける」「問う」というアプローチを取りながら学びを深める。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 幼児期の教育課程の特色について検討し、豊かな経験を生み出すための保育・教育課程を構成するポイントを理解する。 2. 具体的な幼児の姿の背景に、保育・教育課程が存在していることを確認し、計画から保育へ、保育の省察から計画へ、という循環を支える営みについて明らかにする。 3. 遊びの中の学びに着目し、学びを生み出す、教育課程の編成方法を構想する。 		
授業の方法・授業計画			
1	講義・討議	乳幼児教育の在り方を問う：子どもの「やりたい！」が発揮される保育の実現	
2	講義・討議	乳幼児教育の在り方を問う：幼児期に育みたい資質・能力3つの柱	
3	講義・討議	乳幼児教育の在り方を問う：海外の実践例から	
4	文献研究	子どもたちからの贈り物 レッジョ・エミリアの哲学に基づく保育実践①	
5	文献研究	子どもたちからの贈り物 レッジョ・エミリアの哲学に基づく保育実践②	
6	文献研究	子どもたちからの贈り物 レッジョ・エミリアの哲学に基づく保育実践③	
7	保育観察①	保育の実際の中に身をおいたからこそその気づきをまとめる	
8	保育観察②	保育の実際の中に身をおき、自己課題に応じた学びを深める	
9	発表・討議	保育の実際から気づいたことについて	
10	発表・討議	保育の実際の中にある意味を深める	
11	発表・討議	保育とは何か？	
12	ワークショップ	暮らし・創る・保育教育課程①	
13	ワークショップ	暮らし・創る・保育教育課程②	
14	討議	豊かな経験を生み出す保育・教育課程の編成について	
15	講義	学びの振り返りとまとめ（課題レポート提出）	
期末			
授業に関する連絡	全回を通じて保育・教育課程研究に関する課題発見・検討型の学習活動を行う。第7回～第15回は学生による実地見学、発表と討議、ワークショップを行う。		
評価方法及び評価基準	<p>事例分析や討議への参加意欲：40%</p> <p>資料準備及び提案内容：30%</p> <p>課題レポート：30%</p>		
事前・事後学習の内容	<p>事前：国内外の特色ある保育・教育課程については、各自で資料を探し提案準備を行う</p> <p>事後：授業内容を整理し、学びを深める。必要に応じて、資料整理を行う。</p>		
履修上の注意	特になし		
テキスト	<p>子どもたちからの贈りもの レッジョ・エミリアの哲学に基づく保育実践 カンチェーミ・ジュンコ 秋田喜代美 編著 萌文書林</p>		
参考文献	<p>エドガー・H・シャイン『問いかける技術』栄治出版 宮里暁美『耳をすまして目をこらす～いろとりどりの子どもの気持ち』赤ちゃんとママ社2021年 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレール館, 2018年、厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレール館, 2018年</p>		

科目名	権利擁護特論	副題	
担当者	國見 真理子・長谷川 洋昭（オムニバス・一部共同）		
開講期	後期（隔年）	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>本講義では、複雑化する社会における子どもたちの権利擁護に関する知識を深め、質の高い実践力を養うことを目的とする。ここでは人間の尊厳の保持、権利擁護活動の支援等の視点を重視する。</p> <p>國見担当の総論では、人間尊重を巡るリーガルマインドの理解を深めることを目指す。権利擁護制度概要、憲法上の基本的人権、その他関連法規を把握し、子どもを巡る権利擁護に関する事例研究を行う。</p> <p>長谷川担当の各論では、履修者が関心のある領域を設定し、具体的事例に基づき現状と課題を明確化する。権利擁護に係わる関係機関・者のジレンマの正体は何か、その理論的理解を目指す。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 権利擁護の現状と課題を、具体的実践事例に基づき理解する。 2. 文献・資料の検索と収集、分析手法の習得を並行しつつ、権利擁護に関連する制度・関係機関・者のあるべき姿を具体的に理解する。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション（國見・長谷川）		
2	憲法①：権利擁護と人権（國見）		
3	憲法②：権利擁護と子どもを巡る人権条約（國見）		
4	民法①：権利擁護と民法（國見）		
5	民法②：家族法（國見）		
6	行政法と権利擁護（國見）		
7	事例研究①（國見）		
8	事例研究②（國見）		
9	権利擁護と専門職（長谷川）		
10	児童虐待と権利擁護（長谷川）		
11	社会的排除と権利擁護（長谷川）		
12	施設内虐待と権利擁護（長谷川）		
13	事例研究①（長谷川）		
14	事例研究②（長谷川）		
15	総括（長谷川）		
期末			
授業に関する連絡	毎回の授業で履修者に対してグループディスカッションを含むアクティブラーニングを実施する。更に、事例研究においては、履修者には各授業のレジュメを作成し、発表を行うことを求める。履修者には授業に対する積極的な参加を期待する。		
評価方法及び評価基準	期末課題（40%）、コメントシート（30%）及び授業内の活動（30%）を総合的に勘案し評価する。		
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席すること。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めること。		
履修上の注意	人権擁護に対する理解を深めるために、六法を授業の際に持参することを求める。		
テキスト	総論：最新版の『ポケット六法』（有斐閣） 各論：講義中に適宜資料等を配布する。		
参考文献	芦部信喜『憲法』（日本評論社） 秋元美世『ソーシャルワーカーのための法学』（有斐閣）		

科目名	障害児・者福祉特論（インクルーシブ論を含む）	副題	
担当者	新井 雅明		
開講期	前期（隔年）	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	平成19年度の法改正により、わが国の障害児教育は、従来の「特殊教育」から「特別支援教育」へと大きく転換された。この背景には、障害の多様化、重度・重複化の進展に伴い、個別の教育的ニーズへの対応が求められたことと、国際的な潮流としての「インクルーシブ教育」の推進がある。個別の教育的ニーズへの対応とインクルーシブ教育の推進が、特別支援教育の重要課題となっているが、とりわけインクルーシブ教育の推進には大きな課題があり、様々な点から検討が必要になっている。現在の日本社会における障害児・者におけるインクルージョンの課題を分析し、その推進には何が必要かを、教育・福祉・保育の分野から検討する。また、広くソーシャルインクルージョンの課題にも視野を広げて研究する。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. インクルージョンの理念とその背景にあるものを理解する。 2. 日本社会におけるインクルージョンの課題を明らかにする。 3. 教育におけるインクルーシブ教育の現状と課題を理解する。 4. 福祉におけるインクルージョンの現状と課題を理解する。 5. 保育におけるインクルージョンの現状と課題を理解する。 		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンスー津久井やまゆり園事件から考えるー		
2	障害者の権利に関する条約とその背景		
3	合理的配慮について		
4	日本社会における排除と受容ーホームレスの支援を続けてー		
5	インクルージョンの理念とその背景		
6	特別支援教育とは何か		
7	インクルーシブ教育の実際		
8	諸外国におけるインクルーシブ教育		
9	インクルーシブ教育から見る「不登校・いじめ」		
10	インクルーシブ教育から見る「引きこもり・ニート」		
11	幼稚園・保育園等におけるインクルージョン		
12	ホームレス障害者、累犯障害者		
13	インクルーシブ教育と授業のユニバーサルデザイン		
14	インクルーシブな社会の実現のために①		
15	インクルーシブな社会の実現のために②		
期末			
授業に関する連絡	次回のテーマ・内容については授業内で連絡する。		
評価方法及び評価基準	期末レポート（50%）及び発題発表（50%）に基づいて総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	事前に次回のテーマについて情報収集すること。事後には授業のまとめを行うこと。		
履修上の注意	社会的排除の問題について、広くニュースや文献を探って関心を持つことが望まれる。		
テキスト	「共生社会学入門」 小山望ら編著 福村出版		
参考文献	「ホームレス障害者」鈴木文治著 日本評論社 「発達障害と少年犯罪」田淵俊彦著 新潮社 「排除する学校」鈴木文治著 明石書店		

科目名	地域福祉特論	副題	
担当者	和 秀俊		
開講期	後期(隔年)	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	現代社会では、外国人家族の増加、核家族化や社会的孤立などに象徴される地域に共通する課題を解決するために、地域住民が支えあう地域福祉実践が求められている。この講義では、地域福祉実践の基礎となるコミュニティについて、近年のコミュニティ論を扱った学術書を読み込み、コミュニティの本質を探究し、今後の地域福祉実践に生かすことを目的とする。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学術書の読み方を修得する。 2. コミュニティ論を探究し、地域福祉実践を学術的にアプローチできるようになる。 3. 学術的な概念、理論を適切に理解し、活用できるようになる。 		
授業の方法・授業計画			
1	オリエンテーション		
2	コミュニティとは①～理念・概念		
3	コミュニティとは②～理論		
4	コミュニティとは③～歴史		
5	コミュニティの現状①～都市部		
6	コミュニティの現状②～農村部		
7	コミュニティの現状③～離島		
8	コミュニティの課題①～都市部		
9	コミュニティの課題②～農村部		
10	コミュニティの課題③～離島		
11	コミュニティの展望①～都市部		
12	コミュニティの展望②～農村部		
13	コミュニティの展望③～離島		
14	コミュニティケアの展望		
15	コミュニティケアシステムの展望		
期末			
授業に関する連絡	本授業では、学術書を履修生全員で読み込み、各回担当の履修生がレジュメ作成を担当し、発表することを課する。その際、概念、理論などを理解した上で、レジュメ作成および発表をすること。		
評価方法及び評価基準	発表でのレジュメ作成(50%)、発表(50%)		
事前・事後学習の内容	予定されている内容に該当する教科書の章を事前に読んでおくこと 授業の内容を必ず復習すること		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	未定(オリエンテーションの際に提示する)		
参考文献	広井義典・小林正弥編著「コミュニティ」勁草書房、伊豫谷登士翁・齋藤純一・吉原直樹「コミュニティを再考する」、吉原直樹「コミュニティ・スタディーズ」作品社		

科目名	生活環境学特論	副題	
担当者	山崎 さゆり		
開講期	前期(隔年)	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>子どもは住まいを中心とした地域環境の中で、様々なヒト・モノ・コトと関わりながら多くの学習をし、やがて自立した人間へと成長していく。子どもの健やかな成長・発達と人格形成を促進、あるいは阻害する生活環境について考える。</p> <p>対象領域は住宅・施設環境、地域環境であり、これら相互の密接な関連性を念頭に置きつつ人的・物的の両側面における環境整備課題を明らかにし、その過程から深い学識を醸成する。また、子どもの発達を支える生活環境についてグローバルな視点を含めて論理的分析を行い、それらの実現のために必要な質の高い実践力を養う。</p> <p>授業では、人々にとって“居心地の良い環境・場所”とはどのようなものか、について、テキスト、および関連する文献・論文のレビューを行いながら討論を進め、子どもの人格形成や人間発達に深くかかわる生活環境のあり方を考えていく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 子どもの人間発達の観点から様々な生活環境の問題を捉え分析する中で深い学識を醸成する。 2. 生活行為と住空間の関係を多角的に捉え、人間相互の関わりに及ぼす空間構造について理解する。 3. 子どもの生活空間形成の在り方、生活環境の改善の方向性について理解する。 		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	各自の興味・関心に沿ったテーマの検討		
3	テーマに関連した文献の紹介		
4	テキストの輪読①		
5	テキストの輪読②		
6	テキストの輪読③		
7	テキストの輪読④		
8	テキストの輪読⑤		
9	課題の設定		
10	関連論文のレビューと討論①		
11	関連論文のレビューと討論②		
12	関連論文のレビューと討論③		
13	課題に関する研究動向と評価の検討		
14	課題のレポート作成		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	個別のメール、または教学支援課を通して連絡をする。		
評価方法及び評価基準	報告(30%)、討論(30%)、レポート(40%)を総合して評価する。		
事前・事後学習の内容	事前・事後共に、関連する文献・資料を日頃から収集してよく読み込んでおくと同時に、毎回の授業における報告内容をまとめておくこと。		
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し積極的に探究心をもって取り組み、問題意識が深まることを期待する。		
テキスト	未定		
参考文献	<p>日本建築学会編「まちの居場所 ささえる／まもる／そだてる／つなぐ」鹿島出版会 高橋鷹志著「子どもを育てるたてももの学」チャイルド本社 北浦かほる著「世界の子どもの部屋—子どもの自立と空間の役割」井上書院 住宅総合研究財団編「現代住宅研究の変遷と展望」丸善 バイ インターナショナル編著「新しいコミュニティを生み出す空間とデザイン」株式会社バイ インターナショナル</p>		

科目名	精神医学特論	副題	
担当者	未定		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	精神医学の歴史、症候学、病院論など精神医学の見方、考え方を学び、心理学的理論モデルとの違い、実践における協働のあり方を学ぶ。具体的には、現在の症状分類の基本である「ICD-10精神および行動の障害」(WHO)、「DSM-5精神疾患の分類と診断の手引き」(米国精神医学会)を用い、現代精神医学の基礎知識の獲得を目指す。		
授業のねらい・到達目標	代表的な精神障害に関する専門的知識を取得する。 患者が体験する「病い」と生活・人生への影響について理解を深める。 専門的知識を支援の実践に応用する視点を獲得する。 精神医学および精神障害に関する様々な論点につき、自ら問いを發し論ずることができる。		
授業の方法・授業計画			
1	精神医学の基礎		
2	精神科診断学		
3	精神症状学		
4	認知症疾患		
5	統合失調症(1) (概念、診断、疫学、成因仮説、症状)		
1	統合失調症(2) (認知機能障害、特徴的行動特性、経過、予後、治療法)		
7	気分障害(1) (概念、診断、成因仮説、症状)		
8	気分障害(2) (経過、予後、治療法、特別なうつ病)		
9	神経症性障害、ストレス関連障害、身体表現性障害		
10	パーソナリティ障害、摂食障害		
11	小児期の精神障害		
12	身体的治療法		
13	精神療法		
14	環境・社会療法		
15	精神医療の現状		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義形式で進行するが、授業毎に質問や討議の時間を確保する。		
評価方法及び評価基準	レポート(70%)、質問・発話・討議への参加度(30%)		
事前・事後学習の内容	事前学習は、授業テーマにつき、文献などを使用して下調べをするとともに、生活や実践場面を通して生じた疑問点をまとめて授業に臨むこと。 事後学習は、授業で配布したプリントに基づき知識を整理すること。		
履修上の注意	履修者は積極的に討議に参加すること。		
テキスト	特になし。授業毎にプリントを配布する。		
参考文献	ICD-10精神および行動の障害 - 臨床記述と診断ガイドライン新訂版(医学書院) 現代臨床精神医学第12版(金剛出版)		

科目名	臨床心理学特論	副題	
担当者	寺沢 英理子 (実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	臨床心理学は人の病、障がい、生活や人間関係上の様々な困難などから生じる心の問題を、「心理内界」、「行動や認知」、「人間的関わり」などの側面から解明し、解決への道筋を見つけようとしてきた。この授業ではいくつかの事例を題材として、こうした多面的な視点で事例を見ていくことをおこない、心理支援の専門職としての知識と技術の幅を広げていくことを目標とする。		
授業のねらい ・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 心理支援に関する複数の理論を体系的に理解し説明出来る 心理支援に関する複数の理論を用いて事例を多面的に考察し説明出来る 		
授業の方法・授業計画			
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方		
2	心理支援に関する理論の確認：心理テストに関する理論		
3	心理支援に関する理論の確認：心理面接に関する理論		
4	心理支援に関する理論の確認：臨床心理学的地域支援に関する理論		
5	心理支援に関する理論の確認：心理支援対象者理解に関する理論		
6	心理支援に関する理論の確認：医学的診断に関する理論		
7	教材事例：子どもの事例		
8	教材事例：青年期の事例		
9	教材事例：成人の事例		
10	教材事例：高齢者の事例		
11	教材事例：障がい者の事例		
12	教材事例：精神疾患の事例		
13	教材事例：不登校、ひきこもりの事例		
14	教材事例：虐待、DV、PTSDの事例		
15	全体のまとめ		
期末	レポート		
授業に関する 連絡	ほぼ毎回、一定時間のグループディスカッションを行うので、活発なディスカッションを期待する。		
評価方法 及び評価基準	期末レポート（50%）、授業中の取り組み（50%）で総合的に判断する。		
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間を求める。		
履修上の注意			
テキスト	特に使用しない。授業で資料を配布する。		
参考文献	授業で適宜紹介する。		

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	生田 久美子		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	研究指導 I では、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、「子ども人間学」の基礎文献を講読しつつ、各自が現段階で構想しているテーマに基づいた文献の検索を行う。上記の文献を講読をしながら論文のテーマを絞っていく。		
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の作成に向けて「子ども人間学」の基礎文献を講読し、理解する。 2. 修士論文のテーマを見つけるために、各自の関心に基づく必要な文献を収集し、講読し、理解する。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—研究論文を書くことの意味		
2	研究論文の作成の方法		
3	研究論文の作成に向けた文献検索の方法		
4	「子ども人間学」の基礎文献の講読①		
5	「子ども人間学」の基礎文献の講読②		
6	「子ども人間学」の基礎文献の講読③		
7	各自が構想する研究テーマに沿った文献の講読①		
8	各自が構想する研究テーマに沿った文献の講読②		
9	各自が構想する研究テーマに沿った文献の講読③		
10	各自が構想する研究テーマに沿った文献の講読④		
11	各自が構想する研究テーマに沿った文献の講読⑤		
12	研究テーマの絞り込み		
13	研究テーマの絞り込み		
14	研究テーマに基づく発表①		
15	研究テーマに基づく発表①		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート (50 %) 及び研究発表 (50%) を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	自分自身のテーマについての問題意識と授業で講読した文献の内容とを結び付け、修士論文のテーマを絞り込んでいく。		
テキスト	「子ども人間学」の基礎文献として 1・佐伯胖 『子どもを人間としてみる』 ミネルヴァ書房 2・本田和子 『異文化としての子ども』 ちくま学芸文庫		
参考文献	生田久美子 『わざから知る』 東京大学出版会		

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	米山 光儀		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	研究指導 I では、修士論文でどのような方法を用いて課題に迫ろうか、と迷っている人を対象にして、教育史的なアプローチについて学ぶ機会を提供する。教育史にもさまざまな分野があるが、文献を読むことによって、様々な方法を知る。		
授業のねらい・到達目標	1. 様々な教育史的なアプローチを知り、自分の研究にどのような方法が適切であるか判断できるようになる。 2. 教育史の文献を読み、修士論文の方向性を探る。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション		
2	教育学の中の教育史学の位置		
3	教育史学と歴史学はどのように違うのか？		
4	教育史の方法① 教育制度史		
5	教育史の方法② 教育思想史		
6	教育史の方法③ 教育実態史		
7	教育史の方法④ 教育運動史		
8	教育史文献の選択と講読①		
9	教育史文献の選択と講読②		
10	教育史文献の選択と講読③		
11	教育史文献の選択と講読④		
12	教育史文献の選択と講読⑤		
13	教育史文献の選択と講読⑥		
14	研究テーマに基づく考察①		
15	研究テーマに基づく考察②		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。複数の参加者がいる場合は、グループディスカッションなども行う。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート (50 %)及び最終レポート (50%) を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識を持って、授業に積極的に参加すること。		
テキスト	適宜、紹介する。		
参考文献	適宜、紹介する。		

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	犬塚 典子		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	研究指導Iでは、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。修士論文のテーマとその周辺となる研究分野の検討、研究方法の習得、データや資料の収集と整理を目的として、基礎的文献を講読する。		
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の作成に向けて「子ども人間学」の基礎文献を講読し、理解する。 2. 修士論文のテーマを見つけるために、必要な文献や情報を収集する。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—修士論文を書くことの意味		
2	文献および先行研究の概要についての討議①		
3	文献および先行研究の概要についての討議②		
4	文献リスト及び内容についての討議①		
5	文献リスト及び内容についての討議②		
6	文献リストと研究テーマの関わりについての討議①		
7	文献リストと研究テーマの関わりについての討議②		
8	主要文献の選択と講読①		
9	主要文献の選択と講読②		
10	主要文献の選択と講読③		
11	主要文献の選択と講読④		
12	主要文献の選択と講読⑤		
13	主要文献の選択と講読⑥		
14	研究テーマと研究方法についての討議①		
15	研究テーマと研究方法についての討議②		
期末			
授業に関する連絡	全回を通じて修士論文執筆のための課題発見・解決型の学習活動を行う。第2回～第7回、第14回～第15回は学生主体の討議、第8回～第13回はワークショップを行う。授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	人間学総論，人間学研究法，各選択科目の履修で得られた知識や問いを基盤に，自らの研究関心を発展させ論文執筆のための構想を固めていく。		
履修上の注意	予習をして授業に臨むこと。また，授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
テキスト	授業内で指示する。		
参考文献	授業内で指示する。		

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	安村 清美		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>研究指導 I では、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、それぞれのテーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>特に、子どもの身体と行為に現れる表現や子どもとアートに関して探究していく。このために、研究指導 I では、各自の関心に基づいた文献講読を中心に研究テーマの絞り込みを中心に進めていく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 修士論文の作成に向け、文献講読を通して「子ども人間学」に基づく基礎的思考及び研究内容について理解し探究できるようになる。</p> <p>2. 修士論文のテーマ設定のために、必要な文献や先行研究を収集し、論文の方向性について検討する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文を書くことの意味		
2	文献および先行研究の検索		
3	文献および先行研究リストの作成と発表		
4	文献リスト及び内容についての検討①		
5	文献リスト及び内容についての検討②		
6	文献リストと研究テーマの関わりについての検討①		
7	文献リストと研究テーマの関わりについての検討②		
8	主要文献の選択と講読①		
9	主要文献の選択と講読②		
10	主要文献の選択と講読③		
11	主要文献の選択と講読④		
12	主要文献の選択と講読⑤		
13	主要文献の選択と講読⑥		
14	研究テーマに基づく考察①		
15	研究テーマに基づく考察②		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート (50 %)及び研究発表 (50%) を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	文献研究と共に子どもの表現に関する実践及び実態から学ぶ姿勢を必要とする。		
テキスト	各自の研究テーマに即して設定する。		
参考文献	<p>「考える身体」三浦雅士、1999、NTT出版</p> <p>「子どもたちの創造力を育むーアート教育の思想と実践」佐藤、今井編、2003、東京大学出版会</p> <p>「経験としての芸術」ジョン・デューイ、栗田修訳、2010、晃洋書房、など</p>		

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	内藤 知美 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>研究指導 I では、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>内藤担当の研究指導 I では、保育の構造と保育者の専門性について探究を深める。特に、主体的な学び手である子どもが、人、場所、モノとの間で生起させる関係性に着目し、子どもの学びの可能性を広げるカリキュラムや保育者の専門的学びについて検討する。また海外の保育の動向（学びの共同性、社会文化的評価等）に触れながら新しい時代の保育を展望する。具体的には、文献講読を中心に、海外の動向を視野に入れ保育の構造や子どもの学びを支える方策について探究する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>「子ども人間学」的観点から、子どもの学びとそれを支えるの保育の場の構造を探究するために、基礎資料を講読し、理解する。さらに、修士論文のテーマを見つけるために、必要な文献を収集し、論文の構想を検討する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けてー		
2	保育学・保育実践学研究の動向①		
3	保育学・保育実践学研究の動向②		
4	保育学・保育実践学研究の動向③		
5	保育学・保育実践学研究の動向④		
6	保育学・保育実践学研究の動向⑤		
7	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。①		
8	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。②		
9	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。③		
10	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。④		
11	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。⑤		
12	各自の研究関心・テーマの検討①		
13	各自の研究関心・テーマの検討②		
14	各自の研究関心・テーマの検討③		
15	各自の研究関心・テーマの検討④		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	泉千勢編著『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのかー子どもの豊かな育ちを保障するためにー』ミネルヴァ書房, 2017年		
参考文献	M. カー, 大宮勇雄, 鈴木佐喜子訳 (2013) 『保育の場で子どもの学びをアセスメントとするー「学びの物語」アプローチの理論と実践』ひとなる書房 白石淑江 (2018) 『スウェーデンに学ぶドキュメンテーションの活動ー子どもから出発する保育実践』新評論		

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	仙田 考		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	研究指導 I では、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。この授業では、子どもと環境とのかかわり、子ども環境に関して探究を進める。各自の関心に基づいた文献講読等を中心として、研究テーマの絞り込みを主に進めていく。		
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の作成に向け、文献講読を通して「子ども人間学」に基づく基礎的思考及び研究内容について理解し探究できるようになる。 2. 修士論文のテーマ設定のために、必要な文献や先行研究を収集し、論文の方向性について検討する。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文を書くことの意味		
2	文献および先行研究の検索		
3	文献および先行研究リストの作成と発表		
4	文献リスト及び内容についての検討①		
5	文献リスト及び内容についての検討②		
6	文献リストと研究テーマの関わりについての検討①		
7	文献リストと研究テーマの関わりについての検討②		
8	主要文献の選択と講読①		
9	主要文献の選択と講読②		
10	主要文献の選択と講読③		
11	主要文献の選択と講読④		
12	主要文献の選択と講読⑤		
13	主要文献の選択と講読⑥		
14	研究テーマに基づく考察①		
15	研究テーマに基づく考察②		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート (50 %) 及び研究発表 (50%) を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	文献研究と共に子どもの環境に関する実践及び実態から学ぶ姿勢を必要とする。		
テキスト	各自の研究テーマに即して設定する。		
参考文献	各自の研究テーマに即し、授業内で提示する。		

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	生田 久美子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰで絞り込んだ論文テーマに沿ってさらなる文献検索を行い、先行研究を吟味し、自らの研究テーマに基づく発表を重ねる。		
授業のねらい・到達目標	1・先行研究の文献を検索し吟味する。 2・自らの研究テーマに沿った発表を重ねることで論文の作成及び報告に向かう意識を高める。		
授業の方法・授業計画			
1	研究指導Ⅱに関するイントロダクション		
2	文献検索の結果報告①		
3	文献検索の結果報告②		
4	文献検索の結果報告③		
5	先行研究の批判的講読①		
6	先行研究の批判的講読②		
7	先行研究の批判的講読③		
8	先行研究の批判的講読④		
9	先行研究を踏まえた、自らの論文作成の構想発表①		
10	先行研究を踏まえた、自らの論文作成の構想発表②		
11	中間報告を見据えた、論文の暫定的作成①		
12	中間報告を見据えた、論文の暫定的作成②		
13	中間報告を見据えた、論文の暫定的作成③		
14	中間報告に向けて発表の準備①		
15	中間報告に向けて発表の準備②		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	検索した先行研究の内容と自らの研究テーマを結び付け、次年度の中間報告に向かう意識を醸成していくこと。		
テキスト	先行研究の文献をテキストとする。		
参考文献	授業内で指示する。		

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	米山 光儀		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰの学びを踏まえ、受講者の研究テーマの先行研究のリストを作成し、先行研究の検討を行う。 この授業では、主に教育に対する歴史的なアプローチの研究が中心となるが、教育への関心に基づく研究テーマであれば、異なった方法の研究も歓迎する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 修士論文の作成に向け、先行研究のリストを作成する。 2. 修士論文のテーマの先行研究の検討を行い、自分が行おうとしている研究の意義を確認する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション		
2	図書館や文書館などの活用		
3	文献検索の方法		
4	先行研究リストの作成①		
5	先行研究リストの作成②		
6	先行研究リストの作成③		
7	先行研究検討①		
8	先行研究検討②		
9	先行研究検討③		
10	先行研究検討④		
11	先行研究検討⑤		
12	修士論文の先行研究検討部分の執筆①		
13	修士論文の先行研究検討部分の執筆②		
14	修士論文の先行研究検討部分の執筆③		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。複数の参加者がいる場合は、グループディスカッションなども行う。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識を持って、授業に積極的に参加すること。		
テキスト	適宜、紹介する。		
参考文献	適宜、紹介する。		

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	犬塚 典子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰの学びを踏まえ、文献購読に加え、関連する先行研究の検討を中心に理解を深める。		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 修士論文の作成に向け、文献および先行研究の講読を通して研究テーマに沿った基礎的思考及び研究内容について理解し探究できるようになる。</p> <p>2. 修士論文のテーマ設定のために、必要な文献や先行研究を収集し、論文の方向性について検討する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—修士論文の作成に向けて		
2	課題レポート発表と討議①		
3	課題レポート発表と討議②		
4	先行研究の収集結果についての討議①		
5	先行研究に収集結果についての討議②		
6	個別の先行研究についての発表と討議①		
7	個別の先行研究についての発表と討議②		
8	個別の先行研究についての発表と討議③		
9	個別の先行研究についての発表と討議④		
10	修士論文のテーマと構成・内容についての討議①		
11	修士論文のテーマと構成・内容についての討議②		
12	修士論文のテーマと構成・内容についての討議③		
13	研究発表①		
14	研究発表②		
15	研究発表③		
期末			
授業に関する連絡	全回を通じて修士論文執筆のための課題発見・解決型の学習活動を行う。第2回～第12回は学生主体の討議、第13回～15回はワークショップを行う。授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	人間学総論，人間学研究法，各選択科目の履修で得られた知識や問いを基盤に，自らの研究関心を発展させ論文執筆のための構想を固めていく。		
履修上の注意	予習をして授業に臨むこと。また，授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
テキスト	授業内で指示する。		
参考文献	授業内で指示する。		

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	安村 清美		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰの学びを踏まえ、文献購読に加え関連する先行研究を中心に理解を深める。</p> <p>この授業では、子どもの身体と行為に現れる表現や子どもとアートに関して探究していく。このために、先行研究の講読及び理解に加え、子どもへの視点として、子どもに現れる身体行為を読み解くことを試みる。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 修士論文の作成に向け、文献および先行研究の講読を通して研究テーマに沿った基礎的思考及び研究内容について理解し探究できるようになる。</p> <p>2. 修士論文のテーマ設定のために、必要な文献や先行研究を収集し、論文の方向性について検討する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて		
2	課題レポート発表とディスカッション①		
3	課題レポート発表とディスカッション②		
4	先行研究の検索と収集①		
5	先行研究の検索と収集②		
6	先行研究についての発表とディスカッション①		
7	先行研究についての発表とディスカッション②		
8	先行研究についての発表とディスカッション③		
9	先行研究についての発表とディスカッション④		
10	修士論文のテーマと構成・内容についての検討①		
11	修士論文のテーマと構成・内容についての検討②		
12	修士論文のテーマと構成・内容についての検討③		
13	研究発表①		
14	研究発表②		
15	研究発表③		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	文献研究、先行研究の理解と共に子どもの表現及びアートに関する実践及び実態から学ぶ姿勢を必要とする。		
テキスト	先行研究リストから選択する		
参考文献	授業内で指示する。		

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	内藤 知美 (実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰに引き続き、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>内藤担当の研究指導Ⅱでは、保育の構造と保育者の専門性について探究を深める。特に、主体的な学び手である子どもが、人、場所、モノとの間で生起させる関係性に着目し、子どもの学びの可能性を広げるカリキュラムや保育者の専門的学びについて検討する。また海外の保育の動向（学びの共同性、社会文化的評価等）に触れながら新しい時代の保育を展望する。具体的には、論文の基本的な書き方を学ぶと共に、保育のカリキュラム、実践と評価、保育者の成長プロセス等に関わる研究論文を検討し、各自の研究課題を明確に修士論文のテーマにつなげる。</p>		
授業のねらい ・到達目標	<p>「子ども人間学」的観点から、子どもの学びとそれを支えるの保育の場の構造を探究するために、基礎資料を講読し、理解する。さらに、修士論文のテーマを見つけるために、必要な文献を収集し、論文の構想を検討する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	保育学研究の手法とその意義		
2	研究情報の収集と構造化の方法		
3	研究の倫理		
4	実践の場との関係構築の在り方		
5	研究テーマの設定と方法		
6	研究データの分析方法		
7	保育・保育実践研究を読む①		
8	保育・保育実践研究を読む②		
9	保育・保育実践研究を読む③		
10	保育・保育実践研究を読む④		
11	保育・保育実践研究を読む⑤		
12	各自の論文構想の検討①		
13	各自の論文構想の検討②		
14	各自の論文構想の検討③		
15	まとめ		
期末			
授業に関する 連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法 及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後 学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	泉千勢編著(2017)『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか—子どもの豊かな育ちを保障するために—』ミネルヴァ書房		
参考文献	M. カー, 大宮勇雄、鈴木佐喜子訳(2013)『保育の場で子どもの学びをアセスメントとする—「学びの物語」アプローチの理論と実践』ひとなる書房, 2013年 白石淑江(2018)『スウェーデンに学ぶドキュメンテーションの活動—子どもから出発する保育実践』新評論, 2018年		

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	仙田 考		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰの学びを踏まえ、文献購読に加え関連する先行研究を中心に理解を深める。 この授業では、子どもと環境とのかかわり、子ども環境に関する探究を進め、具体的な論文の構想を検討する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 修士論文の作成に向け、文献および先行研究の購読を通して研究テーマに沿った基礎的思考及び研究内容について理解し探究できるようになる。 2. 修士論文のテーマ設定のために、必要な文献や先行研究を収集し、論文の方向性について検討する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—修士論文の作成に向けて		
2	課題レポート発表とディスカッション①		
3	課題レポート発表とディスカッション②		
4	先行研究の検索と収集①		
5	先行研究の検索と収集②		
6	先行研究についての発表とディスカッション①		
7	先行研究についての発表とディスカッション②		
8	先行研究についての発表とディスカッション③		
9	先行研究についての発表とディスカッション④		
10	修士論文のテーマと構成・内容についての検討①		
11	修士論文のテーマと構成・内容についての検討②		
12	修士論文のテーマと構成・内容についての検討③		
13	研究発表①		
14	研究発表②		
15	研究発表③		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	文献研究、先行研究の理解と共に子どもの表現及びアートに関する実践及び実態から学ぶ姿勢を必要とする。		
テキスト	各自の研究テーマに即して設定する。		
参考文献	各自の研究テーマに即し、授業内で提示する。		

科目名	研究指導Ⅲ	副題	
担当者	生田 久美子		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導Ⅲでは、研究指導Ⅰ及びⅡでの指導を踏まえて、「子ども人間学」という理念に沿う形で、各自のテーマに基づいた論文指導を行う。その際には、最新の研究動向や先行研究論文を踏まえて、論文指導を進める。		
授業のねらい・到達目標	1・修士論文の最終テーマに沿って、引き続き先行研究の文献の講読を行い、論文作成の十全な準備を行う。		
授業の方法・授業計画			
1	研究指導Ⅲに関するイントロダクション		
2	先行研究の振り返りと自らの視点の確立①		
3	先行研究の振り返りと自らの視点の確立②		
4	各自のテーマに沿った論文作成指導①		
5	各自のテーマに沿った論文作成指導②		
6	各自のテーマに沿った論文作成指導③		
7	各自のテーマに沿った論文作成指導④		
8	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤		
9	中間報告会に向けての指導①		
10	中間報告会に向けての指導②		
11	中間報告会に向けての指導③		
12	中間報告会の結果の振り返りと修正事項の確認①		
13	中間報告会の結果の振り返りと修正事項の確認②		
14	研究指導Ⅲの総括		
15	研究指導Ⅳへ向けての課題の確認		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	中間報告会等に向けての準備状況（50%），中間報告会等での発表内容（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を引き続き行い、授業後には教員から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	修士論文の作成という最終目標を見据えて、計画的に論文を作成すること。		
テキスト	授業中に指示する。		
参考文献	授業中に指示する。		

科目名	研究指導Ⅲ	副題	
担当者	米山 光儀		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導Ⅲでは、研究指導Ⅰ、Ⅱの内容を踏まえ修士論文の目次を作成し、修士論文を本格的に書き始めることを支援する。この授業では、主に教育に対する歴史的なアプローチの研究が中心となるが、教育への関心に基づく研究テーマであれば、異なった方法の研究も歓迎する。		
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の目次を作成する。 2. それに基づいて、執筆を開始する。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション		
2	修士論文の目次の検討①		
3	修士論文の目次の検討②		
4	修士論文の目次の検討③		
5	修士論文の目次の検討④		
6	修士論文各章の検討①		
7	修士論文各章の検討②		
8	修士論文各章の検討③		
9	修士論文各章の検討④		
10	修士論文各章の検討⑤		
11	中間報告会に向けての指導①		
12	中間報告会に向けての指導②		
13	中間報告会に向けての指導③		
14	中間報告会に向けての指導④		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。複数の参加者がいる場合は、グループディスカッションなども行う。		
評価方法及び評価基準	授業での発表内容（50%），中間報告会での発表内容（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	事前、事後学習ともに、実際の修士論文執筆となる。		
履修上の注意	教育への関心からの研究であることを忘れずに、取り組むこと。		
テキスト	適宜、紹介する。		
参考文献	適宜、紹介する。		

科目名	研究指導Ⅲ	副題	
担当者	犬塚 典子		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導Ⅲでは、研究指導Ⅰ、Ⅱの内容を踏まえ修士論文の研究テーマ及び研究計画具体化のための指導を行う。		
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の最終テーマに沿った文献・資料などの検索・収集、考察を行う。 2. 論文の内容および構成を整え中間発表を行う。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—論文の執筆に向けて		
2	論文の構成に関する討議①		
3	論文の構成に関する討議②		
4	論文の構成に関する討議③		
5	各自のテーマに沿った論文作成と経過報告①		
6	各自のテーマに沿った論文作成と経過報告②		
7	各自のテーマに沿った論文作成と経過報告③		
8	各自のテーマに沿った論文作成と経過報告④		
9	各自のテーマに沿った論文作成と経過報告⑤		
10	中間報告会に向けてのワークショップ①		
11	中間報告会に向けてのワークショップ②		
12	中間報告会に向けてのワークショップ③		
13	中間報告会に向けてのワークショップ④		
14	中間報告会に向けてのワークショップ⑤		
15	研究指導Ⅲの総括と今後の検討		
期末			
授業に関する連絡	全回を通じて修士論文執筆のための課題発見・解決型の学習活動を行う。第2回～第4回は学生主体の討議、第5回～第14回は学生による報告とワークショップを行う。授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	中間報告会等に向けての準備状況（50%），中間報告会等での発表内容（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	各回の指摘事項や課題について主体的に解決し，論文執筆を進める。		
履修上の注意	論文の完成に向けて，計画を立て着実に研究を行うこと。		
テキスト	授業内で指示する。		
参考文献	授業内で指示する。		

科目名	研究指導Ⅲ	副題	
担当者	安村 清美		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導Ⅲでは、研究指導Ⅰ、Ⅱの内容を踏まえ修士論文の研究テーマ及び研究計画具体化のための指導を行う。ここでは、表現体である人間としての「子ども」の表現特性に関する理解を基本に置き、各自の研究内容に応じて論文執筆に必要な実践記録、文献や資料収集を進め、グループでの中間発表などの機会を設け指導を行う。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 子どもの身体と行為に現れる表現及びアートに関して、子どもの身体へのまなざしの在り方や子どもに現れる身体行為をどう捉えるかなどを視点とし、修士論文の最終テーマに沿った実践の記録や文献・資料などの検索・収集を行う。 2. 論文の内容および構成を整え中間発表をおこなう。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー論文の執筆に向けて		
2	論文の構成に関する検討①		
3	論文の構成に関する検討②		
4	論文の構成に関する検討③		
5	各自のテーマに沿った論文作成指導①		
6	各自のテーマに沿った論文作成指導②		
7	各自のテーマに沿った論文作成指導③		
8	各自のテーマに沿った論文作成指導④		
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤		
10	中間報告会に向けての指導①		
11	中間報告会に向けての指導②		
12	中間報告会に向けての指導③		
13	中間報告会に向けての指導④		
14	中間報告会に向けての指導⑤		
15	研究指導Ⅲの総括と研究指導Ⅳへの課題		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	中間報告会等に向けての準備状況（50%），中間報告会等での発表内容（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	事前、事後学習ともに、各自の研究テーマと計画に沿って各回具体化した課題の集積をしていく。		
履修上の注意	子ども・保育における表現や子どもとアートに関する実践や実態を研究の手掛かりにして研究・論文作成を進めることを前提としている。		
テキスト	授業内で指示する。		
参考文献	授業内で指示する。		

科目名	研究指導Ⅲ	副題	
担当者	内藤 知美 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅲでは、研究指導Ⅰ～Ⅱでの指導を踏まえて、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>内藤担当の研究指導Ⅲでは、これまでの研究指導の内容を踏まえ、各受講者の修士論文のテーマに即し、論文作成のための指導を中心に進めていく。具体的には、各自の研究内容に応じて必要な文献やデータの収集を進め、その検討を通して、各自の研究テーマおよび研究計画具体化のための指導を行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	修士論文のテーマ決定とそのテーマに沿った文献やデータの収集・検討を進める。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文の執筆に当たってー		
2	保育学領域および修士論文のテーマに沿った論文を読む①		
3	保育学領域および修士論文のテーマに沿った論文を読む②		
4	保育学領域および修士論文のテーマに沿った論文を読む③		
5	各自のテーマに沿った論文作成指導①		
6	各自のテーマに沿った論文作成指導②		
7	各自のテーマに沿った論文作成指導③		
8	各自のテーマに沿った論文作成指導④		
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤		
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥		
11	中間報告会に向けての準備①		
12	中間報告会に向けての準備②		
13	中間報告会に向けての準備③		
14	中間報告会に向けての準備④		
15	中間報告および研究指導Ⅲの総括		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	中間報告会等に向けての準備状況（50%），中間報告会等での発表内容（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索やデータ収集・整理を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	イラム・シラージ/エレヌ・ハレット著. 秋田喜代美監訳(2017)『育み支え合う 保育リーダーシップ』明石書店ほか。修士論文のテーマに添ったテキストを用いる。		
参考文献	各自の修士論文の研究テーマに沿った文献を授業及び個別指導時に適宜指示する。		

科目名	研究指導Ⅲ	副題	
担当者	仙田 考		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅲでは、研究指導Ⅰ、Ⅱの内容を踏まえ、修士論文の研究テーマ及び研究計画具体化のための指導を行う。</p> <p>子どもと環境とのかかわり、子ども環境に関する理解を基本として、各自研究内容に即して、論文執筆に必要な記録、文献や資料等の収集を進め、グループでの中間発表などの機会を設け指導を行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもの環境とのかかわり、子ども環境に関して、修士論文の最終テーマに沿った調査、記録、文献や資料等の検索・収集を行う。</p> <p>2. 論文の内容および構成を整え中間発表を行う。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—論文の執筆に向けて		
2	論文の構成に関する検討①		
3	論文の構成に関する検討②		
4	論文の構成に関する検討③		
5	各自のテーマに沿った論文作成指導①		
6	各自のテーマに沿った論文作成指導②		
7	各自のテーマに沿った論文作成指導③		
8	各自のテーマに沿った論文作成指導④		
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤		
10	中間報告会に向けての指導①		
11	中間報告会に向けての指導②		
12	中間報告会に向けての指導③		
13	中間報告会に向けての指導④		
14	中間報告会に向けての指導⑤		
15	研究指導Ⅲの総括と研究指導Ⅳへの課題		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	中間報告会等に向けての準備状況（50%），中間報告会等での発表内容（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	事前、事後学習ともに、各自の研究テーマと計画に沿って各回具体化した課題の集積をしていく。		
履修上の注意	子ども・保育における表現や子どもとアートに関する実践や実態を研究の手掛かりにして研究・論文作成を進めることを前提としている。		
テキスト	各自の研究テーマに即して設定する。		
参考文献	各自の研究テーマに即し、授業内で提示する。		

科目名	研究指導Ⅳ	副題	
担当者	生田 久美子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導Ⅳでは、研究指導Ⅰ～Ⅲの指導を踏まえて、受講者は教員の指導を受けながら修士論文の執筆作業を始める。授業では、集中的に論文作成及び論文審査会での発表に向けて指導を行う。		
授業のねらい・到達目標	1・教員の指導を受けながら、執筆作業に集中し、計画的に論文の完成に向かう。		
授業の方法・授業計画			
1	研究指導Ⅳに関するイントロダクションー論文の完成に向けて		
2	論文の完成に向けての個別指導①		
3	論文の完成に向けての個別指導②		
4	論文の完成に向けての個別指導③		
5	論文の完成に向けての個別指導④		
6	論文の完成に向けての個別指導⑤		
7	論文の完成に向けての個別指導⑥		
8	論文の完成に向けての個別指導⑦		
9	論文の完成に向けての個別指導⑧		
10	論文の完成に向けての個別指導⑨		
11	論文審査の発表会へ向けての指導①		
12	論文審査の発表会へ向けての指導②		
13	論文審査の発表会へ向けての指導③		
14	論文審査の発表会へ向けての指導④		
15	審査結果の振り返りと修正事項（最小に限る）の確認		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行及び完成状況（50%）、論文審査の発表会に向けての準備状況（50%）を基に評価する。あくまでも最終目標は論文の完成にある。		
事前・事後学習の内容	最終論文の完成に向けて、足りない文献を検索し補充しながら、完成稿を作成する		
履修上の注意	完成に向けて計画的に作業を進めること。		
テキスト	授業中に指示する。		
参考文献	授業中に指示する。		

科目名	研究指導Ⅳ	副題	
担当者	米山 光儀		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導Ⅳでは、研究指導Ⅰ～Ⅲの指導を踏まえて、修士論文を完成させる。授業では、集中的に論文作成及び論文審査会での発表に向けて指導を行う。		
授業のねらい・到達目標	1・教員の指導を受けながら、執筆作業に集中し、計画的に論文の完成に向かう。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション		
2	論文の完成に向けた集団指導①		
3	論文の完成に向けた集団指導②		
4	論文の完成に向けた集団指導③		
5	論文の完成に向けた個別指導①		
6	論文の完成に向けた個別指導②		
7	論文の完成に向けた個別指導③		
8	論文の完成に向けた個別指導④		
9	論文の完成に向けた個別指導⑤		
10	論文の完成に向けた集団指導④		
11	研究発表会（論文審査）へ向けての指導①		
12	研究発表会（論文審査）へ向けての指導②		
13	研究発表会（論文審査）へ向けての指導③		
14	研究発表会（論文審査）へ向けての指導④		
15	審査結果の振り返り		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。複数の参加者がいる場合は、グループディスカッションなども行う。		
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行及び完成状況（50%）、論文審査の発表会に向けての準備状況（50%）を基に評価する。あくまでも最終目標は論文の完成にある。		
事前・事後学習の内容	最終論文の完成に向けて、足りない文献を検索し補充しながら、修士論文を執筆する。		
履修上の注意	完成に向けて計画的に作業を進めること。		
テキスト	適宜、紹介する。		
参考文献	適宜、紹介する。		

科目名	研究指導Ⅳ	副題	
担当者	犬塚 典子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導Ⅳでは、修士論文完成に向けて個別指導を行う。研究内容についてより理解を深め、各自の修士論文執筆を集中的に進められるよう指導を行う。		
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文を完成させ、今後の研究活動についての展望を得る。 2. 指導を受けながら執筆作業に集中し論文を完成させる。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—論文の完成に向けて		
2	論文の完成に向けて①：研究の目的と意義についての討議		
3	論文の完成に向けて②：研究方法、論文の校正についての討議		
4	論文の完成に向けて③：先行研究のレビューについての討議		
5	論文の完成に向けて④：序章の構成についての討議		
6	論文の完成に向けて⑤：各章の構成についての討議		
7	論文の完成に向けて⑥：各章の論理展開についての討議		
8	論文の完成に向けて⑦：各章の小括についての討議		
9	論文の完成に向けて⑧：終章の内容についての討議		
10	論文の完成に向けて⑨：倫理的配慮についての討議		
11	論文の完成に向けて⑩：資料、データ、注記等についての討議		
12	論文の完成に向けて⑪：研究成果の限定性の確認と今後の展望についての討議		
13	論文の完成に向けて⑫：学術論文としての言語表現の適格性についての討議		
14	研究発表会（論文審査）へ向けての準備		
15	研究活動の振り返りと今後の課題についての総括		
期末			
授業に関する連絡	全回を通じて修士論文執筆のための課題発見・解決型の学習活動を行う。第2回～第13回は学生主体の討議を行う。授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況（50%），研究発表会に向けての準備状況（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	各回の指摘事項や課題について主体的に解決し，論文執筆を進める。		
履修上の注意	論文の完成に向けて，計画を立て着実に研究を行うこと。		
テキスト	授業内で指示する。		
参考文献	授業内で指示する。		

科目名	研究指導Ⅳ	副題	
担当者	安村 清美		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導Ⅳでは、研究指導Ⅰ～Ⅲの指導を踏まえて、受講者は教員の指導を受けながら修士論文の執筆作業を始める。授業では、集中的に論文作成及び論文審査会での発表に向けて指導を行う。		
授業のねらい・到達目標	1・教員の指導を受けながら、執筆作業に集中し、計画的に論文の完成に向かう。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—論文の完成に向けて		
2	論文の完成に向けての個別指導①		
3	論文の完成に向けての個別指導②		
4	論文の完成に向けての個別指導③		
5	論文の完成に向けての個別指導④		
6	論文の完成に向けての個別指導⑤		
7	論文の完成に向けての個別指導⑥		
8	論文の完成に向けての個別指導⑦		
9	論文の完成に向けての個別指導⑧		
10	論文の完成に向けての個別指導⑨		
11	研究発表会（論文審査）へ向けての指導①		
12	研究発表会（論文審査）へ向けての指導②		
13	研究発表会（論文審査）へ向けての指導③		
14	研究発表会（論文審査）へ向けての指導④		
15	審査結果の振り返りと修正事項（最小に限る）の確認		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行及び完成状況（50%）、論文審査の発表会に向けての準備状況（50%）を基に評価する。あくまでも最終目標は論文の完成にある。		
事前・事後学習の内容	最終論文の完成に向けて、足りない文献を検索し補充しながら、完成稿を作成する		
履修上の注意	完成に向けて計画的に作業を進めること。		
テキスト	授業内で指示する。		
参考文献	授業内で指示する。		

科目名	研究指導Ⅳ	副題	
担当者	内藤 知美 (実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅳでは、研究指導Ⅰ～Ⅲでの指導を踏まえて、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。</p> <p>内藤担当の研究指導Ⅳでは、研究指導Ⅲの内容を踏まえ、各受講者の修士論文のテーマに即し、論文作成のための指導を中心に進めていく。具体的には、修士論文完成に向けての個別的な指導が中心となるが、受講者が共通に関心を持つべき論文や著書を用いて、適宜グループ指導も行っていく。</p>		
授業のねらい・到達目標	教員の指導を受けながら、修士論文を完成させる。今後の研究活動についてのテーマを持つ。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー論文の完成に向けてー		
2	論文の完成に向けての個別指導①		
3	論文の完成に向けての個別指導②		
4	論文の完成に向けての個別指導③		
5	論文の完成に向けての個別指導④		
6	論文の完成に向けての個別指導⑤		
7	論文の完成に向けての個別指導⑥		
8	論文の完成に向けての個別指導⑦		
9	論文の完成に向けての個別指導⑧		
10	論文の完成に向けての個別指導⑨		
11	論文の完成に向けての個別指導⑩		
12	論文の完成に向けての個別指導⑪		
13	研究発表会へ向けての指導①		
14	研究発表会へ向けての指導②		
15	修士論文についての総括と今後の研究活動		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況（50%），研究発表会に向けての準備状況（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索やデータ収集・整理を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	イラム・シラージ/エレヌ・ハレット著. 秋田喜代美監訳(2017)『育み支え合う 保育リーダーシップ』明石書店ほか。修士論文のテーマに添ったテキストを用いる。		
参考文献	各自の修士論文の研究テーマに沿った文献を授業及び個別指導時に適宜指示する。		

科目名	研究指導Ⅳ	副題	
担当者	仙田 考		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導Ⅳでは、研究指導Ⅰ～Ⅲの指導を踏まえて、受講者は教員の指導を受けながら修士論文の執筆作業を始める。授業では、集中的に論文作成及び論文審査会での発表に向けて指導を行う。		
授業のねらい・到達目標	・指導を受けながら執筆作業に集中し論文を完成させる。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—論文の完成に向けて		
2	論文の完成に向けての個別指導①		
3	論文の完成に向けての個別指導②		
4	論文の完成に向けての個別指導③		
5	論文の完成に向けての個別指導④		
6	論文の完成に向けての個別指導⑤		
7	論文の完成に向けての個別指導⑥		
8	論文の完成に向けての個別指導⑦		
9	論文の完成に向けての個別指導⑧		
10	論文の完成に向けての個別指導⑨		
11	研究発表会（論文審査）へ向けての指導①		
12	研究発表会（論文審査）へ向けての指導②		
13	研究発表会（論文審査）へ向けての指導③		
14	研究発表会（論文審査）へ向けての指導④		
15	審査結果の振り返りと修正事項（最小に限る）の確認		
期末			
授業に関する連絡	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。		
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行及び完成状況（50%）、論文審査の発表会に向けての準備状況（50%）を基に評価する。あくまでも最終目標は論文の完成にある。		
事前・事後学習の内容	最終論文の完成に向けて、足りない文献を検索し補充しながら、完成稿を作成する		
履修上の注意	完成に向けて計画的に作業を進めること。		
テキスト	各自の研究テーマに即して設定する。		
参考文献	各自の研究テーマに即し、授業内で提示する。		

専門科目 (心理学専攻)

※担当者欄の（実）は、担当者が
実務家教員であることを示します

科目名	心理的アセスメントに関する理論と実践	副題	
担当者	寺沢 英理子 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	この授業では、心理支援専門職にとって必須の知識・技術となる心理的アセスメントの理論と実践的適用について学ぶ。具体的には心理的アセスメントの意義と理論的背景、心理に関する相談、助言、指導等での適切なアセスメント活動である。アセスメントに使用される各種心理検査、面接技法を目的に合わせて組み合わせること（バッテリー化）とその実施、結果の解釈と報告書の作成まで独力で出来ることが求められる。		
授業のねらい・到達目標	1. 学部で身に着けた各種心理検査、面接の基本的技法のスキルアップを目標とする。 2. 当該事例に合わせて検査バッテリーを組み、実施後の結果の整理と報告書の作成ができる。		
授業の方法・授業計画			
1	心理実践場面における心理アセスメントの役割と進め方		
2	心理アセスメントに有用な情報及びその把握の手法について		
3	心理に関する支援を要する者等に対して、関与しながらの観察について		
4	心理検査の種類、成り立ち、特徴、意義及び限界について		
5	心理検査の適性及び実施方法を学び、正しく実施し、検査結果を解釈することについて		
6	生育歴等の情報、行動観察及び心理検査の結果等を統合させて、包括的に解釈をするためのスキル		
7	適切に記録、報告、振り返り等を行うために		
8	報告書のまとめ方		
9	心理アセスメントから治療介入への移行について		
10	保健医療分野における事例の心理アセスメント		
11	福祉分野における事例の心理アセスメント		
12	教育分野における事例の心理アセスメント		
13	司法・犯罪分野における事例の心理アセスメント		
14	産業・労働分野における事例の心理アセスメント		
15	ケース検討会議での発表の仕方とチーム・アプローチのあり方を理解する（事例を提示して）		
期末			
授業に関する連絡	毎回、終了前10分で授業についての質問、コメントを求める。他の受講生と疑問点の解消を共有し、次回に臨む。また、第10回目～第15回目では、グループディスカッションを行いながら事例の理解を深めていく。		
評価方法及び評価基準	実践分野を任意の一つ選択し、想定事例を考え（20%）、心理アセスメントの手続きの作成（30%）、実施、結果の解釈（30%）から、介入手続き（ゴール）設定（20%）までをまとめたレポートを作成し提出する。それらを基に評価する。		
事前・事後学習の内容	実践実習に係わる授業のため、事前・事後の内容は相互に関連することとなる。事前学習では、前回の授業内容を十分復習して授業に臨み、事後学習では一連のアセスメントの流れの中での現在の位置づけを確認し、次回に臨むこととする。		
履修上の注意	全講義に出席のこと。		
テキスト	以下の参考文献を中心に適宜指示する。		
参考文献	加藤志ほ子、吉村聡（編著）「ロールシャッハテストの所見の書き方」、岩崎学術出版社、2016年 近藤直司（著）「医療・保健・福祉・心理専門職のためのアセスメント技法を高めるハンドブック（第2版）」、明石出版、2015年 小海宏之（著）「神経心理学的アセスメント・ハンドブック」、金剛出版、2015年 津川律子（著）「精神科臨床における心理アセスメント入門」、西村書店、2009年 「臨床精神医学」編集委員会（編）「精神科臨床評価マニュアル（2016年版）」、アークメディア、2016年		

科目名	心の健康教育に関する理論と実践	副題	
担当者	伊東 秀幸 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>予防的な心理支援として重要となる心の健康教育に関する理論と実践を学ぶ。心の健康教育における公認心理師の役割、心の健康教育を支える理論、心の健康教育の内容と方法について理解を深め、実践出来ることが求められる。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>対象者のニーズをアセスメントし、適切な内容、方法による心の健康教育を実施できる。広く地域住民に対して、メディアを活用するなどした、心の健康に関する広報普及活動が展開できる。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	こころの健康とは何か		
2	健康教育とは何か		
3	こころの健康教育を支える理論 1 カウンセリング理論		
4	こころの健康教育を支える理論 2 コミュニティ心理学		
5	こころの健康教育を支える理論 3 学校心理学		
6	こころの健康教育の内容1 自己との関わりを考える		
7	こころの健康教育の内容2 他者・集団との関わりを考える		
8	こころの健康教育の内容3 学習・キャリアの課題		
9	こころの健康教育の内容4 心身の健康とのつきあい		
10	こころの健康教育の内容5 危機対処・レジリエンス		
11	こころの健康教育の方法 1 プログラムの組み立て		
12	こころの健康教育の方法 2 講義型のプログラム		
13	こころの健康教育の方法 3 演習型のプログラム		
14	こころの健康教育の方法 4 メディアを使った広報活動		
15	こころの健康教育の実際		
期末			
授業に関する連絡	<p>本授業では、第1回～第5回は主に講義形式、第6回～第14回は発表者を決め、発表者の発表を基にグループディスカッションを行う。第15回は、ワークショップ形式で授業を行う。</p>		
評価方法及び評価基準	<p>授業ごとに担当者を決め発表を行う、その発表の内容（50%）とレポートの内容（50%）で評価する。</p>		
事前・事後学習の内容	<p>授業ごとの発表担当者はもとより、履修者全員、事前学習を十分行うこと。事後は、授業の内容をまとめておくこと。</p>		
履修上の注意	<p>履修者は、積極的に授業に参加すること。</p>		
テキスト	<p>特になし、授業ごとにプリントを配布する。</p>		
参考文献	<p>『公衆衛生学』 医歯薬出版 『健康のための行動変容』 『こころの健康を支えるストレスとの向き合い方』</p>		

科目名	心理支援に関する理論と実践	副題	
担当者	伊東 正裕 (実) ・黒田 美保 (実) (オムニバス・一部共同)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	心に関する相談、助言、指導その他の援助である心理支援に関する理論と実践を学ぶ。心理支援に関する代表的な理論と方法を理解し心理支援場面に応用出来ること、支援対象者の特性や状況に応じ支援方法の柔軟な選択・調整をおこなえるようになることが求められる。		
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 心理支援に関する力動論に基づく心理療法の理論と方法を理解し説明出来る 心理支援に関する行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法を理解し説明出来る その他の主要な心理療法の理論と方法を理解し説明出来る 心理に関する相談・助言・指導等の活動に上記理論と方法を応用出来る 心理支援を要する人々の特性や状況に応じて心理支援方法を適切に選択・調整出来る 		
授業の方法・授業計画			
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方 (伊東・黒田)		
2	心理支援に関する力動論：フロイト世代 (伊東)		
3	心理支援に関する力動論：フロイト以降 (伊東)		
4	心理支援に関する行動論・認知論：行動療法 (黒田)		
5	心理支援に関する行動論・認知論：認知療法 (黒田)		
6	心理支援に関する行動論・認知論：認知行動療法 (黒田)		
7	心理支援に関するその他の理論・方法：パーソン・センタード、家族療法、内観法等 (伊東)		
8	心理支援に関する相談・助言・指導等への応用：力動論 (伊東)		
9	心理支援に関する相談・助言・指導等への応用：行動論・認知論 (黒田)		
10	心理支援に関する相談・助言・指導等への応用：その他の理論・方法 (伊東)		
11	心理支援対象者の特性・状況と力動論との関係 (伊東)		
12	心理支援対象者の特性・状況と行動論・認知論との関係 (黒田)		
13	心理支援対象者の特性・状況とその他の理論・方法との関係 (伊東)		
14	心理支援をおこなう者に共通な態度、考え方 (黒田)		
15	全体のまとめ (黒田)		
期末	レポート		
授業に関する連絡	本授業は、主に演習形式で行う。各回担当の履修生が理論や事例論文等のレジュメを作成し、発表・ディスカッションを中心とした授業を実施する。		
評価方法及び評価基準	期末レポート (60%)、授業中での課題等への取り組み (40%) で総合的に判断する。		
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間の学習を要する。		
履修上の注意	各回のテーマについて予習をしてから授業に臨むこと。また授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	特に使用しない。授業中に資料を配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		

科目名	家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践	副題	
担当者	渡邊 由己 (実)		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>家族・集団・地域社会の特徴を理解し、これらと心との関係を考慮した心理支援が出来ることは共生社会実現を志向する心理専門職に必須の知識と技法である。この授業では家族心理学やコミュニティ心理学の知見を応用しながら家族理解、集団理解、地域理解の理論とこれらに存在する様々な問題、および問題に対する支援、家族や地域の人々、多職種での連携と協働による支援それぞれの理論と方法、実践について討論もおこないながら学びを深める。</p>		
授業のねらい ・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・家族と構造と機能を理解し家族関係の課題とその克服に関する心理学的理論と知見を説明出来る ・家族関係の課題解決に対して心理支援の理論と技法を適切に導入出来る ・地域社会や集団（コミュニティ）の構造と機能を理解しそれらの課題とその克服に関する心理学的理論と知見を説明出来る ・地域社会や集団（コミュニティ）の課題解決に対して心理支援の理論と技法を適切に導入出来る 		
1	授業オリエンテーション		
2	家族の構造と機能、現代家族の特徴：現代家族の特徴がどのような背景を持っているか討論をおこなう		
3	家族関係と精神的健康：家族関係のどのような側面が家族成員の精神的健康と関連するか討論をおこなう		
4	家族関係のアセスメント法		
5	家族の心理支援における代表的な介入技法：各介入技法の長所、短所について討論をおこなう		
6	地域社会と集団（コミュニティ）の構造と機能、現代地域社会の特徴と課題		
7	地域や集団（コミュニティ）のアセスメント法		
8	地域や集団（コミュニティ）の支援プログラム		
9	支援プログラムの評価理論		
10	支援プログラムの実際例と課題：実際例に基づき課題について討論をおこなう		
11	コンサルテーションとコラボレーション		
12	地域や集団支援チーム形成に関する心理学的理論		
13	地域や集団支援チームによる活動の実際と課題：活動の実際に基づき課題について討論をおこなう		
14	地域や集団（コミュニティ）への心理支援専門職の基本的態度と倫理		
15	まとめと発展：授業全体を踏まえて心理職が地域で活動する場合の課題と対応策について討論をおこなう		
期末	レポート		
授業に関する 連絡	学生への連絡が必要な場合はメールを通しておこなう。第2回、3回、5回、10回、13回、15回は討論を予定するので、準備のうえ討論へ参加すること。		
評価方法 及び評価基準	期末レポート（50%）、授業中の討論や課題等（50%）で総合的に評価する。		
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で配布する資料に基づき、予習・復習内容を具体的に指示する。討論を予定している授業回においては、討論に必要な調べ学習等の事前学修をおこなうこと。		
履修上の注意	心理支援者としてこの授業がどう役立つのか、修士論文に役立つことはないだろうかなど、常に問題意識を持って積極的に関与されたい。		
テキスト	テキストは特に指定しない。授業中に資料を配布する。		
参考文献			

科目名	保健医療分野に関する理論と支援の展開	副題	
担当者	伊東秀幸 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>テーマは保健医療分野に関わる公認心理師の実践である。心の問題で不適応に陥っている人、心理的葛藤や家族関係・対人関係の困難から臨床心理学的な症状や問題を呈している人、慢性疾患を抱えた人、災害・犯罪被害等で心理的ケアが必要な人、心神喪失のため他害行為に至ってしまった人への臨床心理学的支援に関わる理論の獲得と、病院・診療所（精神科、心療内科等）、保健所、精神保健福祉センター等における、心理査定、心理療法に加え、デイケアやコンサルテーションなどの活動内容、プロセスについて理解を深める。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>保健医療分野の機関において、公認心理師として適切な実践ができるようになるため、機関と心理学的知識と技術を結びつけられるようにすることが授業の目的であり、以下の5点を到達目標とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保健医療機関の機能を説明できる。 ・保健医療機関の対象者を説明できる。 ・保健医療機関の公認心理師の役割を説明できる。 ・保健医療機関で必要な知識、技術を説明できる。 ・対象者への適切な支援を考察できる。 		
授業の方法・授業計画			
1	授業の進め方について		
2	保健医療分野の機関について		
3	精神科病院における公認心理師の役割		
4	精神科病院の事例検討		
5	精神科クリニックにおける公認心理師の役割		
6	精神科クリニックの事例検討		
7	精神科デイケアにおける公認心理師の役割		
8	精神科デイケアの事例検討		
9	医療観察病棟における公認心理師の役割		
10	医療観察病棟の事例検討		
11	保健所・保健センターにおける公認心理師の役割		
12	保健所・保健センターの事例検討		
13	精神保健福祉センターにおける公認心理師の役割		
14	精神保健福祉センターの事例検討		
15	コンサルテーションの方法		
期末			
授業に関する連絡	本授業では、講義と事例検討によって理解を深める。 事例検討の授業では、グループディスカッションで進めていく。		
評価方法及び評価基準	レポート（70%）、発言や討議への参加度（30%）		
事前・事後学習の内容	事前としては、各回のテーマについて文献などにより下調べをしておくこと。 事後としては、授業内で配布したプリント等により、知識を整理しておくこと。		
履修上の注意	履修者は、積極的に授業に参加すること。		
テキスト	特になし、授業ごとにプリントを配布する。		
参考文献	「精神医学的面接」みすず書房 「解決のための面接技法」金剛出版		

科目名	教育分野に関する理論と支援の展開	副題	
担当者	大塚 秀実 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>テーマは教育分野に関わる実践である。学校内での対人関係困難等の学校不適応、不登校傾向、学業困難やいじめ、ハラスメント、ひきこもり等の問題に関わる理論の獲得と、心理支援の展開について、スクールカウンセリングから大学学生相談まで含めて、討論もおこないながら理解する。さらに学校内の相談室、教育センター、各種教育相談機関等において、本人との面接、保護者との面接、教員へのコンサルテーション、必要に応じた他機関との連携支援活動等、教育分野に関する広汎な支援の実践についても討論も用いて理解を深める。</p>		
授業のねらい ・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・教育現場をめぐる臨床心理学的課題について理解し説明出来る ・いじめ、ハラスメントに対する心理支援の実践を理解し説明出来る ・学業困難、進路未決定に対する心理支援の実践を理解し説明出来る ・不登校、ひきこもりに対する心理支援の実践を理解し説明出来る ・心理支援における教員や保護者、他機関との連携に関する実践を理解し説明出来る 		
授業の方法・授業計画			
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方		
2	教育現場における臨床心理学的課題		
3	いじめをめぐる心理支援の実践：実際例に基づき課題や対応策について討論する		
4	学校ハラスメントをめぐる心理支援の実践		
5	児童・生徒の学業困難に関する心理支援の実践：実際例に基づき課題や対応策について討論する		
6	学習支援に関する心理支援の実践		
7	進路選択に関連した心理支援の実践		
8	キャリア探索をめぐる心理支援の実践		
9	不登校生徒に対する心理支援の実践：実際例に基づき課題や対応策について討論する		
10	ひきこもりに対する心理支援の実践		
11	スクールカウンセリング、学生相談の役割と実際：学校領域への支援に関する課題について討論する		
12	教育センターなど外部教育支援機関における心理支援の役割と実際		
13	教員や保護者との連携・協働による心理支援の実践		
14	教育分野における心理支援の課題：教育分野全体への支援の課題について討論する		
15	全体のまとめ		
期末	レポート		
授業に関する 連絡	学生への連絡はメールを利用しておこなう。毎回討論をおこなうので、準備のうえ積極的に討論へ参加すること。		
評価方法 及び評価基準	期末レポート（50％）・授業中の課題や討論等への取り組み（50％）で総合的に判断する。		
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて4時間の学習を求める。		
履修上の注意			
テキスト	特に使用しない。授業中に資料を配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		

科目名	福祉分野に関する理論と支援の展開	副題	
担当者	小山 望		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>テーマは共生社会の実現に向けた 福祉分野に関わる公認心理師の役割と支援について事例を通じて理解する。子どもをめぐる様々な問題、虐待、非行、障害児・者、DV被害、高齢者の問題など、福祉に関わる幅広い領域に関する臨床心理学的理論の獲得と、児童相談所、療育施設、心身障害者福祉センター、障害者作業所、女性相談センター、老人福祉施設等における支援活動の実際について理解を深める。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 日常生活を営む上で生じる困難、障害を緩和、解決するための社会制度、福祉サービスにおける心理職の専門性と役割を理解し、説明できる。 2. 各領域における支援のための理論の理解と具体的支援の方法を身につけ、説明できる。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	共生社会に向けた福祉分野における公認心理師の役割について		
2	子ども・家庭福祉分野の理論と支援①：社会的擁護と児童福祉施設		
3	子ども・家庭福祉分野の理論と支援②：子育て支援の事例（1）		
4	子ども・家庭福祉分野の理論と支援③：子育て支援の事例（2）		
5	子ども・家庭福祉分野の理論と支援④：児童虐待への対応		
6	障害児・者福祉分野の理解と支援①：障害児支援 ICFの概念		
7	障害児・者福祉分野の理解と支援②：障害者支援とインクルーシブ教育の実際		
8	障害児・者福祉分野の理解と支援③：障害者就労の現状と心理職の役割（事例）		
9	高齢者福祉分野の理解と支援①：超高齢社会の現状と課題		
10	高齢者福祉分野の理解と支援②：高齢者介入技法に係わる心理職の役割		
11	被害者支援分野の理論と支援①：DV被害者支援における心理職の役割（事例）		
12	被害者支援分野の理論と支援②：犯罪被害者支援における心理職の役割		
13	被害者支援分野の理論と支援③：災害被害者支援における心理職の役割（事例）		
14	地域福祉分野の理論と展開：ひきこもりへの対応（コミュニティケア）における心理職の役割（事例）		
15	共生社会における福祉分野の多職種連携のあり方について		
期末			
授業に関する連絡	<p>ロールプレイング体験やグループワークを実施する。ロールプレイングに積極的に参加すること。毎回、最後の10分で体験授業についての質問、感想を求める。体験学習をシェアし他の受講生との共通理解を深めることとする。</p>		
評価方法及び評価基準	<p>期末レポート（50%）と授業中の体験活動への取り組み（50%）で総合的な評価とする。</p>		
事前・事後学習の内容	<p>毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後と合わせて2時間の学習を求める</p>		
履修上の注意	<p>連続性があるので全講義に出席のこと。</p>		
テキスト	<p>各回のテーマに合わせて以下の参考文献を中心に適宜指示する。 小山望編著 共生社会学入門 福村出版 2024年</p>		
参考文献	<p>小山望他監修 これからの共生社会を考える 多様性を受容するインクルーシブな社会づくり 福村出版 中島健一編 福祉心理学 遠見書房 柿澤敏文編 障害児心理学 北大路書房 小西聖子（著）「犯罪被害者のメンタルヘルス」、誠信書房、2008年</p>		

科目名	司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	副題	
担当者	山岡 あゆち (実)		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>本講義は司法・犯罪分野における理論と公認心理師の支援に関する授業である。犯罪・非行、犯罪被害及び家事事件についての基本的事項を学習する。また、非行少年、受刑者及び保護観察対象者の社会復帰に向けて、家庭裁判所、少年鑑別所、拘置所、刑務所、少年院、保護観察所、児童相談所、児童自立支援施設、警察等さまざまな機関における心理支援の内容や連携・協働を理解するほか、犯罪被害者に対する心理支援や家事事件における心理支援についても取り上げる。</p> <p>グループワークは小グループでテーマについて話し合い、授業の最後に全体で共有する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・司法・犯罪分野における臨床心理学的課題について理解し、説明が出来る。 ・司法・犯罪分野における心理支援専門職の具体的な実践内容について理解し、説明出来る。 ・司法・犯罪分野における様々な機関で実践される心理支援のプロセスについて理解し、説明出来る。 		
授業の方法・授業計画			
1	授業オリエンテーション（授業概要、到達目標、授業の進め方）、司法・犯罪分野における基本事項		
2	少年非行（1）：警察、家庭裁判所における心理支援の実践		
3	少年非行（2）：少年院、児童自立支援施設における心理支援の実践		
4	少年非行（3）：犯罪・非行のアセスメント①～少年鑑別所の鑑別を例として		
5	少年非行（4）：犯罪・非行のアセスメント②～司法犯罪領域における面接の特質		
6	成人司法（1）：司法・犯罪分野の成人に対する心理支援の基本的事項		
7	成人司法（2）：架空事例に基づくアセスメント実習		
8	成人司法（3）：刑事施設における処遇		
9	リスクアセスメントと犯罪予防		
10	保護観察所における心理支援の実際		
11	精神鑑定と情状鑑定に関する基本事項、家事事件における心理支援の実際（離婚と面会交流）		
12	犯罪被害者に対する心理支援の実際		
13	犯罪に関する理論		
14	各自の発表と議論（司法領域の課題）		
15	各自の発表と議論（司法領域における心理職の課題）		
期末			
授業に関する連絡	基本的な連絡はEメールで、また、資料共有はGoogle Classroomなどのクラウドサービスを利用して行う。グループワークを積極的に取り入れ、全体で共有する。積極的な参加を求める。		
評価方法及び評価基準	発表（40%）、授業中のグループワークや課題等への取り組み（60%）で総合的に判断する。発表では、それまでの講義内容で特に関心を持ったトピックを一つ選び、関連事項について更に調べた内容を発表すること。		
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間の学習を求める。		
履修上の注意	法律用語や司法・犯罪分野特有の専門用語が多いため、わからない場合は教員に質問するなどして早い段階で解決すること。正解のない間に自分なりの答えを見つけ、議論において周囲と共有するといった形で積極的に参加すること。		
テキスト	森丈弓・荒井崇史・嶋田美和・大江由香・杉浦希・角田亮（2021）『ライブラリ 心理学の社15 司法・犯罪心理学』サイエンス社。その他、授業中に適宜資料を配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		

科目名	産業・労働分野に関する理論と支援の展開	副題	
担当者	伊東 正裕 (実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>テーマは産業・労働分野における公認心理師の実践である。国や地方公共団体、企業内でのメンタルヘルス向上のため行われている臨床心理学的支援、コンサルテーション等に関わる理論の獲得と、企業内相談室、企業内健康管理センター、安全保健センター、ハローワーク、障害者職業センター等において行われている職業相談活動、具体的には職業への適性を巡る問題、発達障害を抱える人への臨床心理学的支援活動の実際とプロセスを理解する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・現代の産業・労働分野における臨床心理学的課題について理解し説明が出来る。 ・産業・労働分野における心理支援専門職の具体的な実践内容について理解し説明出来る。 ・就職や転職、企業内キャリア形成に関わる心理支援について理解し説明出来る。 		
授業の方法・授業計画			
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方		
2	産業・労働分野における臨床心理学的問題の変遷		
3	産業・労働分野における現代的な臨床心理学的課題		
4	企業内健康管理部門における心理支援専門職の機能と役割		
5	企業内健康管理部門における心理支援専門職の実践活動の実際		
6	外部EAP機関における心理支援専門職の機能と役割		
7	外部EAP機関における心理支援専門職の実践活動の実際		
8	就職・転職支援機関における心理支援専門職の機能と役割		
9	就職・転職支援機関における心理支援専門職の実践活動の実際		
10	障がい者就労支援における心理支援専門職の機能と役割		
11	障がい者就労支援における心理支援専門職の実践活動の実際		
12	ひきこもり・ホームレス支援における心理支援専門職の機能と役割		
13	ひきこもり・ホームレス支援における心理支援専門職の実践活動の実際		
14	産業・労働分野における心理支援専門職の課題		
15	全体のまとめ		
期末	レポート		
授業に関する連絡	本授業は、演習形式で行う。各回担当の履修性が理論や事例に関するレジュメを作成し、発表・ディスカッションを中心とした授業を実施する。		
評価方法及び評価基準	期末レポート（60%）、授業中の課題等への取り組み（40%）		
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間の学習を求める。		
履修上の注意	各回のテーマについて予習をしてから授業に臨むこと。また授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	特に使用しない。必要に応じて授業中に資料を配布する。		
参考文献	熊倉伸宏「メンタルヘルス原論」新興医学出版社, 2004		

科目名	心理実践実習 I	副題	
担当者	伊東 秀幸 (実) ・伊東 正裕 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>本科目の開講時期に配属される実習先において、心理に関する支援を要する者等に対して、現場の指導者とともに心理に関する支援の実践を行う。なお、保健医療機関（病院または診療所等）での実習を必須とし、それ以外に以下の4分野から最低2分野以上での実習を義務付ける。他の4分野とは、福祉、教育、司法、産業・労働であり、3分野以上の選択は、心理実践実習Ⅱ・Ⅲと調整する。</p> <p>なお、本科目において、実習前指導及び実習後指導を実施する。</p>		
授業のねらい ・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・心理支援対象者に対する以下の技術と知識を修得し活用出来る：コミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援 ・支援対象者の理解とニーズを把握し支援計画を作成出来る ・支援対象者へのチームアプローチが出来る ・多職種連携や地域連携が出来る ・公認心理師としての職業倫理および法的義務を理解し説明出来る 		
授業の方法・授業計画			
<ul style="list-style-type: none"> ・実習前準備として、実習先の機関・施設の役割等を調べ、実習計画の作成を行う。 ・設定された実習計画にしたがい、学外施設、機関、病院等で現場指導者の指導と管理の下、実習をおこなう。 ・実習生はこれまで身につけた知識や技術、学部レベルの実習で学んだことを基礎として、上記到達目標を達成するため見学だけではなく、支援対象者への支援を実践しながら実習をおこなうこと。 ・実習後は、実習中に気づいた課題等について振り返りを行い、実習全体の総括を行う。 			
期末			
授業に関する 連絡	実習中の緊急事態に備えて携帯電話、メール等の活用もおこなう。		
評価方法 及び評価基準	現場指導者の評価、実習前・実習中・実習後の指導による評価、課題レポート等の評価により総合的におこなう。		
事前・事後 学習の内容	毎回の実習前にはその回の計画をよく確認し、実習後には実習記録を書きながら十分な振り返りをおこなうこと。		
履修上の注意	実習は、施設・機関等の協力により実施出来ることである。実習先に迷惑をかける態度は厳しく指導する。場合によっては実習中止になることもあるので注意すること。		
テキスト			
参考文献			

科目名	心理実践実習Ⅱ	副題	
担当者	伊東 秀幸(実)・伊東 正裕(実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>本科目の開講時期に配属される実習先において、心理に関する支援を要する者等に対して、現場の指導者とともに心理に関する支援の実践を行う。なお、保健医療機関（病院または診療所等）での実習を必須とし、それ以外に以下の4分野から最低2分野以上での実習を義務付ける。他の4分野とは、福祉、教育、司法、産業・労働であり、3分野以上の選択は、心理実践実習Ⅰ・Ⅲと調整する。</p> <p>なお、本科目において、実習前指導及び実習後指導を実施する。</p>		
授業のねらい ・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・心理支援対象者に対する以下の技術と知識を修得し活用出来る：コミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援 ・支援対象者の理解とニーズを把握し支援計画を作成出来る ・支援対象者へのチームアプローチが出来る ・多職種連携や地域連携が出来る ・公認心理師としての職業倫理および法的義務を理解し説明出来る 		
授業の方法・授業計画			
<ul style="list-style-type: none"> ・実習前準備として、実習先の機関・施設の役割等を調べ、実習計画の作成を行う。 ・設定された実習計画にしたがい、学外施設、機関、病院等で現場指導者の指導と管理の下、実習をおこなう。 ・実習生はこれまで身につけた知識や技術、学部レベルの実習で学んだことを基礎として、上記到達目標を達成するため見学だけではなく、支援対象者への支援を実践しながら実習をおこなうこと。 ・実習後は、実習中に気づいた課題等について振り返りを行い、実習全体の総括を行う。 			
期末			
授業に関する 連絡	実習中の緊急事態に備えて携帯電話、メール等の活用もおこなう。		
評価方法 及び評価基準	現場指導者の評価、実習前・実習中・実習後の指導による評価、課題レポート等の評価により総合的におこなう。		
事前・事後 学習の内容	毎回の実習前にはその回の計画をよく確認し、実習後には実習記録を書きながら十分な振り返りをおこなうこと。		
履修上の注意	実習は、施設・機関等の協力により実施出来ることである。実習先に迷惑をかける態度は厳しく指導する。場合によっては実習中止になることもあるので注意すること。		
テキスト			
参考文献			

科目名	心理実践実習Ⅲ	副題	
担当者	伊東 秀幸（実）・伊東 正裕（実）		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	<p>本科目の開講時期に配属される実習先において、心理に関する支援を要する者等に対して、現場の指導者とともに心理に関する支援の実践を行う。なお、保健医療機関（病院または診療所等）での実習を必須とし、それ以外に以下の4分野から最低2分野以上での実習を義務付ける。他の4分野とは、福祉、教育、司法、産業・労働であり、3分野以上の選択は、心理実践実習Ⅰ・Ⅱと調整する。</p> <p>なお、本科目において、実習前指導及び実習後指導を実施する。</p>		
授業のねらい ・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・心理支援対象者に対する以下の技術と知識を修得し活用出来る：コミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援 ・支援対象者の理解とニーズを把握し支援計画を作成出来る ・支援対象者へのチームアプローチが出来る ・多職種連携や地域連携が出来る ・公認心理師としての職業倫理および法的義務を理解し説明出来る 		
授業の方法・授業計画			
<ul style="list-style-type: none"> ・実習前準備として、実習先の機関・施設の役割等を調べ、実習計画の作成を行う。 ・設定された実習計画にしたがい、学外施設、機関、病院等で現場指導者の指導と管理の下、実習をおこなう。 ・実習生はこれまで身につけた知識や技術、学部レベルの実習で学んだことを基礎として、上記到達目標を達成するため見学だけではなく、支援対象者への支援を実践しながら実習をおこなうこと。 ・実習後は、実習中に気づいた課題等について振り返りを行い、実習全体の総括を行う。 			
期末			
授業に関する 連絡	実習中の緊急事態に備えて携帯電話、メール等の活用もおこなう。		
評価方法 及び評価基準	現場指導者の評価、実習前・実習中・実習後の指導による評価、課題レポート等の評価により総合的におこなう。		
事前・事後 学習の内容	毎回の実習前にはその回の計画をよく確認し、実習後には実習記録を書きながら十分な振り返りをおこなうこと。		
履修上の注意	実習は、施設・機関等の協力により実施出来ることである。実習先に迷惑をかける態度は厳しく指導する。場合によっては実習中止になることもあるので注意すること。		
テキスト			
参考文献			

科目名	精神医学特論	副題	
担当者	未定		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	精神医学の歴史、症候学、病院論など精神医学の見方、考え方を学び、心理学的理論モデルとの違い、実践における協働のあり方を学ぶ。具体的には、現在の症状分類の基本である「ICD-10精神および行動の障害」(WHO)、「DSM-5精神疾患の分類と診断の手引き」(米国精神医学会)を用い、現代精神医学の基礎知識の獲得を目指す。		
授業のねらい・到達目標	代表的な精神障害に関する専門的知識を取得する。 患者が体験する「病い」と生活・人生への影響について理解を深める。 専門的知識を支援の実践に応用する視点を獲得する。 精神医学および精神障害に関する様々な論点につき、自ら問いを發し論ずることができる。		
授業の方法・授業計画			
1	精神医学の基礎		
2	精神科診断学		
3	精神症状学		
4	認知症疾患		
5	統合失調症(1) (概念、診断、疫学、成因仮説、症状)		
1	統合失調症(2) (認知機能障害、特徴的行動特性、経過、予後、治療法)		
7	気分障害(1) (概念、診断、成因仮説、症状)		
8	気分障害(2) (経過、予後、治療法、特別なうつ病)		
9	神経症性障害、ストレス関連障害、身体表現性障害		
10	パーソナリティ障害、摂食障害		
11	小児期の精神障害		
12	身体的治療法		
13	精神療法		
14	環境・社会療法		
15	精神医療の現状		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義形式で進行するが、授業毎に質問や討議の時間を確保する。		
評価方法及び評価基準	レポート(70%)、質問・発話・討議への参加度(30%)		
事前・事後学習の内容	事前学習は、授業テーマにつき、文献などを使用して下調べをするとともに、生活や実践場面を通して生じた疑問点をまとめて授業に臨むこと。 事後学習は、授業で配布したプリントに基づき知識を整理すること。		
履修上の注意	履修者は積極的に討議に参加すること。		
テキスト	特になし。授業毎にプリントを配布する。		
参考文献	ICD-10精神および行動の障害 - 臨床記述と診断ガイドライン新訂版(医学書院) 現代臨床精神医学第12版(金剛出版)		

科目名	リハビリテーション心理学特論	副題	
担当者	久保 義郎 (実)		
開講期	前期 (隔年)	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	リハビリテーション心理学は、障害や慢性疾患のあるクライアントの理解・改善・治療を目的として、心理学的知見を活用してきた分野である。この領域での心理職には、関係する要因（生物的、心理的、社会的、職業的、政治的要因）すべてを考慮に入れて、個人が最適な身体的、心理的、対人的機能を発揮できるように支援することが求められる。具体的には、身体障害、知的障害、発達障害、精神障害、高次脳機能障害について概説でき、それらの障害のある人のニーズを認識し、必要な支援を案出できることである。		
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 障害の概念について理解し、説明できる ・ 各障害の状態像、原因、ニーズ、心理学的支援、支援制度について理解し、説明できる ・ 障害を有する当事者の家族、関係他職種への支援・連携について理解し、説明できる 		
授業の方法・授業計画			
1	リハビリテーションとリハビリテーション心理学の位置づけ		
2	心理学におけるリハビリテーション心理学の位置づけ		
3	リハビリテーション心理学と心理学的リハビリテーション		
4	リハビリテーション心理学各論①：脊髄損傷・肢節切断のリハビリテーション心理学		
5	リハビリテーション心理学各論②：慢性疼痛のリハビリテーション心理学		
6	リハビリテーション心理学各論③：リハビリテーションにおける神経心理学的実践		
7	リハビリテーション心理学各論④：高次脳機能障害のリハビリテーション		
8	リハビリテーション心理学各論⑤：発達障害のリハビリテーション心理学		
9	リハビリテーション心理学各論⑥：認知リハビリテーションの考え方		
10	リハビリテーション心理学各論⑦：精神障害のリハビリテーション心理学		
11	リハビリテーション心理学各論⑧：リハビリテーション心理学から見た認知症		
12	リハビリテーション心理学各論⑨：障害受容について		
13	職業的リハビリテーションにおけるリハビリテーション心理学の役割と貢献		
14	ポジティブ心理学からリハビリテーション心理学への貢献		
15	リハビリテーション・チームにおける心理師の位置づけ		
期末	レポート		
授業に関する連絡	第4回～第12回においては、各障害の状態像、原因、ニーズ、心理学的支援、支援制度、および障害を有する当事者の家族、関係他職種への支援・連携について調べて発表し、討論を行なって理解する。		
評価方法及び評価基準	期末レポート（50%）、授業中の課題等への取り組み（50%）で総合的に判断する。		
事前・事後学習の内容	講義の展開に合わせ適宜、文献を紹介するので、できる限りそれらを事前に読んで授業に望むこと。また、講義で学んだこと（各論）がリハビリテーションの考え方（思想）にどのように発展するのかを常に考えながら事後学習に努めること。		
履修上の注意			
テキスト	以下の参考文献の中から、各回に関連のある章を取上げ授業を進める。		
参考文献	Frank, RG., Rosenthal, M., & Capla, B., "Handbook of Rehabilitation Psychology, 2nd ed." APA, 2010. 千野直一（監）・福原彰夫・才藤栄一（編）「現代リハビリテーション医学（改訂第4版）」、金剛出版、2017年 金田嘉清（著）「リハビリテーション（放送大学教材）改訂新版」、放送大学教育振興会、2013年		

科目名	コミュニティ臨床心理学特論	副題	
担当者	渡邊 由己 (実)		
開講期	後期 (隔年)	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>社会問題が複雑・多様化してくるなかでは、単一の視点や方法では解決が難しく、より多面的で協働的な介入が必要になってくる。この授業では、コミュニティ支援において鍵となるチーム支援について、その基本理論と実際を学ぶ。また、コミュニティへの介入は介入プログラムとして体系的に実施される。この介入効果を評価する、プログラム評価の理論と方法についても学ぶ。また、心理支援実践におけるこれらの課題について、討論を通して理解を深めていく。</p>		
授業のねらい ・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティについての考え方の歴史の変遷と、現代コミュニティが抱える臨床心理学的課題を理解し説明出来る ・チームの種類、機能、形成に関する心理学的理論と知識を理解し説明出来る ・心理支援専門職のコミュニティ・ケアチームにおける機能と役割、課題を理解し説明出来る ・プログラム評価の理論と方法、評価プロセスについて理解し説明出来る ・心理支援プログラムの具体例と評価について理解し説明出来る 		
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方		
2	コミュニティの定義：歴史の変遷と新しいコミュニティの考え方		
3	コミュニティの変化と精神的健康との関係：コミュニティの変化が人々の精神的健康に与える影響について討論をおこなう		
4	コミュニティへの心理支援：コンサルテーションとコラボレーション活動の実際		
5	コミュニティへの心理支援：予防と危機介入		
6	支援チームの背景理論：チームの種類と機能		
7	支援チームの背景理論：チームワークとチームビルディング		
8	コミュニティ・ケアにおける心理支援専門職の役割と課題：役割と課題について討論をおこなう		
9	コミュニティ支援のための臨床心理学的予防・介入プログラムの実際		
10	プログラム評価の理論：プロセス評価		
11	プログラム評価の理論：アウトカム評価		
12	プログラム評価の課題：計画と実施上の課題		
13	プログラム評価の課題：効果評価上の課題：プログラム評価の課題について討論をおこなう		
14	現代的コミュニティにおける臨床心理学的特徴と課題		
15	全体のまとめ		
期末	レポート課題		
授業に関する 連絡	学生への連絡はメールを用いておこなう。講義形式の授業であるが第3回、8回、13回の授業では討論をおこなうので、準備のうえ積極的に討論へ参加すること。		
評価方法 及び評価基準	授業での課題や討論に対する評価 (50%)、期末のレポート課題 (50%)		
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて毎回4時間の取り組みを求める。		
履修上の注意	「家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践」のアドバンスとなる。		
テキスト	特に使用しない。授業中に資料を配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		

科目名	認知行動療法特論	副題	
担当者	久保 義郎 (実)		
開講期	後期 (隔年)	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>心理療法には様々な理論と技法があるが、認知行動療法は学習理論を主とする心理学基礎研究の知見に基づき実証性の高い心理療法として発展してきた。この講義では認知行動療法の根幹とも言える学習理論について学ぶとともに、これまでの歴史的発展を概観した後、認知行動療法の理論と実践について学んでゆく。また、治療効果に関する研究知見にも注目し、心理療法的介入効果の実証手続きと、その課題について理解を深める。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 認知行動療法の理論的枠組について、歴史的変遷を踏まえて理解し説明できる ・ 認知行動療法の理論と手法について理解し説明出来る ・ 治療効果検証の基本的な実験デザインについて理解し説明出来る 		
授業の方法・授業計画			
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方		
2	行動療法、認知療法、認知行動療法の概念と展開		
3	学習理論 (レスポンド条件づけ)		
4	学習理論 (オペラント条件づけ)		
5	学習理論 (社会的学習理論)		
6	学習理論に基づくアセスメント：見立て・目標設定・介入計画		
7	レスポンド条件づけに基づく行動療法 (第1世代) と事例検討：不安・恐怖反応の低減		
8	オペラント条件づけに基づく行動療法 (第1世代) と事例検討：適応行動の増大		
9	オペラント条件づけに基づく行動療法 (第1世代) と事例検討：不適応行動の低減		
10	レスポンドとオペラント双方に基づく行動療法 (第1世代) と事例検討：不安回避行動の低減		
11	社会的学習理論に基づく認知行動療法 (第2世代) と事例検討：モデリング、SST		
12	社会的学習理論に基づく認知行動療法 (第2世代) と事例検討：認知的行動変容		
13	第3世代 (認知) 行動療法と事例検討：行動活性化療法、ACT		
14	第3世代 (認知) 行動療法と事例検討：マインドフルネス認知療法		
15	治療効果の検証とその課題		
期末	試験実施 (レポート)		
授業に関する連絡	<p>第3回～第5回は、受講生が資料作成・発表を行う。 第7回～第14回は、受講者が事例論文を用意して発表、および事例検討を行う。</p>		
評価方法及び評価基準	期末レポート (50%)、授業中の課題等への取り組み (50%) で総合的に判断する。		
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間を要する。		
履修上の注意			
テキスト	特に指定しない。授業中に資料を配布する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	臨床心理学特論	副題	
担当者	寺沢 英理子 (実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	臨床心理学は人の病、障がい、生活や人間関係上の様々な困難などから生じる心の問題を、「心理内界」、「行動や認知」、「人間的関わり」などの側面から解明し、解決への道筋をつけようとしてきた。この授業ではいくつかの事例を題材として、こうした多面的な視点で事例を見ていくことをおこない、心理支援の専門職としての知識と技術の幅を広げていくことを目標とする。		
授業のねらい ・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 心理支援に関する複数の理論を体系的に理解し説明出来る 心理支援に関する複数の理論を用いて事例を多面的に考察し説明出来る 		
授業の方法・授業計画			
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方		
2	心理支援に関する理論の確認：心理テストに関する理論		
3	心理支援に関する理論の確認：心理面接に関する理論		
4	心理支援に関する理論の確認：臨床心理学的地域支援に関する理論		
5	心理支援に関する理論の確認：心理支援対象者理解に関する理論		
6	心理支援に関する理論の確認：医学的診断に関する理論		
7	教材事例：子どもの事例		
8	教材事例：青年期の事例		
9	教材事例：成人の事例		
10	教材事例：高齢者の事例		
11	教材事例：障がい者の事例		
12	教材事例：精神疾患の事例		
13	教材事例：不登校、ひきこもりの事例		
14	教材事例：虐待、DV、PTSDの事例		
15	全体のまとめ		
期末	レポート		
授業に関する 連絡	ほぼ毎回、一定時間のグループディスカッションを行うので、活発なディスカッションを期待する。		
評価方法 及び評価基準	期末レポート（50%）、授業中の取り組み（50%）で総合的に判断する。		
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間を求める。		
履修上の注意			
テキスト	特に使用しない。授業で資料を配布する。		
参考文献	授業で適宜紹介する。		

科目名	公認心理師総合演習 I	副題	
担当者	黒田 美保 (実) ・大塚秀実 (実) (共同)		
開講期	前期	単位数	2単位
配当年次	2年次		
授業の概要	<p>これまでの講義、演習、実習で各論的、領域的に形成された知識や技術を総動員し、高度な専門性を発揮して心理支援を実践出来る公認心理師を目標とした総合的な演習をおこなう。特にこの授業では、学内の心理相談室における事例の検討を行う。また、臨床心理検査の実習も行う（報告書の書き方を含む）。事例をまとめ、より良い心理支援を検討することや、心理検査を実施し心理支援のために役立てることは、公認心理師に求められる大きな責務である。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・事例を検討することで、公認心理師に必要な知識を整理し、体系的・総合的に活用できる。 ・事例を検討することで、多角的に心理支援を捉え、臨床現場で実践できる。 ・心理検査報告書等の基本的な書き方を理解し作成できる。 		
授業の方法・授業計画			
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、事例検討の進め方		
2	心理検査実習1：適応行動・不適応行動の検査		
3	Vineland-II適応行動検査の実習（報告書の提出）		
4	代表的な心理検査2：WISC-V知能検査（あるいはWAIS-IV）の実習（報告書の提出）		
5	事例検討1		
6	事例検討2		
7	事例検討3		
8	事例検討4		
9	事例検討5		
10	事例検討6		
11	事例検討7		
12	事例検討8		
13	事例検討9		
14	事例検討10		
15	事例検討11		
期末			
授業に関する連絡	メール等を用いておこなう。		
評価方法及び評価基準	事例のまとめ（70%）、発言や討議への参加度（30%）で総合的に判断する。		
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事例のまとめ、検査報告書作成など事前事後合わせて数時間程度を必要とする。。		
履修上の注意	欠席は可能な限りしないこと。事例のまとめを各自作成する。		
テキスト	特に使用しない。必要に応じて授業中に資料を配布する。□		
参考文献	「これからの現場で役立つ臨床心理検査：解説編」津川律子・黒田美保（編著），2023.		

科目名	公認心理師総合演習Ⅱ	副題	
担当者	黒田美保（実）・大塚秀実（実）（共同）		
開講期	後期	単位数	2単位
	配当年次	2年次	
授業の概要	公認心理師総合演習Ⅰと同じく、講義、演習、実習で各論的、領域的に形成された知識や技術を総動員し、高度な専門性を発揮して心理支援を実践出来る公認心理師を目標とした総合的な演習をおこなう。主に、学内の心理相談室における事例の検討を行う。また、必要に応じて心理支援法の実習も行う。また、支援の効果検証のための取り組みも行う。事例をまとめ、より良い心理支援を検討することや、支援の効果について科学的に検討することは、公認心理師に求められる大きな責務である。心理支援の実践においても「いかに科学性を担保して介入するか」という点から理解が不可欠である。		
授業のねらい ・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・事例を検討することで、公認心理師に必要な知識を深め、包括的に活用出来る。 ・事例を検討することで、多角的に心理支援を捉え、臨床現場で実践できる。 ・心理支援実践と研究理論の繋がりを理解し、適切な量的、質的分析を実施し支援効果を検証することが出来る。 		
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方		
2	事例検討1		
3	事例検討2		
4	事例検討3		
5	事例検討4		
6	事例検討5		
7	事例検討6		
8	事例検討7		
9	事例検討8		
10	事例検討9		
11	事例検討10		
12	事例検討11		
13	心理支援の効果を検証するための各領域に関する知識の確認：神経・生理・感情心理学領域		
14	心理支援の効果を検証するための各領域に関する知識の確認：社会心理学領域		
15	心理支援の効果を検証するための各領域に関する知識の確認：人格・臨床心理学領域		
期末			
授業に関する 連絡	メール等を用いて行う。		
評価方法 及び評価基準	事例のまとめ（70%）、発言や討議への参加度（30%）で総合的に判断する。		
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事例のまとめ、検査報告書作成など事前事後合わせて数時間程度を必要とする。		
履修上の注意	できる限り欠席しないこと。事例のまとめを作成する。		
テキスト	特に使用しない。必要に応じて授業中に資料を配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	伊東 秀幸 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>学部課程で培ってきた心理学の専門知識と技術を活かして、修士論文に結実する研究を遂行するための実践的スキルと問題解決能力を養う。自らの研究テーマに関する論文を広く渉猟し、精読し、批判的に検討し論点を深めて行く訓練をする。</p> <p>伊東秀幸の研究指導 I では、精神障害者の生活に焦点を当て、すべての人にとって共通する社会との関係性について考察していく。その過程の中で、自らの修士論文のテーマを確定していく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 修士論文のテーマを決定するために、担当者の専門領域に冠する必要な文献を収集する。 2. 修士論文の作成に向けて基礎論文を講読し、理解する。 3. 講読した論文の要旨をまとめ、自己の研究テーマの決定に結びつけることができる。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—修士論文の作成に向けて		
2	文献検索の方法		
3	研究テーマの構想と研究手続きの確認		
4	基礎文献の輪読：精神保健福祉と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む①		
5	基礎文献の輪読：精神保健福祉と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む②		
6	基礎文献の輪読：精神保健福祉と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む③		
7	基礎文献の輪読：精神保健福祉と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む④		
8	基礎文献の輪読：精神保健福祉と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む⑤		
9	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む①		
10	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む②		
11	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む③		
12	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む④		
13	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む⑤		
14	研究発表		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する連絡	本講は、課題発見・解決型学修であることを認識し、主体的積極的に授業に臨むこと。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。事前・事後学修に毎回2時間を求める。		
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で講読した文献の内容とを結びつけて、修士論文のテーマを形成すること。		
テキスト	各字の研究テーマに沿って設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	伊東 正裕 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>学部課程で培ってきた心理学の専門知識と技術を活かして、修士論文に結実する研究を遂行するための実践的スキルと問題解決能力を養う。自らの研究テーマに関する論文を広く渉猟し、精読し、批判的に検討し論点を深めて行く訓練をする。</p> <p>伊東正裕が担当する研究指導 I では、精神分析学の考え方から行動を理解分析するという視点を学ぶとともに、受講生自らの興味関心を基に修士論文のテーマを模索していく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 修士論文のテーマを決定するために、担当者の専門領域に関する必要な文献を収集する。 2. 修士論文の作成に向けて基礎論文を講読し、理解する。 3. 講読した論文の要旨をまとめ、自己の研究テーマの決定に結びつけることができる。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて		
2	文献検索の方法		
3	研究テーマの構想と研究手続きの確認		
4	基礎文献の輪読：力動的対人理解に関する総説論文（レビュー）を読む①		
5	基礎文献の輪読：力動的対人理解に関する総説論文（レビュー）を読む②		
6	基礎文献の輪読：力動的対人理解に関する総説論文（レビュー）を読む③		
7	基礎文献の輪読：力動的対人理解に関する総説論文（レビュー）を読む④		
8	基礎文献の輪読：力動的対人理解に関する総説論文（レビュー）を読む⑤		
9	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む①		
10	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む②		
11	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む③		
12	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む④		
13	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む⑤		
14	研究発表		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する連絡	本講では、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。事前・事後学修に毎回2時間を求める。		
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で講読した文献の内容とを結びつけて、修士論文のテーマを形成すること。		
テキスト	各字の研究テーマに沿って設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	寺沢 英理子 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	修士論文の作成指導を行う。臨床心理学の専門家を目指す者として、修士論文作成という最終目標に向かって、研究の遂行に必要な知識を学びながら、広くテーマの概観を行う。最終的には、研究テーマを決めて先行研究からの学びを進め、研究の方向性を具体化することを目指す。基本的には、毎回、グループディスカッションは一定時間実施することになる。		
授業のねらい ・到達目標	1. 修士論文、学会誌論文等を読みながら、論文作成のお作法を学ぶ。 2. 研究テーマの模索と決定 3. 研究テーマに関する先行研究の収集と読み込み 4. 自他を尊重しながらディスカッションできる		
1	イントロダクション：研究とは、論文作成とは		
2	文献検索と文献収集、論文の読み方		
3	修士論文から学ぶ①		
4	修士論文から学ぶ②		
5	紀要論文から学ぶ①		
6	紀要論文から学ぶ②		
7	学会誌論文から学ぶ①		
8	学会誌論文から学ぶ②		
9	研究テーマに関連する先行研究からの学び①		
10	研究テーマに関連する先行研究からの学び②		
11	研究テーマに関連する先行研究からの学び③		
12	研究テーマの絞り込み		
13	研究計画作成①		
14	研究計画作成②		
15	研究発表およびまとめ		
期末			
授業に関する補足説明 (課題に対するフィードバック、履修上のルール等)	「研究者」として研究に取り組むという意識を持って、積極的に取り組むことを期待する。		
評価方法及び評価基準	授業での発表の準備・発表、意見交換等を含む研究への取り組み (50%) 研究発表 (50%)		
事前・事後学習の内容	授業で学ぶ論文を読み込み、担当の場合には発表の準備をする。担当でない場合には、担当者への質問を考えておく。活発なディスカッションを行う準備である。事後には、授業での学びを自分の研究にどのように活用できるかをまとめること。事前・事後学修に毎回2時間は必要である。		
履修上の注意	自分の研究テーマに関する問題意識を常に持ち、授業での学びを自分の研究にどのように活用できるかという視点からまとめること。健康管理に留意して、欠席しないこと。これは、臨床家になる上で、大変重要なセルフコントロールの獲得に寄与する。		
テキスト	適宜選択する。選択に関する指導も行う。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	小山 望		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>心理学の専門知識と技術を活かして、修士論文に結実する研究を遂行するための実践的スキルと問題解決能力を養う。自らの研究テーマに関する論文を広く渉猟し、精読し、批判的に検討し論点を深めて行く訓練をする。小山の研究指導 I では、共生社会に向けたインクルーシブ教育や福祉心理的な支援に関する研究の視点を学ぶとともに、修士論文のテーマを検討するための関連論文の検索を行う。共生社会に向けた心理実践している専門機関などに調査に行くこともある</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 修士論文のテーマを決定するために、担当者の専門領域に冠する必要な文献を収集する。 2. 修士論文の作成に向けて基礎論文を講読し、理解する。 3. 講読した論文の要旨をまとめ、自己の研究テーマの決定に結びつけることができる。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて		
2	文献検索の方法		
3	研究テーマの構想と研究手続きの確認		
4	基礎文献の輪読：福祉と教育分野に関する心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む①		
5	基礎文献の輪読：福祉と教育分野に関する心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む②		
6	基礎文献の輪読：福祉と教育分野に関する心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む③		
7	基礎文献の輪読：福祉と教育分野に関する心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む④		
8	基礎文献の輪読：福祉と教育分野に関する心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む⑤		
9	基礎文献の輪読：インクルーシブ教育や共生社会に関する心理支援の 総説論文の引用・参考文献を読む①		
10	基礎文献の輪読：インクルーシブ教育や共生社会に関する心理支援総説論文の引用・参考文献を読む②		
11	基礎文献の輪読：インクルーシブ教育や共生社会に関するの総説論文の引用・参考文献を読む③		
12	基礎文献の輪読：インクルーシブ教育や共生社会に関する総説論文の引用・参考文献を読む④		
13	基礎文献の輪読：インクルーシブ教育や共生社会に関する総説論文の引用・参考文献を読む⑤		
14	研究発表		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	本講では、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。事前・事後学修に毎回2時間を求める。		
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で購読した文献の内容とを結びつけ、修士論文のテーマを形成すること。		
テキスト	各自の研究テーマに沿って設定する 小山望編著 共生社会学入門 福村出版 2024年		
参考文献	<p>小山望他監修「これからの共生社会を考える」ー多様性を受容するインクルーシブな社会づくりー福村出版 2020年 小山望編著 「誰もが大切されるインクルーシブ保育」建帛社 2023年 志水宏吉他編 「共生学宣言」大阪大学出版会 2020年 高橋智編「インクルージョン時代の障害理解と生涯発達支援」日本文化科学社 2007年</p>		

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	黒田 美保		
開講期	前期	単位数	2 単位 配当年次 1 年次
授業の概要	学部課程で培ってきた心理学の専門知識と技術を活かして、修士論文に結実する研究を遂行するための実践的スキルと問題解決能力を養う。研究指導 I では、発達障害に焦点を当て教科書を用いて障害の概念や発達障害のアセスメント、支援方法について学ぶ。その過程の中で、自らの修士論文のテーマを確定していく。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自らの研究テーマを探すために発達障害の総合的なテキストを読み、発達障害について理解し説明できる。 2. 修士論文のテーマに沿った研究手続きを構想し、先行研究の論文を探索・収集できる。 3. 関連論文を熟読後、その内容について発表できる。 		
1	オリエンテーション—修士課程の研究の進め方		
2	文献検索の方法		
3	研究テーマの構想と研究手続きの確認		
4	教科書「公認心理師のための発達障害入門」の輪読と発表①		
5	教科書「公認心理師のための発達障害入門」の輪読と発表②		
6	教科書「公認心理師のための発達障害入門」の輪読と発表③		
7	教科書「公認心理師のための発達障害入門」の輪読と発表④		
8	教科書「公認心理師のための発達障害入門」の輪読と発表⑤		
9	教科書「公認心理師のための発達障害入門」の輪読と発表⑥		
10	教科書「公認心理師のための発達障害入門」の輪読と発表⑦		
11	文献収集した論文の発表①		
12	文献収集した論文の発表②		
13	文献収集した論文の発表③		
14	文献収集した論文の発表④		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する連絡	本講では、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。事前・事後学修に毎回2時間を求める。		
履修上の注意	自分自身の研究テーマを見つけるための積極的な態度が求められる。また、問題意識と授業で講読した文献の内容とを結びつけて、修士論文のテーマを形成すること。		
テキスト	「公認心理師のための発達障害入門」黒田美保、金子書房、2018年		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	櫻井 優太		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>学部課程で培ってきた心理学の専門知識と技術を活かして、修士論文に結実する研究を遂行するための実践的スキルと問題解決能力を養う。自らの研究テーマに関する論文を広く渉猟し、精読し、批判的に検討し論点を深めていく訓練をする。</p> <p>櫻井優太の研究指導 I では、感情と身体の関係性や、感情が生起するプロセスに焦点を当てて考察していく。その過程の中で、自らの修士論文のテーマを確定していく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 修士論文のテーマを決定するために、担当者の専門領域に関する必要な文献を収集する。 2. 修士論文の作成に向けて基礎論文を講読し、理解する。 3. 講読した論文の要旨をまとめ、自己の研究テーマの決定に結びつける。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—修士論文の作成に向けて①		
2	文献検索の方法		
3	研究テーマの構想と研究手続きの確認		
4	基礎文献の輪読：感情心理学や生理心理学に関する総説論文（レビュー）を読む①		
5	基礎文献の輪読：感情心理学や生理心理学に関する総説論文（レビュー）を読む②		
6	基礎文献の輪読：感情心理学や生理心理学に関する総説論文（レビュー）を読む③		
7	基礎文献の輪読：感情心理学や生理心理学に関する総説論文（レビュー）を読む④		
8	基礎文献の輪読：感情心理学や生理心理学に関する総説論文（レビュー）を読む⑤		
9	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む①		
10	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む②		
11	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む③		
12	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む④		
13	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む⑤		
14	研究発表		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する連絡	本講は、課題発見・解決型学修であることを認識し、主体的積極的に授業に臨むこと。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。事前・事後学修に毎回2時間を求める。		
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で講読した文献の内容とを結びつけて、修士論文のテーマを形成すること。		
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導 I	副題	
担当者	大塚 秀実 (実)		
開講期	前期	単位数	2 単位 配当年次 1 年次
授業の概要	<p>学部課程で培ってきた心理学の専門知識と技術を活かして、修士論文に結実する研究を遂行するための実践的スキルと問題解決能力を養う。自らの研究テーマに関する論文を広く渉猟し、精読し、批判的に検討し論点を深めて行く訓練をする。</p> <p>大塚秀実の研究指導 I では、現場や当事者の中で実際に「何が」「どのように」「なぜ」起きているのかを探索すること、また意思決定のプロセスを質的研究によって明らかにすることを旨とする。様々な文献を読み込み、自らの興味関心を明確にして修士論文のテーマを確定していく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 修士論文のテーマを決定するために、担当者の専門領域に冠する必要な文献を収集する。 2. 修士論文の作成に向けて基礎論文を講読し、理解する。 3. 講読した論文の要旨をまとめ、自己の研究テーマの決定に結びつけることができる。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて		
2	文献検索の方法		
3	研究テーマの構想と研究手続きの確認		
4	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む①		
5	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む②		
6	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む③		
7	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む④		
8	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑤		
9	研究構想発表①		
10	研究構想発表②		
11	研究構想発表③		
12	研究構想発表④		
13	研究構想発表⑤		
14	研究に関する討論		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する連絡	本講は、課題発見・解決型学修であることを認識し、主体的積極的に授業に臨むこと。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。事前・事後学修に毎回2時間を求める。		
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で講読した文献の内容とを結びつけて、修士論文のテーマを形成すること。		
テキスト	各字の研究テーマに沿って設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	伊東 秀幸 (実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	研究指導Ⅰで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 伊東秀幸の研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰの内容を踏まえて修士論文の研究テーマを確立し、それに沿った先行研究を行い、研究計画を考える。		
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の作成に向けて、自らの研究テーマに沿った基礎文献を購読し、理解する。 2. 修士論文のテーマに沿った研究手続きを構想し、パイロットスタディに着手する。 3. パイロットスタディの実施により、より明確な修士論文のための研究手続きの構築ができる。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて②		
2	研究テーマの設定と研究手続きの確認		
3	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む①		
4	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む②		
5	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む③		
6	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む④		
7	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑤		
8	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑥		
9	研究手続きに沿ったパイロットスタディの開始		
10	パイロットスタディの実施①		
11	パイロットスタディの実施②		
12	パイロットスタディの実施③		
13	研究発表①		
14	研究発表②		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する連絡	本講は、課題発見・解決型学修であることを認識し、主体的積極的に授業に臨むこと。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。事前・事後学修として2時間を求める。		
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で購読した文献の内容とを結びつけ、修士論文のテーマを形成すること。		
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	伊東 正裕 (実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	研究指導Iで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 伊東正裕が担当する研究指導Ⅱでは、修士論文のテーマに関連した論文を検索しテーマを深め、確定していく。		
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の作成に向けて、自らの研究テーマに沿った基礎文献を購読し、理解する。 2. 修士論文のテーマに沿った研究手続きを構想し、パイロットスタディに着手する。 3. パイロットスタディの実施により、より明確な修士論文のための研究手続きの構築ができる。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて②		
2	研究テーマの設定と研究手続きの確認		
3	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む①		
4	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む②		
5	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む③		
6	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む④		
7	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑤		
8	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑥		
9	研究手続きに沿ったパイロットスタディの開始		
10	パイロットスタディの実施①		
11	パイロットスタディの実施②		
12	パイロットスタディの実施③		
13	研究発表①		
14	研究発表②		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する連絡	本講では、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。事前・事後学修として2時間を求める。		
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で購読した文献の内容とを結びつけ、修士論文のテーマを形成すること。		
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	寺沢 英理子 (実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>修士論文の作成指導を行う。研究指導Ⅰで作成した研究計画をより具体化するための学びを進めていく。さらに多くの先行研究や関連研究論文に目を通し、自分の研究の切り口の精度を上げていく。</p> <p>研究計画を整え、倫理的配慮に関しても検討する。基本的には、毎回、グループディスカッションは一定時間実施することになる。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 研究テーマに関して、研究の視点と方法を検討する。 2. 倫理申請とパイロットスタディの試み 3. 研究方法の見直し 4. ディスカッションしながら、自分の考えをよりクリアにまとめられる 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション：研究方法、論文執筆		
2	論文執筆要項の学び		
3	先行研究論文・関連研究論文①		
4	先行研究論文・関連研究論文②		
5	先行研究論文・関連研究論文③		
6	パイロットスタディの検討と倫理の検討		
7	研究計画書作成		
8	パイロットスタディの実施①		
9	パイロットスタディの実施②		
10	パイロットスタディの実施③		
11	先行研究論文・関連研究論文④		
12	先行研究論文・関連研究論文⑤		
13	研究計画書の見直し		
14	研究発表		
15	まとめ		
期末			
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	本講では、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	授業での発表の準備・発表、意見交換等を含む研究への取り組み（50%） 研究発表（50%）		
事前・事後学習の内容	論文からの学びも、研究計画書の作成に関しても発表の準備をする。担当でない場合には、担当者への質問を考えておく。活発なディスカッションを行う準備である。事後には、授業での学びを自分の研究にどのように活用できるかをまとめること。事前・事後学修に毎回2時間は必要である。		
履修上の注意	各自の研究テーマに沿って、必要に応じて設定する。		
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	小山 望		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	研究指導Ⅰで獲得した知識と研究の方法を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 小山が担当する研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰの内容を踏まえて修士論文の研究テーマに関連した論文を検索し、テーマを深め、確定していく。		
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の作成に向けて、自らの研究テーマに沿った基礎文献を購読し、理解する。 2. 修士論文のテーマに沿った研究手続きを構想し、パイロットスタディに着手する。 3. パイロットスタディの実施により、より明確な修士論文のための研究手続きの構築ができる。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて②		
2	研究テーマの設定と研究手続きの確認		
3	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む①		
4	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む②		
5	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む③		
6	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む④		
7	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑤		
8	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑥		
9	研究手続きに沿ったパイロットスタディの開始		
10	パイロットスタディの実施①		
11	パイロットスタディの実施②		
12	パイロットスタディの実施③		
13	研究発表①		
14	研究発表②		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	本講では、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。デザイン発表に向けた準備を進める		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。事前・事後学修として2時間を求める。		
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で購読した文献の内容とを結びつけ、修士論文のテーマを形成すること。		
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	黒田 美保		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	研究指導Ⅰで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰの内容を踏まえて修士論文の研究テーマを確立し、それに沿ったパイロット研究を行い、研究計画をより精緻化する。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 修士論文の作成に向けて、自らの研究テーマに沿った基礎文献を精読する。 2. 修士論文のテーマに沿った研究手続きを構想し、パイロットスタディに着手する。 3. パイロットスタディの実施により、より明確な修士論文のための研究手続きの構築ができる。 		
授業の方法・授業計画			
1	オリエンテーション—修士論文の作成に向けて		
2	研究テーマの設定と研究手続きの確認		
3	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む①		
4	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む②		
5	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む③		
6	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む④		
7	研究計画の発表①		
8	研究計画の発表②		
9	研究手続きに沿ったパイロットスタディの開始		
10	パイロットスタディの実施①		
11	パイロットスタディの実施②		
12	パイロットスタディの実施③		
13	研究発表①		
14	研究発表②		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する連絡	本講では、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。事前・事後学修として2時間を求める。		
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で購読した文献の内容とを結びつけ、修士論文のテーマを形成すること。		
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	櫻井 優太		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅰで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。</p> <p>櫻井優太の研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰの内容を踏まえて修士論文の研究テーマを確立し、それに沿ったパイロットスタディを行い、研究計画を考える。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 修士論文の作成に向けて、自らの研究テーマに沿った基礎文献を講読し、理解する。</p> <p>2. 修士論文のテーマに沿った研究手続きを構想し、パイロットスタディに着手する。</p> <p>3. パイロットスタディの実施により、より明確な修士論文のための研究手続きを構築する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて②		
2	研究テーマの設定と研究手続きの確認		
3	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む①		
4	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む②		
5	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む③		
6	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む④		
7	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑤		
8	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑥		
9	研究手続きに沿ったパイロットスタディの開始		
10	パイロットスタディの実施①		
11	パイロットスタディの実施②		
12	パイロットスタディの実施③		
13	研究発表①		
14	研究発表②		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する連絡	本講は、課題発見・解決型学修であることを認識し、主体的積極的に授業に臨むこと。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。事前・事後学修として2時間を求める。		
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で講読した文献の内容とを結びつけ、修士論文のテーマを形成すること。		
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅱ	副題	
担当者	大塚 秀実 (実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅰで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。</p> <p>大塚秀実の研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰの内容を踏まえて修士論文の研究テーマを確立し、それに沿った先行研究を行い、研究計画を考える。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 修士論文の作成に向けて、自らの研究テーマに沿った基礎文献を購読し、理解する。 2. 修士論文のテーマに沿った研究手続きを構想し、パイロットスタディに着手する。 3. パイロットスタディの実施により、より明確な修士論文のための研究手続きの構築ができる。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて②		
2	研究テーマの設定と研究手続きの確認		
3	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む①		
4	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む②		
5	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む③		
6	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む④		
7	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑤		
8	研究手続きに沿ったパイロットスタディの実施①		
9	研究手続きに沿ったパイロットスタディの実施②		
10	研究手続きに沿ったパイロットスタディの実施③		
11	研究手続きに沿ったパイロットスタディの実施④		
12	研究手続きに沿ったパイロットスタディの実施⑤		
13	研究発表①		
14	研究発表②		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する連絡	本講は、課題発見・解決型学修であることを認識し、主体的積極的に授業に臨むこと。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。事前・事後学修として2時間を求める。		
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で購読した文献の内容とを結びつけ、修士論文のテーマを形成すること。		
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅲ	副題	
担当者	伊東 秀幸 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導Ⅱで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 伊東秀幸の研究指導Ⅲでは、修士論文のテーマに沿った文献研究、フィールドワークを行い、データの収集と分析を行う。		
授業のねらい・到達目標	修士論文のテーマに沿った論文購読を行い、研究手続きに従った研究を実行し、それらを中間発表に結実させる。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—論文の執筆に向けて		
2	パイロットスタディから発展させた本論文作成への指導		
3	各自のテーマに沿った論文作成指導①		
4	各自のテーマに沿った論文作成指導②		
5	各自のテーマに沿った論文作成指導③		
6	各自のテーマに沿った論文作成指導④		
7	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤		
8	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥		
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑦		
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑧		
11	各自のテーマに沿った論文作成指導⑨		
12	各自のテーマに沿った論文作成指導⑩		
13	中間報告会に向けての指導①		
14	中間報告会に向けての指導②		
15	本論文完成に向けての課題の確認と総括		
期末			
授業に関する連絡	本講は、課題発見・解決型学修であることを認識し、主体的積極的に授業に臨むこと。		
評価方法及び評価基準	中間報告会に向けての準備状況 (50%)、中間報告会での発表内容 (50%)		
事前・事後学習の内容	事前に各自の研究テーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。		
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅲ	副題	
担当者	伊東 正裕 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位
	配当年次	2年次	
授業の概要	研究指導IIで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 伊東正裕が担当する研究指導Ⅲでは、研究計画にそって修士論文の作成の基盤となる先行研究を行い、調査によってデータを収集する。		
授業のねらい・到達目標	修士論文のテーマに沿った論文購読を行い、研究手続きに従った研究を実行し、それらを中間発表に結実させる。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—論文の執筆に向けて		
2	パイロットスタディから発展させた本論文作成への指導		
3	各自のテーマに沿った論文作成指導①		
4	各自のテーマに沿った論文作成指導②		
5	各自のテーマに沿った論文作成指導③		
6	各自のテーマに沿った論文作成指導④		
7	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤		
8	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥		
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑦		
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑧		
11	各自のテーマに沿った論文作成指導⑨		
12	各自のテーマに沿った論文作成指導⑩		
13	中間報告会に向けての指導①		
14	中間報告会に向けての指導②		
15	本論文完成に向けての課題の確認と総括		
期末			
授業に関する連絡	本講は、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	中間報告会に向けての準備状況 (50%)、中間報告会での発表内容 (50%)		
事前・事後学習の内容	事前に各自の研究テーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。		
テキスト	各自のテーマに沿った文献を適宜指示する。		
参考文献	南風原朝和・下山晴彦・市川伸一 (編) 「心理学研究入門—調査・実験から実践まで」、東京大学出版会、2001年 福島哲夫 (編) 「臨床現場で役立つ質的研究法—臨床心理学の卒論・修論から投稿論文まで」、新曜社、2016年 小川俊樹・望月聡 (著) 「臨床心理学研究法特論 (放送大学大学院教材)」、放送大学教育振興会、2018年 高野陽太郎、岡隆 (編) 「心理学研究法 (補訂版)」、有斐閣、2017年		

科目名	研究指導Ⅲ	副題	
担当者	寺沢 英理子 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	修士論文の作成指導を行う。研究指導Ⅱで練り上げた研究計画を実現する手続きに入る。データ収集に関する具体的方法の準備を行い、実施する。さらに、データの分析を行いながら、論文の執筆を進める。それぞれの研究を進めながら、3回に1回程度、グループディスカッションの時間を持ち、お互いの研究を深めていく。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 研究計画にそって、データ収集を進める。 2. データの分析を行う。 3. 論文執筆を進める。 4. ディスカッションで得た知見を自分の研究に活かすことができる。 		
1	イントロダクション：データ収集、分析方法		
2	データ収集の進捗報告と分析①		
3	データ収集の進捗報告と分析②		
4	データ収集の進捗報告と分析③		
5	データ収集の進捗報告と分析④		
6	データ収集の進捗報告と分析⑤		
7	論文作成の指導①		
8	論文作成の指導②		
9	論文作成の指導③		
10	論文作成の指導④		
11	論文作成の指導⑤		
12	中間報告会に向けての指導①		
13	中間報告会に向けての指導②		
14	研究の振り返りと微調整①		
15	研究の振り返りと微調整②		
期末			
授業に関する補足説明 (課題に対するフィードバック、履修上のルール等)	本講では、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	研究への取り組み (50%)、中間報告会での発表内容およびプレゼンテーション (50%)		
事前・事後学習の内容	研究を進めながら、論文執筆にも時間を割く時期になるので、修論作成のためにかかなりの時間を充てることを期待する。		
履修上の注意	体調管理には特に注意しながら、研究内容の理解および論文執筆に精力を注いでほしい。		
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅲ	副題	
担当者	小山 望		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導IIで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 小山の研究指導Ⅲでは、修士論文のテーマに沿った文献研究、調査研究、インタビュー調査、フィールドワークを行い、データの収集と分析を行う。		
授業のねらい・到達目標	修士論文のテーマに沿った論文購読を行い、研究手続きに従った研究を実行し、それらを中間発表に結実させる。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—論文の執筆に向けて		
2	パイロットスタディから発展させた本論文作成への指導		
3	各自のテーマに沿った論文作成指導①		
4	各自のテーマに沿った論文作成指導②		
5	各自のテーマに沿った論文作成指導③		
6	各自のテーマに沿った論文作成指導④		
7	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤		
8	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥		
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑦		
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑧		
11	各自のテーマに沿った論文作成指導⑨		
12	各自のテーマに沿った論文作成指導⑩		
13	中間報告会に向けての指導①		
14	中間報告会に向けての指導②		
15	本論文完成に向けての課題の確認と総括		
期末			
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	本講は、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	中間報告会に向けての準備状況（50%）、中間報告会での発表内容（50%）		
事前・事後学習の内容	事前に各自の研究テーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。		
テキスト	各自の研究テーマに沿って、必要であれば個別に設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅲ	副題	
担当者	黒田 美保		
開講期	前期	単位数	2単位
	配当年次	2年次	
授業の概要	研究指導IIで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 研究指導Ⅲでは、修士論文のテーマに沿った文献研究、質問紙調査や面接調査、実験などを行い、データの収集と分析を行う。		
授業のねらい・到達目標	修士論文のテーマに沿った論文購読を行い、研究手続きに従った研究を実行し、それらを中間発表に結実させる。		
授業の方法・授業計画			
1	オリエンテーション—論文の執筆に向けて		
2	パイロットスタディから発展させた本論文作成への指導		
3	各自のテーマに沿った論文作成指導①		
4	各自のテーマに沿った論文作成指導②		
5	各自のテーマに沿った論文作成指導③		
6	各自のテーマに沿った論文作成指導④		
7	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤		
8	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥		
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑦		
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑧		
11	各自のテーマに沿った論文作成指導⑨		
12	各自のテーマに沿った論文作成指導⑩		
13	中間報告会に向けての指導①		
14	中間報告会に向けての指導②		
15	本論文完成に向けての課題の確認と総括		
期末			
授業に関する連絡	本講は、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	中間報告会に向けての準備状況（50%）、中間報告会での発表内容（50%）		
事前・事後学習の内容	事前に各自の研究テーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。		
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅲ	副題	
担当者	櫻井 優太		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅱで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 櫻井優太の研究指導Ⅲでは、修士論文のテーマに沿った文献研究、質問紙調査、実験等を行い、データの収集と分析を行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	修士論文のテーマに沿った論文講読を行い、研究手続きに従った研究を実行し、それらを中間発表に結実させる。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—論文の執筆に向けて		
2	パイロットスタディから発展させた本論文作成への指導		
3	各自のテーマに沿った論文作成指導①		
4	各自のテーマに沿った論文作成指導②		
5	各自のテーマに沿った論文作成指導③		
6	各自のテーマに沿った論文作成指導④		
7	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤		
8	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥		
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑦		
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑧		
11	各自のテーマに沿った論文作成指導⑨		
12	各自のテーマに沿った論文作成指導⑩		
13	中間報告会に向けての指導①		
14	中間報告会に向けての指導②		
15	本論文完成に向けての課題の確認と総括		
期末			
授業に関する連絡	本講は、課題発見・解決型学修であることを認識し、主体的積極的に授業に臨むこと。		
評価方法及び評価基準	中間報告会に向けての準備状況（50%）、中間報告会での発表内容（50%）		
事前・事後学習の内容	事前に各自の研究テーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。		
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅲ	副題	
担当者	大塚 秀実 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	<p>研究指導IIで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 大塚秀実の研究指導Ⅲでは、修士論文のテーマに沿った文献研究、フィールドワークを行い、データの収集と分析を行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	修士論文のテーマに沿った論文購読を行い、研究手続きに従った研究を実行し、それらを中間発表に結実させる。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー論文の執筆に向けて		
2	パイロットスタディから発展させた本論文作成への指導		
3	各自のテーマに沿った論文作成指導①		
4	各自のテーマに沿った論文作成指導②		
5	各自のテーマに沿った論文作成指導③		
6	各自のテーマに沿った論文作成指導④		
7	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤		
8	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥		
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑦		
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑧		
11	各自のテーマに沿った論文作成指導⑨		
12	各自のテーマに沿った論文作成指導⑩		
13	中間報告会に向けての指導①		
14	中間報告会に向けての指導②		
15	本論文完成に向けての課題の確認と総括		
期末			
授業に関する連絡	本講は、課題発見・解決型学修であることを認識し、主体的積極的に授業に臨むこと。		
評価方法及び評価基準	中間報告会に向けての準備状況 (50%)、中間報告会での発表内容 (50%)		
事前・事後学習の内容	事前に各自の研究テーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。		
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅳ	副題	
担当者	伊東 秀幸 (実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導Ⅲで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくよい洗練された質の高い論文完成に導くよう指導する。 伊東秀幸の研究指導Ⅳでは、修士論文完成を目指して、個別指導を中心に研究指導を行う。		
授業のねらい・到達目標	教員の指導を受けながら、論文の執筆作業に集中し、完成に向かう。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—論文の完成に向けて		
2	論文の完成に向けての個別指導①		
3	論文の完成に向けての個別指導②		
4	論文の完成に向けての個別指導③		
5	論文の完成に向けての個別指導④		
6	論文の完成に向けての個別指導⑤		
7	論文の完成に向けての個別指導⑥		
8	論文の完成に向けての個別指導⑦		
9	論文の完成に向けての個別指導⑧		
10	論文の完成に向けての個別指導⑨		
11	論文の完成に向けての個別指導⑩		
12	論文の完成に向けての個別指導⑪		
13	研究発表へ向けての指導①		
14	研究発表へ向けての指導②		
15	研究指導Ⅰ～Ⅳの総括		
期末			
授業に関する連絡	本講は、課題発見・解決型学修であることを認識し、主体的積極的に授業に臨むこと。		
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況 (50%)、研究発表会に向けての準備状況 (50%)。		
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。		
テキスト	必要に応じて設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅳ	副題	
担当者	伊東 正裕 (実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導Ⅲで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくよい洗練された質の高い論文完成に導くよう指導する。 伊東正裕が担当する研究指導Ⅳでは、これまでの研究指導を踏まえて修士論文の執筆するために指導を行う。		
授業のねらい・到達目標	教員の指導を受けながら、論文の執筆作業に集中し、完成に向かう。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—論文の完成に向けて		
2	論文の完成に向けての個別指導①		
3	論文の完成に向けての個別指導②		
4	論文の完成に向けての個別指導③		
5	論文の完成に向けての個別指導④		
6	論文の完成に向けての個別指導⑤		
7	論文の完成に向けての個別指導⑥		
8	論文の完成に向けての個別指導⑦		
9	論文の完成に向けての個別指導⑧		
10	論文の完成に向けての個別指導⑨		
11	論文の完成に向けての個別指導⑩		
12	論文の完成に向けての個別指導⑪		
13	研究発表へ向けての指導①		
14	研究発表へ向けての指導②		
15	研究指導Ⅰ～Ⅳの総括		
期末			
授業に関する連絡	本講は、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況（50%）、研究発表会に向けての準備状況（50%）。		
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。		
テキスト	必要に応じて設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅳ	副題	
担当者	寺沢 英理子 (実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	修士論文の作成指導を行う。研究指導Ⅲで行ったデータ分析をもとに考察を熟考し、さらに、論文の執筆を進める。最終的には、質の高い論文となるよう、十分にバージョンアップを繰り返す。それぞれの研究を進めながら、3回に1回程度、グループディスカッションの時間をもち、お互いの研究を深めていく。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 考察部分を熟考し、独自の視点を取り入れる。 2. 自分の研究を全体の研究の中に位置付け、今後の課題を見据える。 3. 修士論文の完成させる。 4. 研究の成果を発表できる。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション:論文の完成		
2	論文作成の指導①		
3	論文作成の指導②		
4	論文作成の指導③		
5	論文作成の指導④		
6	論文作成の指導⑤		
7	論文作成の指導⑥		
8	論文作成の指導⑦		
9	論文作成の指導⑧		
10	論文作成の指導⑨		
11	論文作成の指導⑩		
12	論文作成の指導⑪		
13	研究発表に向けての指導①		
14	研究発表に向けての指導②		
15	研究全体の振り返り		
期末			
授業に関する補足説明 (課題に対するフィードバック、履修上のルール等)	本講では、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	研究への取り組み (50%)、研究発表会での発表内容およびプレゼンテーション (50%)		
事前・事後学習の内容	論文全体の構成も鑑み、論文執筆とそのブラッシュアップに時間を割いてほしい。		
履修上の注意	体調管理に留意して、思う存分論文執筆に向かってほしい。		
テキスト	必章に応じて設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅳ	副題	
担当者	小山 望		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導Ⅲで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくよい洗練された質の高い論文完成に導くよう指導する。 小山の研究指導Ⅳでは、修士論文完成を目指して、個別指導を中心に研究指導を行う。		
授業のねらい ・到達目標	教員の指導を受けながら、論文の執筆作業に集中し、完成に向かう。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー論文の完成に向けて		
2	論文の完成に向けての個別指導①		
3	論文の完成に向けての個別指導②		
4	論文の完成に向けての個別指導③		
5	論文の完成に向けての個別指導④		
6	論文の完成に向けての個別指導⑤		
7	論文の完成に向けての個別指導⑥		
8	論文の完成に向けての個別指導⑦		
9	論文の完成に向けての個別指導⑧		
10	論文の完成に向けての個別指導⑨		
11	論文の完成に向けての個別指導⑩		
12	論文の完成に向けての個別指導⑪		
13	研究発表へ向けての指導①		
14	研究発表へ向けての指導②		
15	研究指導Ⅰ～Ⅳの総括		
期末			
授業に関する補足説明 (課題に対するフィードバック、履修上のルール等)	本講は、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況 (50%)、最終研究発表会に向けての準備状況 (50%)		
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく		
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。		
テキスト	必要に応じて設定する。		
参考文献	適宜紹介する		

科目名	研究指導Ⅳ	副題	
担当者	黒田 美保		
開講期	後期	単位数	2 単位
	配当年次	2 年次	
授業の概要	研究指導Ⅲで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくよい洗練された質の高い論文完成に導くよう指導する。 研究指導Ⅳでは、修士論文完成を目指して、個別指導を中心に研究指導を行う。		
授業のねらい・到達目標	教員の指導を受けながら、論文の執筆作業に集中し、完成に向かう。		
授業の方法・授業計画			
1	オリエンテーション—論文の完成に向けて		
2	論文の完成に向けての個別指導①		
3	論文の完成に向けての個別指導②		
4	論文の完成に向けての個別指導③		
5	論文の完成に向けての個別指導④		
6	論文の完成に向けての個別指導⑤		
7	論文の完成に向けての個別指導⑥		
8	論文の完成に向けての個別指導⑦		
9	論文の完成に向けての個別指導⑧		
10	論文の完成に向けての個別指導⑨		
11	論文の完成に向けての個別指導⑩		
12	論文の完成に向けての個別指導⑪		
13	研究発表へ向けての指導①		
14	研究発表へ向けての指導②		
15	研究指導Ⅰ～Ⅳの総括		
期末			
授業に関する連絡	本講は、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。		
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況（50%）、研究発表会に向けての準備状況（50%）。		
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。		
テキスト	必要に応じて設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		

科目名	研究指導Ⅳ	副題	
担当者	櫻井 優太		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	<p>研究指導Ⅲで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくよい洗練された質の高い論文完成に導くよう指導する。 櫻井優太の研究指導Ⅳでは、修士論文完成を目指して、個別指導を中心に研究指導を行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>教員の指導を受けながら、論文の執筆作業に集中し、完成に向かう。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション—論文の完成に向けて		
2	論文の完成に向けての個別指導①		
3	論文の完成に向けての個別指導②		
4	論文の完成に向けての個別指導③		
5	論文の完成に向けての個別指導④		
6	論文の完成に向けての個別指導⑤		
7	論文の完成に向けての個別指導⑥		
8	論文の完成に向けての個別指導⑦		
9	論文の完成に向けての個別指導⑧		
10	論文の完成に向けての個別指導⑨		
11	論文の完成に向けての個別指導⑩		
12	論文の完成に向けての個別指導⑪		
13	研究発表へ向けての指導①		
14	研究発表へ向けての指導②		
15	研究指導Ⅰ～Ⅳの総括		
期末			
授業に関する連絡	<p>本講は、課題発見・解決型学修であることを認識し、主体的積極的に授業に臨むこと。</p>		
評価方法及び評価基準	<p>論文執筆の遂行状況（50%）、研究発表会に向けての準備状況（50%）。</p>		
事前・事後学習の内容	<p>事前に各自のテーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。</p>		
履修上の注意	<p>授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。</p>		
テキスト	<p>各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。</p>		
参考文献	<p>適宜紹介する。</p>		

科目名	研究指導Ⅳ	副題	
担当者	大塚 秀実 (実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 2年次
授業の概要	研究指導Ⅲで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくよい洗練された質の高い論文完成に導くよう指導する。 大塚秀実の研究指導Ⅳでは、修士論文完成を目指して、個別指導を中心に研究指導を行う。		
授業のねらい・到達目標	教員の指導を受けながら、論文の執筆作業に集中し、完成に向かう。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクションー論文の完成に向けて		
2	論文の完成に向けての個別指導①		
3	論文の完成に向けての個別指導②		
4	論文の完成に向けての個別指導③		
5	論文の完成に向けての個別指導④		
6	論文の完成に向けての個別指導⑤		
7	論文の完成に向けての個別指導⑥		
8	論文の完成に向けての個別指導⑦		
9	論文の完成に向けての個別指導⑧		
10	論文の完成に向けての個別指導⑨		
11	論文の完成に向けての個別指導⑩		
12	論文の完成に向けての個別指導⑪		
13	研究発表へ向けての指導①		
14	研究発表へ向けての指導②		
15	研究指導Ⅰ～Ⅳの総括		
期末			
授業に関する連絡	本講は、課題発見・解決型学修であることを認識し、主体的積極的に授業に臨むこと。		
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況（50%）、研究発表会に向けての準備状況（50%）。		
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。		
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。		
テキスト	必要に応じて設定する。		
参考文献	適宜紹介する。		